
LEGEND アルザス編

まめ太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LEGEND アルザス編

【Nコード】

N3293U

【作者名】

まめ太

【あらすじ】

クーデターに失敗し逃亡中のアルザス王家第二王位継承者のセフ。五年後に彼が戻った時、祖国は危機に瀕していた。共に冒険してきた仲間たちをも巻き込み、因縁と復讐、謀略と愛憎の、複雑に絡んだ系は解けていく。

某所の皆様、ご協力有難う御座いました。冒頭部重点で改定作業中。

第一章 第一話（前書き）

最初の5行は絶対に譲れないコダワリなので、ご容赦ください。

第一章 第一話

今ではない時。

ここではない場所。

遠く、時間すら測れない過去。

遙か、地球ですらない場所で。

・・・そんな所で、物語りは始まった。

馬車は西を目指している。

国境を越えて、西の大国アルザスへ入ろうというのだ。

一行は疲れてはいたが、皆、元気だった。

「俺はアルザスへは入れない。山間の村があるから、そこで下ろしてくれ。」

若い戦士は、そう言って荷物をまとめ始めた。

魔法剣、ツイン・ファイア・ソードの使い手であり、手練れの幻獣使いでもあるこの青年の、多くのプロフィールは謎のままだった。

「セフ、確かアルザスの生まれじゃなかったのかい？」

大柄の美女、アマゾネスの戦士であるルシーダが、眉をひそめた。

黒い肌とちぢれた長い黒髪で、無造作に編み込んで後ろに流した髪型は、彼女の国での流行のヘアスタイルだった。筋肉は男並で、胸も豊満だが、惜しげもなく晒すような刺激的な服装をしている。豹皮の腰巻と、なめし皮で出来た軽量の鎧だけが彼女の装備だ。

それに、鎖鎌と、弓矢。

セフ、と呼ばれたアルザス人は、鼻で笑うと、初めて自身の事を語り始めた。

「・・・俺はアルザスの第二皇子だ。クーデターに失敗して逃亡中なのさ。」

戻れるわけがないだろう？

なぜそんな事になったかは聞かないでくれ。・・・知らない方が、

お前達のためでもあるしな。

首尾良く、例の薬草を手に入れたら、落ち合おう。それまではグレイス渓谷の村で息を潜めてるよ。」

夜の帳が静かに舞い降りようとしている時刻。

セフの青い瞳が、特徴のある光りを放って煌いた。夜行動物のように、この青年の目は夜になると輝くのだった。

「アルザスの情報を教えてくれよ。何でもいい、知ってる限りで。」
小柄な少年がセフに問い掛けた。

少年のように見えるが、これで、セフより年上だった。

彼はドワーフの血を引いている。武器の目利きは確かで、彼に任せ
ておけば、決して外れを引くことはない。そして、魔族にも詳しい
ため、戦闘には欠かせないメンバーだった。

名前はナッツ。通称であり、素性と共に、本名は誰にも言わない。
一行はもう一人、馬車の隅ですやすやと寝息を立てている少年を入
れた四人だが、遠く東のカルーア公国の田舎町に、残る二人の仲間
を置いて来ている。

眠っているのは、先の戦争で滅ぼされたグラン・シルバの王、アス
レイの息子ファイル。

ふと、ファイルの寝顔を見つめて、セフは重い口を開いた。

「・・・こいつとは境遇が似ている。」

だからかな、つい、肩入れしてこんな所にまでのこのこ帰って来て
しまった。

俺はお尋ね者だと言うのにな・・・。」

光る瞳が、宝石のように闇の中でその存在を知らしめている。誰か
が、外で火を起こした。

促されるまでもなく、皆、外へと移動する。寝ている者を除いて。

「ん・・・？」

気配に気が付いたのか、ファイルが目を覚ます。

「よ、子供は寝る時間だぜ？」

ナッツのからかうような台詞に、フィルはムツとしたように勢い良く跳ね起きてみせた。

照らし出されたそれぞれの顔。

一通りを見まわして、セフは続けた。

「まず、忠告しておこう。」

王宮には近付かないことだ。国王・・・俺の兄は、異常に好奇心が強い。

珍しいものは大好きな方だ。

どれほど苦労して手にした宝であっても、大枚の金貨に交換されてしまう。カルーアを出る時に、真実珍しい宝は置いてゆけと言ったな？ それは、このせいだ。」

なにやら、厄介そうな王様らしい・・・一同は眉をひそめた。

それだけじゃない、・・・セフの忠告はさらに続いた。

「ミーアとエシャロットも危ないから置いて来たんだ。・・・ハーレムには美女がひしめいているが、とにかく珍しい物が好きなお方だからな、・・・人間も同様だ。」

ミーアの変化の魔法、エシャロットの虹の目、共に見せたら最後だ。・・・ま、それさえなければ、国民にも慕われる善良な王なのだがな。」

「アンタが家出してるのも、そのせいかい？」

軽口でルシードが返すと、セフは笑った。

「捕まれば、今度は鎖で繋がれるだろうよ。兄上は俺の目にご執心だったからな。」

夜に輝く月の瞳が、また、煌いた。

朝になった。

一行はその場にセフを残し、アルザスを目指した。セフの事だから、一人にしても心配はない、皆、そう思っている。

問題は、厄介なアルザス王の方だった。

国境の関門、ここを抜ければアルザスだ。

「止まれ！ 馬車の中を検閲させて頂こう！」

どこも似たようなものだが、ここの役人の態度は中でも最悪に分類されるだろう。居丈高に命令すると、一行を馬車から引きずり出した。

「乱暴だねえ、」

それだけでなく血の気の多いルシーダは、もうイラだっている。

「なんかあつたんですかい？」

人懐っこい笑顔を作り、小人のナッツは役人に尋ねた。その袖口に金貨を一枚落とす事は忘れない。ちらり、と袖に目をやったこの細身の役人は、にんまりと笑って答えてくれた。

「なに、行方不明になっていた国王の弟君が、最近戻って来られたのさ。」

皇子を騙して担ぎ上げた連中が、騒ぎ出す事を警戒なさった国王が、警護を強化なされたのだ。せっかく追い出した反乱者どもが舞い戻らぬようにな。」

役人の言葉に、ナッツとルシーダは顔を見合わせた。

セフとは今朝、別れた。・・・ならば、今、宮殿にいるのは誰なのだろう？

「・・・行こう。ただ薬草を取りに行くだけでは済まなくなりそう
だ。」

一番年少のファイルが、決意を囁いた。

セフは近付くな、と言ったけれど・・・仲間の兄弟である王の身に、何やら不穏な影が伸びているものを無視するわけにはいかなかった。

アルザス第一の都はデュアス。けれど、都までは国境からさらに五つの町を抜けて行かなければならなかった。一つ目の大きな街を抜けた後、小さな村落を二つ過ぎたあたりで、日が傾き始めた。三つ目の村で、宿を探す。

「どうか一晩の宿をお願い出来ませんか？ 少ないけれど、お礼はさせてもらいます、」

ナッツはこういう交渉にも欠かせないメンバーであり、ほどなく、一行は村長の家へ上がり込む事が出来た。

「この村は宿がないのでなあ・・・窮屈じゃが、我が家で辛抱して下され。」

「いいえ、泊めてもらえるだけ有り難い事です。村長のご好意がなければ、我々、どうなっていたか・・・。」

謙遜してナッツが答えたその言葉に、この村長は真剣に頷いた。

「その通りですじゃ・・・この国の夜は恐ろしい。
最近になって、死人が夜になると歩き回るようになりましてな・・・
。うかうか野宿なんぞしておったら、死人に殺される事になるので
すじゃ。」

泊めてもらえる事になった三人は、互いの顔を交互に見まわした。
歩き回る死体・・・それは、ゾンビ化の魔法の特徴であり、術者が
この国に潜入している事を指している。

ルシーダが、小声でナッツに耳打ちした。

「・・・読めてきたねえ。」

皇子に化けたゾンビ使いがこの国に入り込んだんだ。それで、夜な
夜な術を掛けた死人どもを操っているってワケだね？」

「そんなモン、考える以前の問題だろうよ？」

それより、目的は何かってことだろ。」

気に障ったらしく、ルシーダは小人の胸倉を掴み上げた。

「二人とも！」

慌ててフィルが中へ割って入り、事無きを得る。

「でも、昼間は出てこないのなら、術者は強い奴じゃない。何の目
的で王宮に入り込んだのかを探ってみよう。」

村長には聞こえないように、声を落として二人に告げる。そして、
向き直って村長には、こう尋ねた。

「村長、王宮へ行き、国王に謁見するにはどうすればよろしいです

か？」

フィルの言葉を聞いた村長は、不安げに顔を歪めた。

「・・・あなた達、都へ行きなさるのか？」

国王様にお会いになるために？・・・悪い事は言わん、止めなされ。」

第二話

「何故ですか？ 御老体。」

「都では何か・・・重大な事件でも起きていますか？」

「フィルに詰め寄せられ、言い渡っていたこの村長も、ついに、口を開いて事情を話した。」

「・・・国王様は、重い病に伏せってしまったのじゃ。」

「今は、弟君が国政を取り仕切っておられるが・・・なにやら、王宮内にならず者を呼び集め、正規の軍隊は遠い国境の辺りに追いやつてしまわれて・・・どうも、おかしいんじゃ。」

「セフ様が帰って来られてから、この国はおかしくなってしまった・・・。」

「フィルは沈黙を守り、村長は念を押しして一行を押し止めると、続けて言った。」

「ま、夜は危なくて出歩けないが、昼間は何も以前と変わりはないのですじゃ。国王様の御病状は心配じゃが、良いお医者国中から集めて治療を受けておられるし、もう少し我慢しておれば、きっと良くなる。」

「国王様さえ、良くなれば、国を悩ませている全ての問題も、きっと、すぐに解決して下さるはずじゃ。」

「・・・ささ、食事の準備も出来ておりますで、どうぞ、どうぞ。」

「村長が扉を開けて、中に入ってしまうと、三人はまた、顔を付き合せた。」

「不安が過ぎる。」

「本物のセフは、今、一人で山間の村に向かっているはずだった。」

「・・・セフの事だから、さ・・・。」

「ああ、奴は強い。ゾンビ程度じゃ歯が立たないさ。」

「不安を隠せないフィルやナッツとは違い、ルシードは至って平然と答えた。」

皆の心配をよそに、当のセフは木の上に適当な寝床を見つけて横になっっていた。

下では、追い掛けて来た死人達がたむろしている。

「・・・木には登れないらしく、無駄に手を伸ばしているだけだった。やれやれ。キリがないぜ。」

辟易としたというように、セフは呟き、わずかな仮眠を摂るための眠りに落ちた。

うとうととしている。

浅い眠りの中でも、常に張り詰めた緊張はいくらかでも残してある。だからこそ、微かな悲鳴も聞き逃さなかった。

目を開ける。

そこからは敏速だった。

飛び降りざまに剣を抜き放つ。その剣は、炎を纏って燃え盛る。

自分の国の、元は罪のない死者達。だから、斬り捨てる事は嫌った。伸びてくる手を斬り払い、動きの遅い死者達の間をすり抜けて走る。動きを見切っていれば、どうという事もない。

見えた。

娘が一人、死人達に囲まれてもがいている。死人は力の加減も知らず、娘の手足を引く。

赤い閃光が走った。

娘の手足には死者のしなびた手首が掴まれたままの状態でくっついている。

恐怖に引き攣る娘の身体が宙に浮いた。

セフに放り投げられた娘は、一段高い崖の岩棚に転がった。

「土に返れ、死人ども！」

「火炎よ、来い！」

大地が裂け、マグマが顔を覗かせる深淵に、動き廻る死者達は吸い込まれて消えた。

地の精霊は何処かへ去る。

地響きと共に、大地は元に戻る。
けれど、どこからともなく、また、ぞろぞろと死者達は集まってくるのだった。

「ここへ！ 彼等は登れません！」
娘が叫んだ。

すぐさまセフはジャンプして、岩棚へ飛び移る。

「本当にキリがない。」
いまいましてに吐き捨て、下を見下ろす。

死者達は、真新しい死体から白骨まで、さまざまに出揃っている。
木と同様、高い崖なども登れないようだった。

「大丈夫です、朝日が昇れば・・・。」
そういえば、辺りは白く染まり始めている。

山々の間から、太陽の光が射し始めた。
死者たちは、染み込むように、その場の地面へと潜り込んでいった・・・。

今までの戦闘から分析しても、あまり高度な魔法が掛かっているわけではなさそうだ。死人たちはほとんど戦闘力もなく、なにより、昼間は動けないらしい。

困まると厄介だが、戦い慣れた者なら、対処出来ないほどでもない。

「死人使いが出没するのか、王国の兵はどうした？」

「・・・彼等はアルザスから流れ込んで来たのです・・・。
在る日、突然、夜になると死者が動いて歩き回るようになって・・・
始めは国境から先へは来なかったのですが、最近では山を越えて溢れ出して来るようになったのです。」

アルザスは強い国です。我が国の王は、手出しが出来ないので・・・。
・・・

娘の顔は悲しみに掻き曇り、その瞳からは一筋の涙が流れた。
アルザス側からは何の対策も取られてはいないという娘の言葉に、

セフは疑問を抱いた。

手癖は悪いが、政治はきちんとなしてきた兄が、そのような無責任な外交をしているとは思いい難い。セフは、故郷で何か起きていることを直感した。

「で、お前は何をしに、そんな危険な山の中へ入り込んでいたんだ？見た所、ただの町娘とも思えんが・・・。」

「ああ、助けて頂いたお礼もまだでした。

私はこの国の王女です、護衛の兵は、皆、魔物に倒されてしまい、もう駄目かと諦めかけていたところを、貴方様にお救い頂きました。東の山郷にある、冥界神の神殿へ書物を探しに行くところだったのです。」

娘は慌てて涙をぬぐい、セフに答えた。

東の神殿・・・セフは思考をたぐり、深い谷間に造られた石造りの岩窟神殿を思い出した。鬱蒼と繁る黒い森、嘆きの森と呼ばれ、色々と厄介な魔物が多く生息している場所だった。

無理だとは言わないが、女連れでは少々危険過ぎる。

「送ってやろうと言いたいところだが、今は無理だな。仲間と合流した後ならば、連れて行ってやれるが。今日のところは大人しく城へ戻るがいい。」

娘は悲観したような目でセフを見つめた。

「どうしても無理でしょうか？

あの神殿の書物倉には、きっとこの邪悪な魔法に打ち勝つ方法を記した書があると思うのですが・・・！」

「無理だ。俺はこの辺りを少々なら知っているが、それでなくとも危険な場所だ。

昔でさえ、そうだったんだ、今はどうなっていると思う？　とうてい一人で渡れる場所じゃない。」

姫君は俯き、諦めたように黙り込んだ。

確かに、あれだけ居た護衛の兵すら、一人も残らなかった。この見知らぬ男の言う通りだと思ったのだろうか。

セフは姫の手を取り、崖から降りる手助けをしてやった。

「この先に里がある、そこまでなら送ってやるわ。」

ケモノ道が少しばかり開けたような、ささやかな道路を伝って、二人は里へと降りて行った。

のどかな山里の風景が広がっている。人々は畑に出て作物を育て、子供たちは羊を追って暮らす、典型的な農村。

「おや、姫様じゃないですか？」

こんな所までお一人で出歩かれては危険で御座いますよ。」

農民の一人が声を掛ける。

姫は振り返った。

すでに姫を助けた男の姿は消えていた。

姫君を安全な場所へと導いた後に、セフは一人で国境付近に戻っていた。

山を越えて、アルザスへ侵入する経路はまだ閉ざされてはいないようだった。

どうやら、例の死人達への対処に精一杯で、国境警備どころではないらしい。

これから違法に国境を越えようという者には好都合だったが。

念入りに下調べをした後に、改めて国境沿いの町へ引き返す。出立は朝にするつもりで、今日中に買出しを済ませておこうと思ったのだった。

他にも情報を拾っておけるなら、それもいい。

なにせ、自分はお尋ね者なのだ、アルザスへ入ったら自由に行動することもままならない・・・、セフは町へと続く道を急いだ。

グレイス渓谷のローファン村には使いを送っておこう、連中が先に着いたなら、事情を知った彼等が、後は判断を下すだろう。

小声で呪文を唱えると、セフの口からは微かな煙が漂い、その煙を指先に巻いた。続けて伸ばした手の上には小さな幻獣が乗っている。

「ゆけ、」
解き放つと、その白い獣は羽を広げて飛び立った。

第三話

アルザスへ入ったフィル達三人は、朝になって村長の家を辞した。泊めてもらったお礼にと、いくらかの金貨を渡そうとしたが、村長は笑って辞退した。

「この村は平和なもので、作物も豊かですじゃ。そのようなつもりでお泊めしたわけでもなし、要らぬ気遣いは無用で御座いますよ。」
それだけでなく、村長の妻は一夜の客として迎えた一行の為に、お弁当まで作ってくれた。

「城へ入るうなどとは思わぬ方が良いが、首都のデュアスへはぜひ立ち寄られるがよろしかろう。なにせ、このアルザスの首都、いいや、この西の大陸一の都と名高い場所ですよのじゃ。」
村長は、なにやら自慢げにそう勧めた。

アルザス人にとって、この国第一の都は、彼等の誇りそのものなのだった。

月の霞む都デュアス、夜にもなお明るいこの都市を、諸国の民はそう呼んだ。

「ええ、ぜひ、立ち寄ってみたいと思います。」

お世話になりました。この出会いは決して忘れません。」

フィルは素直に、感謝を言葉にして村長に告げた。見知らぬ人の親切に触れるのは、心地良いものだと思っっている。

「有難うよ、ウチの部落に来るような事があつたら、ぜひ、寄ってくれ。精一杯もてなすよ。」

ルシーダも社交辞令抜きに感謝を現わし、村長の手を固く握った。

「さあ、そろそろ行こうぜ！」

ナッツの掛け声に、二人もようやく馬車に乗る。

村長とその妻、駆け付けてくれた村の子供達が、いつまでも一行を見送ってくれた。

「・・・彼等のためにも。」

なんとか、この事件を解決するための協力が出来ないものでしょうか？」

「そうさな。村長はああ言ってたが、死人どもがうるうるするんじや、おちおち安眠も出来やしないだろう。」

腕組をして、ナッツは思案に耽り、低い唸り声を上げた。

夕チの悪いことに、その死人達はこの国の住人には縁の深い者ばかりなのだ。

皆、平気そうな顔をしていても、心の中では苦しい思いをしているに違いない。

一行は、その後、三日を掛けて首都のデュアスに到着した。

活気のある街だった。

村長から聞いた通り、確かに西の大陸一の都市だと言えそうだ。

喧騒、人込み、行き交う荷車の数も、今まで通って来たどんな街より数倍も多い気がした。

通りにずらりと居並ぶ行商の店先には、これも今まで見たどんな宿場よりも豊富な品々が揃えられていた。

・・・そして、これもいつもの事ではあったが、こういう場所へ来ると、ナッツの悪い癖が騒ぎ出すのだった。

「なあなあ、ちょっとだけでいいから、見に行つていいか？」

瞳を好奇心でキラキラと輝かせながら、小柄のドワーフ族はフィルに尋ねた。

装飾品、武器、防具・・・元々職人気質のドワーフには堪らない場所なのだった。

「ああ、ならば早めに宿を決めますから、その後でゆっくり見に行つて来て下さい。」

笑いながらフィルは答え、手頃な宿屋を物色し始めた。

そんなフィルに、何やら胡散臭げな男が声を掛ける。

「あんた等、さては田舎者だな？」

なにもわざわざこんな喧しい所に宿を取ろうなんてよお、上の神殿

区域に行きやあ、いくらでも上等の宿があるつてのに……。」
振り返ったフィルの見た限りでは、男は腹に一物も二物も抱えてい
そうな危険な匂いのする兵士だった。兵士と言っても正規の兵隊で
はなく、傭兵崩れと言った感じた。
にやにやと嫌な笑いを頬に貼り付けて、男はフィルの肩を抱いた。
「……なんなら、もつといい穴場を教えてやってもいいぜ？
歓楽街のまっただ中にある、極め付けの掘り出し物つてえ宿だ。ど
うだい？」
「乗った！」
フィルの後ろからナッツが叫んだ。

「何を考えてんだろね、この色ボケ野郎は。」
「ち、違つて！ 情報が欲しいだろ、まずは！
そんなら、まずは盛り場と相場が決まってるだろうが。」
ルシーダが小声で文句を言うのも解かるのだが、ナッツの言葉にも
一理あるのだった。
庇うわけではないが、フィルも一言添える。
「まずは酒場、色宿、商隊宿、……最後は神殿、といった経路で
しよう。」

あながち、ナッツの言う事も間違いじゃないよ。」
「そーだろ、ほれ、見ろ。」
「チツ、」
得意げにナッツは胸を張り、ルシーダは忌々しげに舌を巻く。

「話がまとまった所で、案内していいのかい？」
男は顎をしゃくり、先を促した。
馬車をゆつくりと進めながら、男の先導に従って行商街を抜け出る。
大きな河に架けられた石造りの立派な橋を渡りきると、そこから先
は毒々しい色合いをした歓楽街だった。
柱ばかりでなく、この辺りは床の敷石までが、紅色で染められてい
る。柱には切ったばかりの花が飾られ、通りを行く人々も、さきほ

どまでとは種類が違って見えた。

夕暮れが近付くにつれ、通りの石造りの街燈には火が入り、夜の町の表情を現わし始める。

それと共に、先ほど通った石の橋が封鎖され、代わりに運河のあちこちに、即席の港が開かれてゆく。

傭兵風の男は言った。

「最近では死人が街中までうろつきやがるから、物騒なもんだ。大抵はこの時分から宿と女を決めて、一晚貸切つてのが、お決まりのコースなのさ。」

あんた達はどうする？ 俺のお奨めの宿へ案内していいかい？」

「任せるよ、どうせアタシは関係ないからね。」

馬車の中から顔を出したルシーダが、不貞腐れたようにそう言った。「はっはっはあ！ ここデュアスを、そんじよそこらの街と同じに思っつてんだよ！」

・・・何だつて買えるぜ？ 女はもちろん男も子供も、ケダモノが良けりや、馬から猫から、何だつてな！」

危なげなその口調に、ルシーダは鼻白んで黙った。とんでもない街だ、と思っただようだ。

「ほら、見えたぜ。あの宿だ。」

一等目立った作りの大きな建物が、周囲の街並みから飛び抜けてその存在を主張していた。

「連れ込み、変態技、何だつてOK。」

もちろん、普通に泊まるだけの客も大歓迎。

・・・ようこそ、いらっしやいてな。」

にやけた笑いのまま、男は厩の門を開けて、扉を開いた。

「話が巧いと思ったら、ここの客引きつてワケかい？」

呆れたようにルシーダが尋ねると、男は悪びれもせず頷いた。

「三名様、御案内つてね。」

最近では世知辛いもんでな、遠出してでも呼び込みしなきゃ、日当になんねえのさ。」

宿で割り当てられた部屋は、なかなか快適なものだった。三人という半端な数は結構嫌われるものだが、さすがに大都市だけあって、きちんに対応している。

御丁寧に、女であるルシーダのためにと、衝立を用意してくれた。

「セフも来りや良かったのに。滅多に当たんねえぞ、こんな上等な宿。」

ナッツの一言に、フィルも自然に口元が緩む。

「値段の割には良心的ですね。高い部屋代に、ベッドは四つだけという時もあったし。」

「そうそう、俺とセフが負けて床で寝たんだ。」

六人部屋にベッドが四つしかなかった時は、喧嘩腰で宿を出るか、呪いを掛けながら眠りにつくかのどちらかだった。くじ引き、じゃんけん、どちらの場合も負ける者はいつも同じになりがちだ。

疲れているから、喧嘩よりは諦める。多くの宿場はそんな旅人の足元を見た。

月ですら霞んで見えるというこの都市は、そんな通説をいとも容易く覆す。

ふかふかのベッド、洗濯したてのリネン、手入れの行き届いた室内。・・・お尋ね者でなかったなら、この街を出ようとは思わないに違いない。

豊かで平和な国、良心的な人々。

・・・それを誰かが崩そうとしている。

「さっきの男・・・下の酒場に居るでしょうか？」

フィルはナッツに問い掛ける。こういう場所での人々の行動は、フィルにはなかなか読み辛い。

こういう場合、知り合った相手には片端から情報を聞き出してみるものだが、旅慣れないフィルは、いつでも人を捕まえるのに一苦労するのだった。

一方、場慣れしたナッツの方は、そういう辺りもやたらと詳しいの

だ。

第四話

男から情報を引出したいと考えているホルの心を察したものの、ナツツは意外そうな顔をした。が、すぐに答えてくれた。

「ああ、謝礼はたっぷり弾んでやったからな、下で景気付けに一杯やってるだろうぜ。」

「・・・しかし、意外だなあ。お前がそんな話に乗るなんて、考えもしなかったぜ。」

「え？」

ナツツは笑いながら、懐に手を突っ込み、重そうな皮の袋を取り出した。中からは、綺麗に細工されたブレスレットが現われる。

「ま、片手間に作ったオモチャだけど、持って行きな。女に渡してやれば、喜んで色々話してくれるはずだぜ。コトのついでに何か聞けたら儲けモンだろ。」

ナツツは、フィルがあの子を紹介させるのだろうと思っていた。

「い、いや、僕は・・・！」

「いって、いって。」

お前ももうそんな年頃だもんな。別に早くなんかなくて。」

ついにフィルは、聞く耳を持たないナツツに、部屋から追い出されてしまった。

一緒に居たルシードまでが、にやにやと、止めてもくれなかった。

「・・・どうしよう・・・。」

部屋の扉の前に、フィルは途方に暮れた。

仕方なく、階下の酒場へ降りてゆく。

宿の備えであるこの酒場は、連日、泊り客と暇になった従業員などでごった返しているらしい。

男を見付けた。

「隣りに座ってもいい？」

フィルは返事も聞かずに開いていた席に腰掛けた。

「よお、昼間の・・・何だっけか？」

「フィルだ。貴方は？」

「俺はグラント。ここに雇われた用心棒兼、客引きよ。・・・お仲間はどうしたい？」

それには答えずに、フィルはナツツに渡されたプレスレットを見せた。

「これを、あげる相手を紹介して貰えないかな。」

グラントと名乗った男は、細工の腕輪を手に取って、しげしげと眺めた。

「・・・ほー、こいつは良い品だ。」

腕利きのドワーフの銘だな。・・・高いシロモンだぜ？ やっちまうていいのかい？」

男は、さも勿体無いという顔をしてそう言った。作った表情というわけでもない。

心底、フィルの行動が気に食わないのか、咎めるような視線を向けてくる。

まずは上出来、フィルの思った通りの反応だった。

悪い人間ではない事を確かめておきたかったので、少々回りくどい手を使ってみた。

悪党なら、これを巻き上げる手立てを思案し、それが表情に表れる。「いいんだ。・・・でも、その前に、一杯奢らせてよ。」

これは、冒険者の間での慣用語。

情報を引出すための決まり文句というべき言葉だった。

グラントも、心得ていたようで、にやりと笑うと杯を差し出した。酒と引き換えに、いくらかの情報を提供してやろうという答えだった。

フィルは慎重に質問を選んだ。

「・・・そうだね・・・、国王の病気とか、知ってる？」

「ああ、国中がその話で持ちきりだからな。夕子の悪い熱病だそう
で、命に別状ないのが幸いだって話だ。・・・ここだけの話、呪い
じゃないかなんて言う奴等もいるな。」

奢られた酒を一気に飲み干し、男は話した。

ファイルは空になった杯に、もう一杯、継ぎ足す。そうしておいて、
また、質問をぶつけた。

「国王の弟君が帰ってきて、代理を務めているって聞いたけど、そ
れと例の死人たちが現われたのが、同じくらいの時期なんだってね？
それって・・・」

「しっ、声が高い。・・・滅多な事言うなよ、聞かれたらコトだぞ
？」

グラントは、急に慌てた様子で辺りを窺がった。

聞かれては拙い、とは誰に対してなのか。

「国中に、情報屋が潜んでやがる。」

不穏な発言なんか言おうもんなら、たちまち聞き付けて皇子に売り
つけやがるんだよ。・・・俺の仲間も、何人か捕まって追放の目に
逢っちまった。

何か目的があつてこの国に来たんなら、余計な事は言わねえ方がい
い。

目的を達成したいんならな。」

「では・・・、もしかしたら、その皇子は贗物ではないか、などと
いう話は・・・？」

声を極力落として、それでもファイルは食い下がった。

「・・・バカじゃなけりや、本物がそんな事する必要がない事くら
いは見当がつくんじゃねえのか？」

皆、言わないだけで、疑ってるんだよ。信用してるのは、兄上様お
一人って話さ。」

さらに声を小さく、囁くようにして男はファイルに返した。

グラントは、ここで声をもとに戻して何気ない事のように話し始め

た。

「皇子はなんせ、前料がおりになる。

噂が気に掛かるのは仕方がないさ。国民はそんな昔の、一部の反王権主義のヤツ等に騙されてやった事なんぞ、とうに忘れちゃってるんだけどな。」

「クーデターが起きたそうですね、・・・話してもいい話題？」
少し、躊躇してフィルは尋ねた。

突然、話を変えたのは、何者かが聞き耳を立てているのに気付いたかららしい。フィルも、こちらを窺がう鋭い眼差しには気が付いていた。

「あれはもう五年も前になる・・・。皇子はまだ十五で、世間の事もろくに解かつてはいないような年頃だった。若くして王位に就いた兄王には、反抗してばかりだったらしい。

・・・そういう事を利用されたんだ。

王家を潰して共和制を樹立しようとする、一部の反王権派の組織に担ぎ上げられた事でクーデターが起きた。政治の実権を市民の手になんて謳い文句でその実、一部の豪商や地主が王に代わって権力を取るうというだけの内容だった。・・・追放された連中ってのは、そういう地主や商人どもだよ。」

詳しい話は初めて聞いた。

セフの言いようでは、何やら、まだきな臭いものが残っているとでも言いたげな口調だった。

フィルは仲間を信用している。セフがああ言うのだから、このクーデターの件は、まだ片付いたわけではないのだろう。だからこそ、首を突っ込むなと忠告されたのだ。

「ありがとう、・・・最後にひとつ、聞きたいんだけど。」

フィルは、少しばかり躊躇して・・・そして、思い切って口に出した。

「王宮に入り込む方法はないかな？」

グラントは、目を剥いたきり、沈黙した。

手酌で酒を注ぐ。

おもむろに、この傭兵は口を開いた。

「・・・あるぜ。」

皇子が逃走の時に使用した地下通路が、神殿地区のどこかと城をつないでいるって噂だ。

だから、神殿地区は厳重な警備がなされているが、実のところ、本当の出入り口は警備されちゃいないのさ。」

「それはどこにあるんです？」

「南の渓谷にある古い岩窟神殿さ。何十、何百という寺院が、岩の洞窟を利用して彫られているが、そのうちのひとつが秘密の仕掛け扉になっていて、城のどこかに通じているそうさ。」

南の渓谷と言えば、正規軍が追いやられた地域に当たる。

渓谷を挟んで、向こう側には政治不安定の小国がひしめいている。

いつ、小国同士で火がつくか解からない状態が続いているという。

そんな中に、脱出口があるとは意外だった。それより意外なのは、このグラントという傭兵崩れの男が、そんな事まで知っていた事だろう。

「・・・あなたは何者なんです？」

そんな情報を、どうやって知り得たんですか？」

ファイルは、今度こそ最後となる質問を男に問い掛けた。

「なあに。」

俺は、逃亡した皇子の悪い連れなのさ。」

グラントは、笑いながらそう言った。

第五話

少しだけ時間を戻そう。

国境付近、小さな村落。

酒場の中にセフの姿がある。見知らぬ旅人と、なにやら熱心に話しかんでいるのは、大国アルザスの現在の情勢についてだった。

「そうそう、胡散臭い連中は片っ端から追い出されてるってさ、国政の連中の考える事ってな、解んねえよなあ……。皇子もまた、懲りずにクーデターでも起こそうってのかねえ？」

「そうか……。そう言や、もう5年も経つんだっけな……。」
憂鬱そうに視線を落として、セフが呟いた。

旅人は頷きながら、独り言のように喋り続ける。

「地主やら商人の元締めやらが消えてくれたお蔭で、国政もやりやすくなったみたいだが、庶民の暮らしは何も変わらないってんだからな。……。結局、得をしたのは上の連中だけって事さ。」

旅人は一気に酒を煽ると、席を立った。

もう、出掛けるのだらう。最近は例の死人達のせいで、旅人の出立が早い。

朝から酒を煽るのは、景気付けのようなものだ。

「アンタが言ってたガルバ氏なら、一線から退いて田舎の町へ籠もっちゃったみたいだぜ。……。なんでも、『押し込め』になっちゃったらしい。何をやらかしたのは知らんがな。」

「……。もう行くよ、御馳走さん。」

旅人が挨拶代りに片手を上げると、セフもそれに習って手を上げた。

「幸運を。」

「お互いな。」

そろそろ出よう、という時になって、セフは肩を掴まれた。

「よお、良い情報があるんだが、買わないか？」

冒険者などやっている、時折、こういった連中に声を掛けられるものだ。

「・・・ネタによるな。」

「アルザスでの宿、てな話だが入り用だろうか？」

どうも、足元を見られたらしい。セフが訳有りでアルザスに入れな
いの見破ったのだらう。それとも、ここは特にそういった連中が
多くなむるするのもかも知れない。

少し考えてから、セフは答えた。

「・・・買おう。」

男はくい、と顎をしゃくると、先に立って歩き出した。

場所を変えようという辺り、きつと、何かの組織だらう。

二人はしばらく歩き、うらぶれた民家の前へと辿り付いた。ここが、
彼等のアジトなのだろう。

奇妙なノックをした後、中の人間と小さな声で会話する。男が一步、
下がると、扉が開いた。

「来な、手引きのエキスパートを紹介してやるぜ。」

フン、・・・セフは鼻で笑い、けれども言われるままに中へと入っ
た。

シロウトではあるまいし、手引きなど却って邪魔にしかならないの
だが、何か情報が得られるかも知れないと考えたのだ。

「なんせ、ワケ有りの連中は厳しい警備の際を突くのがやつとだ。

しかも、国内に入れば途端に窮しちまう。・・・アルザスには盗人
宿の類はねえからな。」

兄王は、国政の第一に犯罪撲滅を謳った人物だった。アルザスは、
犯罪者に厳しい。

だからこそ、セフも迂闊に故郷へは近寄らなかつたのだ。

盗人宿、と巷で言われる面接フリーの宿屋など、犯罪者の温床にな
りかねないこれらの宿も、兄の代で全て潰されたはずだった。

今ある宿屋は、皆、分厚い手配書と照らし合わせた上で書類を作成
して、利用する事になっている。国へ戻った連中は、まず、隠れる

場所がないために燻り出される。

「盗人宿が出来たとは知らなかったな……。よく協力者が居たもんだ。」

「金に困った奴つてのは、何でもするもんなのさ。……少々、高いもんに付くぜ？」

構わないか？、と聞かれ、セフは曖昧に頷いた。

どこぞの屋根裏にでも失礼するつもりだったが、ベッドがあるならそれに越した事はない。

「……ひとつだけ、守ってもらう事がある。

もし、ガサ入れに会ったら家の者を人質にして逃げる、それだけは必ず果たしてもらおう。

手引きがバレると後に続く者が迷惑だからな。念を押しとくぜ？」

「ああ、バレなきゃいいんだろ。」

面倒臭そうにセフは答え、男は鼻を鳴らした。

組織のルートは意外な所からだった。大規模な灌漑工事の末に出来上がった、古い煉瓦造りの下水のアーチ、その中を通るというものだった。

確かにこれなら、関門も、街中も通らずに済む。……しかし。

「この臭いはどうにかなんのか？」

吐き気がしてきた……。！」

ネズミの死骸が浮かぶ下水の浅瀬を渡りながら、セフは鼻をつまんだ。

「警沢言ってんじゃねえよ。

おおっと、ひとつ、忠告しといてやるが、夜はここを通らない方がいいぜ。なにせ、ネズ公の死骸が山になって襲ってきやがるからよ！」

動物ですら、術の範囲に含まれる……。それは、術者の未熟を露呈する。

高度な技術を持つネクロマンシーなら、狙ったレベルの戦士だけを

操るものだ。このように、有象無象にまで術を掛け、無駄な魔力を消費したりはしない。

・・・逆に言うなら、それだけ膨大な魔力を、どのように補給しているのか、が問題だ。

「まさか、な・・・。」

一瞬、浮かんだ疑念を振り払う。

いくらなんでも、それほど愚かな人間など居はしないだろう。・・・まさか、魔神と契約を交わす、などと・・・。魔物の持つ力を借りる代りに、願いが叶った時には魂を奪われ、地獄でひき潰されるのだと言う。人間の絶叫が、魔物たちの好物なのだ。

自分の魂を引き換えにするそれらの禁呪は、よほどの恨みを抱く者にしか用がないはずだった。アルザスや、兄王に、それほどの恨みを受け心当たりはない。

「着いたぜ、この上だ。」

立ち止まった男は、また、顎をしゃくつて、頭上を指差した。

「羽目板を押せば、民家の地下室に入れる。

入ったら、すぐに門をかけて、夜を待ちな。・・・部屋へ案内してくれるはずだ。」

「礼金は？」

懐へ手を伸ばしたセフの肩を叩く。

表情からして、もう、たんまりと貰っていると言った顔つきだったが、男は手を出した。礼金とは別口と言いたいらしい。決して安くはない手間賃を取ると、男は引き返して行った。

「金は中で交渉するんだな、」

男の捨て台詞だ。

・・・どうやら、家人にも渡すものらしい。

法外な値がついた宿は、しかし、金の割りには粗末な部屋だった。

リネンやシーツは薄汚れているし、窓枠には埃が積もっている。その上、天井をネズミが駆け回っているらしい。

それでも、ネズミが腹の上を駆け抜けてゆくような屋根裏よりはマシだろう。・・・そう思つて、諦める事にした。暗がりでは解らないが、たぶん、物置き部屋だ。

あの連中には悪いが、明日の朝、ここの家人を脅して部屋を分捕ろう、セフは心に誓つていた。

恐喝紛いの立て籠もり犯が、こんな物置に寝泊りなどするものかどうか、考えれば解りそうなものだ。なにより、掛かった金に見合う部屋を提供されてしかるべき、と思つてゐる。

考えるほどに煮えてくる腹を抑え、セフは眠りについた。

そして、翌朝、昨夜の誓いの通りに、この家の家人を集め、とくとくと語つてやつたのだった。

表通りが見える二階の一室。

朝になつてセフが移動した、この家で一番上等な部屋。ここからなら、警邏の様子が手に取るようによく見える。

本物の立て籠もりでも、まず、ここに居座るだろう。

「御主人、忠告しといてやるが、今度から客を泊める時はここにするんだな。出来るだけ豪勢な食事を出して、客が居る間の外出は控えることだ。・・・もしバレても、疑われずに済む。」

窓の外を見張りながら、家人の前に大粒のルビーを弾いて遣した。次に天井を見る。大きな天窓があり、屋根からの出入りが可能だと教えてゐる。

「・・・俺は昼間は外へ出る。」

夜、あの窓から戻るから、いつも通りに戸締りはしてもらつて結構だ。裏口はあるか？」

家人の一人が頷いた。

「迷惑は掛けん。もしもの時は、警邏に助けを求めて保護を願え。・・・じゃあ、とりあえず、飯でも貰おうか？」

これで、アルザスでの拠点は確保した。

軽く食事を流し込んだ後、セフは言葉の通りに町へ出た。

犯罪者とは思えないほど、堂々と通りを歩く。警戒などしてゐては、

却って怪しまれる事を、この冒険者は知っていた。
久しぶりに王宮の傍まで行ってみる。・・・物々しい警戒と、見る
からに胡散臭げなならず者達。
兄の様子が気に掛かった。

第六話

かつて、この国の権力を欲しいままにしていた宰相ガルバは、引退後に地方の街へ引き籠もった。来訪する客を退け、屋敷に閉じ籠ったまま一步も外へは出て来ない。まるで、何かを怖れるように、震えながら過ごしていた。

そんな彼の元へ、ある日、ついに運命の旅人は来訪した。

「・・・お前には・・・、悪い事をしたと・・・、
思って、いる・・・」

途切れ途切れに紡ぎ出された言葉は、恐怖の色を帯び、蒼ざめた老人の顔にはじつとりと汗が浮き上がっている。

「あれは・・・、あの指示は、わしではないのだ・・・
本当だ、・・・あの命令を下したのは・・・」

来訪者の投げた剣が、老人の胸を貫いた。
その細い影、唇が「知っている、」と、音もなく答えた。

血の臭いを感じて、セフは走り出した。

古びた屋敷は壮大というより一種不気味に静まり返っている。

大聖堂、ステンドグラスの光が床にまで射し込み、倒れた老人の上にも色とりどりの影を落としている。一步、踏み出した。

突然、頭上から襲い来る刃。

抜きざまに受け流し、その場を飛び退く。

細身の影は黒づくめの衣装で身を包み、その顔は知れない。・・・
アサシン、それも特殊な訓練を経た一級の殺し屋だ。

並の相手とは殺気が違っている。

セフの剣は、手で二本に別れ、両刀となる。

炎を纏う剣、ファイア・ソード。持ち主の魔力を受けて、ごう、と燃え盛る。

両者が再び激突した。

人間離れた跳躍で炎を避け、壁を蹴って背後からセフを襲う。これを、身を返して剣を避け、返す刀で斬りつける。互いの刃が鋭く交差し、火花を散らした。

と、緊張が同時に途切れる、聖堂の外を走る複数の足音、……こちらへ向かって来る。

黒ずくめの暗殺者は、渾身の力でセフの剣を叩き、跳躍した。窓を破って逃げる。

ちら、と老人に目をやったセフも、続けてその窓から飛び出した。老人の周りに出来た血溜り……びくりともしない身体。

ガルバは、死んでいるようだった。

森の中をアサシンは飛ぶように抜けてゆく。枝から枝を渡り、放たれた矢のように一直線に突き進んでゆく。それと同じ軌道を、寸分変わらずセフが追ってゆく。

銀色の閃光。

セフはとっさに方向を変え、数本のニードルを避けた。

木々の枝がざわざわと鳴っている。

「……逃がしたか……」

いまいまして舌を打ち、前方を見透かす。

もう、追いつけないだろう。

続いて、器用に枝にぶら下がり、ニードルを一本、引き抜いた。・

・先端には毒が仕込まれている。アサシン専用の武器、闇市でしか取引のないアイテム。

セフは、それを投げ捨てた。

……ガルバは重大な秘密を握っていた。

5年前のクーデター、仕組んだのはこの老人だった。裏で糸を引き、自分だけは安全な場所で、事件の後には知らぬ顔を決め込んだ。

躍らされた数人の若い近衛と、役人が死に、多くの地主や商人が追放された。

セフ自身も、密かに国を脱出したのだ。

それをきっかけに、多くの産業が国産化され、利益は国が独占した。地主や商人の特許を全て剥奪したのも、クーデターの後だった。思い切った政策を断行するために、生贄にされたのだ。

アルザスは豊かで平和だったが、国力は逼迫していた。富の大部分は有力な地主や商人に流れ、国は軍隊を養うために疲弊していった。国庫は底をついているような状態だった。

・・・クーデターによって、一番の利益を得た存在・・・それは、アルザス王国だ。

セフが、そのカラクリを知ったのは、ほんの数ヶ月前だった。

そして今日、問い詰めようと思っていた矢先に、ガルバは殺された。恐らく、口を封じられたのだろう。

ガルバの屋敷に引き返す。

まだ、警戒と包囲網は敷かれてはいない。屋敷はパニックに陥ったらしい。

再びの侵入者をいとも容易く許してしまう。

使用人達は、噂話をしきりに繰り返している。5年前のクーデターで死んだ、一人の魔族についての噂だった。

「・・・シエナ・・・」

魔族の女性だった。

魔力は弱々しかったが、絶世の美貌で、兄王の寵妾となった。

いつも、哀しげな瞳をして俯いていた。そして、彼女に与えられた部屋は、結界の中にあつた。

仲間達に告げた言葉・・・捕まれば鎖で繋がれる、というあの台詞は、決して嘘でも誇張でもない。愛情の深過ぎる兄は、それ故に、人を縛る。

・・・可哀想な人だ、と思っていた。

きつと今も、野放し状態の、この弟が気掛かりでならないのだろう。愛する女を、逃げ出すことのないようにと、結界の中に閉じ込めた

この兄なのだから。
天井の梁にひっそりと身を隠し、下の様子を伺っているセフ。
主人の死を囁きあう使用人達の声。
崩れた瓦礫の下敷きになって死んだ、あの魔女の呪いだ、と人々は
噂している。
クーデターの戦いに巻き込まれて死んだ彼女を、セフは自分が殺したのだと思っていた。

人々が寝静まった頃に、ようやくセフは梁から降りた。
誰も居ない大聖堂。

個人の屋敷に、なぜこんな物を造ったのか・・・恐らくは、罪の恐怖から逃れるためだろう。

ガルバもまた、魔女の呪いに怯えていたのだ。
だが実際は、こんな物など何の役にも立たなかった。

ぼんやりと光る発光体を魔法で作り出し、宙に浮かべると、セフは改めて周りを見廻した。

かつては結界が張られていた痕跡を、空気の中に感じる。

暗殺者は、そのような物などいとも容易く破ったのだろう。

第1級のアサシン・・・その殆どは魔法を使う。純粹な魔族か混血だと聞いた。

魔族の血は、人間の血よりも優れた血統を紡ぎ出す。幾つかの特色・

・魔力と美貌をもたらした。この世界で、魔法が使える者は、魔族か混血のどちらかだけだ。

そして、セフとアルザス王も、その血の半分が魔族のものだった。

聖壇の後ろに仕掛けがあり、組み木のカラクリ扉がタペストリーの裏にあった。

セフは少し考え・・・組み木を動かし始めた。

カチ、カチ、カチ・・・

複雑なパターンを慎重に解いてゆく。

ガルバの紋章が組み合わさった時、カラクリ扉が音も無く開いた。

発光体を前へ行かせ、その後続く。
階段は長く、下へ下へと延びている。
・・・やがて、大きな広間へ出た。

普段から使用されているらしく、広間は清潔に保たれていた。

毛足の長い豪華な絨毯、客間と同じ立派な調度品、天井のシャンデリア・・・ガルバ自身が、ここで過ごしていた事を物語る。

アナグマのように、こんな地下室に閉じ籠って隠れていたのだろうか？

恐らくは違う・・・、ここには生活臭がない。別宅のような物だろう。

この部屋が何の為にあるのか、薄々、セフは気付いていた。

入口と反対の壁に、もう一つの扉がある。その奥に、強い魔力の気配を感じた。

目を凝らす。

・・・間違いない。結界が張られている。

「さあて・・・、どう出るかな？」

主人が死んだ後にまで、律儀に結界を張り続ける魔道士など珍しい。

それも、ガルバのときがそれほどの忠誠を得られるはずもなく・・・

・恐らくは人間ではなく、魔獣の類。

剣を抜く。抜いただけでは炎も出ない。

そして、扉を思いきり蹴り開けた。

黒い巨大な腕が扉から突き出て来る、最初の攻撃をかわし、その爪に斬りつけた。

ギャウ！

魔力が消えた。同時に結界も消え去る。

部屋へ踏み込む・・・床には黒猫の死骸が転がっていた。

「・・・誰？」

突然の声に、驚いたセフが振り返る。気配を消していたのだろうか、座敷牢の中に居た少年に気付かなかった。

金色の巻き毛、グリーンの大きな瞳、淡い肌、微弱的な波動・・・その子供も魔族だった。

第七話

少年の指示で、鍵を見つけた。

牢から出してやると、少年は黒猫に駆け寄った。

「ああ、良かった・・・、まだ間に合う。」

死んだと思った黒猫は、まだ瀕死だったらしい。少年は息を吸い、口移しに猫の中へ魔力を吹き込んだ。猫は薄く目を開き、弱々しく鳴いた。

回復系の魔術は、その多くが身体を触れさせて行われる。少年は口から回復の息吹を与えるのだろう。

「ああ、友達だったか・・・、悪い事をしたな。」

悪びれた風もなくセフが謝罪の言葉を述べると、少年は首を振って笑った。

「有難う、死ぬまでここで暮らすのかと思った。」

「・・・あの、僕を売り飛ばす・・・？」

助かったと思うのは早合点と考え直し、少年はおずおずと尋ねた。

「俺は人買いじゃない。・・・見たところ、エルフ族のようだが、どうしてこんな所で繋がれていたんだ？ エルフ族は同族の結束が固い、一人でも行方が消えれば騒動になるだろう？」

「・・・僕は培養されたエルフだから・・・、」
少年は俯いて、そう答えた。

闇のギルドで売買される、魔力を極端に低くして産み出された魔族。シエナと同じ、培養種。

・・・人間の奴隷として、高額の値で取引されている。魔族の支配する多くの国が、それゆえに人間を差別し、そうして悪循環は現在まで続く。

片方で、セフのような混血も、多く産まれていた。

人間が苦勞して作り出した培養種、その腹から産まれた子供もまた、魔力が弱いとは限らない。セフは、純粹の魔族に匹敵する魔力の持

ち主だ。

ゆえに、この世界は複雑だ。

「ここを出て、何処へ行くかはお前次第だ。俺は強制しないし、誰の指図も受けなくていい。」

「・・・お前を縛る主は今朝、死んだ。お前は自由だ。」

自由、その言葉を聞いた時の少年の表情。ぼんやりと・・・、やがて、瞳に輝きが戻る。

自由、願いつけてきた言葉。

助け出してくれたこの人も、素性を知ればきつと態度が変わる、・・・

・そう思っていた矢先。

思いがけず、手に入ったものは望み続けた二文字だった。

一口に魔族と言っても数種類が存在する。

魔王として怖れられる一部の強大な存在を除けば、人間社会と同じで固体差も出る。多くは残虐で血と争いを好む傾向にあるが、平穩を好む魔族もいくらかは存在し、また、冷酷で計算高いヴァンプなどは自分の領土を持ち、人間の街を育んでいたりもする。

それらは魔族が支配権を持つ国であり、人間の方が、彼等の餌として生かされる。

魔族の多くは協調性に欠けるため、同盟していないのが人間には幸いだった。混血の割合も人種の比率を大きく占めている。彼等の性質も、血の濃さに応じて、多種多様だ。

そのような具合で、この世界では多種多様な形式で、多くの国が乱立している。

「あのお・・・」

広間へ戻り、しきりに家具などを引っ掻き回していたセフに、少年がおずおずと尋ねた。

「一緒に連れて行ってくれませんか？ 僕、何でもしますから！」

「・・・取り柄と言えば、この息くらいのもんだけど・・・。」

「ジジイは病を患ってたのか？」

返答はせずに、セフの方が別の事を尋ねた。

少年は首を捻り、少し考えてから、こう答える。

「いいえ。・・・けど、マスターはすぐに病気になるから、ここへはしょっちゅう来ていました。」

彼の寿命は、もう尽きていて・・・僕の息吹で永らえていた。」

「ふうん？ 回復系にはそういう使い道もあったか・・・、」
文箱の中には、予想通りの書類が収められていた。某国の領主に宛てた密書。

あの結果は、少年を縛るよりむしろ、この秘密を守るため。

権力者が望むものと言えば、相場が決まっている。富も名声も手にしたなら、次に欲しくなるものは命だろう。不老不死、あるいはそれに近い生命。

ヴァンプは一番人気だ。老いることなく、永遠に近い生命を保つ。嫌うのは美食家くらいだ。

多くの人間がヴァンプの仲間になる事を望んでいるが、彼等は滅多に仲間を増やさない。

血を吸われたくらいで、人間が魔族になるはずなどない。彼等に選ばれた者だけが、その栄光に浴する事を許される。

・・・そして、セフが見付けた書類の内容も、それを望むが故の密約の証だった。

「仲間にしてもらう代償に、何を約束したか・・・。」

・・・お前が知ってるワケがないか。」

セフの苦笑まじりの問い掛けに、少年は真剣な目をして、首を振った。

知っているのだと言う。

「この部屋は僕が管理してたんだ。」

書類の中身も、他の・・・燃やされて無くなった手紙とかも、僕は知ってる。

マスターは、ヴァンプに宛てた手紙の中で、王様を売る約束をしていた。」

「・・・詳しく話せ、」
まったく予想もしなかった事実にも、セフの目にも緊張の色が宿る。土地か生贄、ヴァンプが取引に応じるとしたら、どちらかしかないとは思っていたが。

「5年前、この国で起きたクーデター・・・、それを仕掛けたのはマスターなんだ。」

国王の弟君を陥れて、捕えた後は例のヴァンプに引き渡される予定だったらしいんです・・・。

けれど、弟君は逃亡して行方が知れなくなっただけでしょう？

契約を反古にされたヴァンプの報復を、マスターは恐れて・・・代りに、王様を差し出すと約束したんです。ヴァンプからは、ずっと、催促の手紙が届いていました。」

魔力は血に宿る。

ヴァンプとて魔族なのだから、人間よりは同じ魔族の方が、自身の魔力を強化出来る分、得なのだ。多くのヴァンプは領土を持っている、それを守る為にも、とにかく魔力を増強したいと考えている。

・・・混血の血は、彼等にとっては滅多に吸えない御馳走だった。

「ヴァンプは確かに不老長寿だろうさ、だが、魔族の中では最弱に分類される。」

・・・ヤツ等なりに必死というワケか。」

嘲るように、セフは言い放った。ヴァンプごとき、敵ですらない。気に掛かるのは、それ以外の事だ。

「他に、密書を送るような相手は？」

セフの問いに、少年は首を傾げた。思い当たる節はない。

「そろそろヤバイな、引き上げよう。」

・・・お前、名は？」

そう言えば、まだ名前も聞いていなかった事に気付き、少しづつき

らぼつに尋ねる。

「アシユ、・・・あなたは？」

「セフだ。」

アシユの顔に驚きが現われる。セフと言えば・・・、

「黙ってるよ、贖物に勘付かれる。」

ふてぶてしい笑みを見せて、本物の皇子は言った。

ヴァンプの契約はまだ有効だ。・・・いずれは痺れを切らして襲ってくるだろう。契約の相手が死んでいようと、彼等にとっては問題ではない。普段の王ならば、降り掛かる火の粉など、自身で振り払うだろうが、今は何者かによって呪いを受けている。

兄の身辺に危険が迫っている事に変わりはない。

「ああ、そうだ。」

事が全て解決したら、兄に頼んで身分を保障する証明を取ってやるう。

紹介状を書いてやるから、その後、フィルリアに行くといい。」

「フィルリア？」

少年は長くここに縛られていたため、外の事を何も知らない。

セフは珍しく、柔らかい笑みを浮かべて話し始めた。

「魔法大国フィルリア、領主は変り種のヴァンプだ。」

仲間からは始祖と呼ばれていて、気の遠くなるほどの時を生きているらしい。魔族の中でも珍しい、原種というヤツだ。・・・お前の中に流れる培養種の血には、魔力を抑え付ける因子が混ぜられているが、そいつを、すっきり抜いてくれるだろう。

目が醒めるほどの成長を望むなら、逢っておくべきだ。

眠っている魔力が解放されれば、誰を怖れなくてもいい。・・・本物の自由が手に入る。」

大国の領主、と聞いて、アシユの顔に不安の色が浮かんだ。

誰も、一介の奴隷魔族風情が、そんな偉い人物に御目通りが適うとは思わない。

セフは言った。

「心配するな、・・・ちよつとした貸しがある。」
アシユは後にフィルリアへ向かい、セフの言った『貸し』の意味を
知る事になるが、それはまた、別の物語りだ。

二人は大聖堂を抜け、夜の森へと紛れて消えた。

第八話

ガルバの屋敷を離れると、途端に死人達に囲まれてしまう。

無人の村、廃屋の崩れ掛けた屋根の上で、二人は立ち往生していた。

・・・仕方ない、今夜はここで足止めだ。

ちょうど、その頃、セフが離れたパーティの面々も、別の場所で足止めを食っていた。

・・・裁判所。

例の傭兵グラントが、王国の兵に捕えられたのだ。

国外追放を宣言される前に、フィルが異議を唱え、決着が着くまでの間は裁判所からは出られないと聞かされた。

「ハメラれたんじゃないか？」

ナッツが問い掛けると、ルシーダも相槌を打つ。

「アタシもそう思うよ、嗅ぎ回ってんのがバレたんじゃない？」

一行が小声でひそひそと囁き合っていた、その時、ドアが開いた。

「おい、女！ 出る！」

役人が顎をしゃくつて、ルシーダを促した。

「・・・なんか解んないけど、行くよ。どうせ、証人喚問だろ？」

けれど、それきり、ルシーダは戻って来なかった。

昼が過ぎ、夕暮れが近い頃になって、フィルは役人に尋ねた。

「今朝、ここを出て行った仲間がまだ戻らないんだけど、何処へ行つたんですか？」

役人は、下卑た笑みを浮かべて、こう答えた。

「そんなモン、王宮へ行ったに決まってるだろう？」

王様はアマゾネスをご覧になりたいそうだからな。光栄だろうが。」「フィルとナッツは顔を見合わせた。

ルシーダは一人にされ、王宮からは馬車が迎えにやって来た。

驚きはするが、さすがに場慣れたもので、余計な事は言わないと自

身を固く戒めた。

・・・アルザス王は、床で伏せっている。

それでも目を輝かせて、大柄の女戦士を眺め倒していた。

「・・・そのように薄着で、寒くはないのか？」

国王が発した、最初のお言葉。

「別に？ アタシの部族じゃ、これでも厚着な方さ。中には素っ裸の戦士も居るよ？」

「これ！ 国王に対し、無礼であろう！」
側近の老いた祭司が声を荒げた。

「よい、・・・それは暑い国なのだな？ 冬にはどうするのだ？」

「アタシの産まれた土地には冬なんてのは無かったよ。」

浅黒い肌、強い日差しを浴びるために、自然のうちに黒くなったのだ。

彼女の部族の者全部が、このような肌をしている。暑いなど、当たり前前の事だった。

ルシーダは気取られぬように、視線をずらしてセフを見た。

・・・セフと名乗っている、偽者。

彼女が知っているセフとはまるで違う。・・・いや、5年もの間、消息不明だったのだから、姿形など、想像でしか描けないのも無理はない。

いかにも皇子と云った優男が、アルザス王の傍に侍っていた。

『似ても似つかないね、なんだい、あの青ビヨウタンは。』

いつも見慣れたセフの、ふてぶてしい笑みを思い出す。確かに美男子だが、もつと野性的だ。

「兄上、もう横になられた方が良い。・・・また、熱が上がっていきます。」

「おお、そうか・・・。では、また明日、話の続きを聞かせておくれ。」

おいおい、帰してくれるんじゃないのかい？ と、言いかけるのを寸で抑え、ルシーダは無言で頷いた。

「私も今日はこれでお暇します。」

では、兄上……」

「セフ、」

慌てた様子で弟を呼び止め、出てゆきかけた皇子を手招きする。仕方なく、という調子で皇子は踵を返して王に歩み寄った。

「セフ、毎晩どこで何をしているのだ？」

護衛を捲き、姿をくらましたと報告があったぞ？」

ルシーダは耳を研ぎ澄まし、会話を聞き取っている。

気にも止めない風に、セフの偽者は笑った。

「兄上、何も心配など要りません。」

私はもう、何処へも行かないし、兄上の傍を離れたりもしませんよ。」

「セフ……、お前と私は血を分けた兄弟、水よりも濃い絆を持つ

のだ。私がつとも愛している者は、今となってはそなただけ……どうか、この兄に秘密など持たぬようにな。」

……そなたまで失いたくはないのだ。」

弟の手を取り、戒めの言葉を呪縛のように繰り返す兄に、偽の弟は平然として答えた。

「もう二度と兄上を裏切ったりはしません、誓いましょう。」

その微笑の裏側に、凶悪な企みを感じ取られて、ルシーダは思わず身震いした。

「女には後宮に部屋を与えて、そこに住まわせるが良い。」

後の事は侍従長に任せて、お前達も退がるのだ。……兄上はお休みになる。」

どうやら、すでに王宮を掌握してしまったらしい。

ルシーダは促されるまま、豪華な装飾の宮殿を渡って行った。

王宮の広大な敷地のあちこちで、かがり火が焚かれ、その傍に設えられた祭壇の上では、魔術師が低く呪文を唱えていた。大規模な結

界を張り巡らせている。

魔法の事はよく解らないが、あの偽者はこんな中から魔法を発してゾンビを操っているのだろうか？ 無理なのではないだろうか？ だからこそ、護衛を捲き、姿をくらませるのではないだろうか？

・・・ヤツの後を附ければ、真相が解かるかも知れない。先に行く案内の侍女は宮使えという事もあって、お高くとまっている。一度もルシーダの方を振り返らない。・・・そつと、侍女から離れた。

後で、迷子になったとでも言えば良い。人目を避けながら、偽者の行方を探った。

「皇子、今夜の見廻りは増員を願います。」

「なぜだ？」

近くで人の話し声が聞こえた。ひとつは先ほど聞いたばかりの声。そつと様子を見ると、衛兵の一人とセフの偽者が、立ち話の最中だった。

皇子の問い掛けに、兵士は答えに窮している様子だ。見廻りと名を変えても、実質は弟の見張りなのだろう。

「その・・・、王宮は広く、目が行き届きかねるかと・・・。」

苦しい言い訳に、偽の皇子はふむ、と頷き、こつ答えた。

「そつだな、兄上の身边に何かあってもいけない・・・許可しよう。」

兵士はほつ、と息をつき安堵の色を浮かべたが、傍で見ていたルシーダは、眉間に深い皺を刻んで偽者を睨んだ。

見張りが何人増えようが、関係無く、今夜も術を掛けると宣言しているようなものだ。

護衛の兵は皇子の前を辞し、テラスにはセフの偽者が一人、残された。

何を思っのか、じつと、月を見つめている。

「・・・早く戻って来い、」

そつ、呟く声を確かに聞いた。

ルシーダの尾行に気付いているのか、いないのか、気に止める事もなく偽者は部屋へと引き上げる。

皇子は疲れを理由に、早々に寢所へと引き籠もった。

寢所の中にまで、見張りの兵はくつついて入る。兄王の猜疑心は相当地に深いらしい。

「それでも、この偽者は王宮を抜け出してみせた。」

王宮の南には、古代の遺跡がそびえている。

石で出来た巨大な塔。見上げるほどに高く、何階まであるのかも判らない。

その塔の石段をセフの偽者は登っていた。

少し離れて、ルシーダも。

ずいぶん登った辺りで石段は崩れ、広間に繋がる壁も崩壊して、先へは進めなくなっている。

その広間に、黒い文字で描かれた魔法陣が広がっていた。

「ほう、これがカラクリってわけかい？」

後ろから姿を現わしたルシーダにも、驚きはしない。

低く、抑揚のない声が呪文を唱え始めた。

「およし！ こんなモン、こうしてやる！」

武器の鎖り鎌がうなりをあげた。魔法陣の描かれた石の床を鋭く抉る。

「・・・しかし、魔法陣は欠けることなく、機能し続けていた。」

「な!？」

なぜ、消えない!？ ルシーダの言葉を遮ったのは、死者の冷たい腕だった。

石の中に隠れて光を避けていた死人たちは、新たな命を得て、次々と壁や床から這い出て来る。生者に群がり、その温もりを奪い取るうと手を伸ばした。

「くっ！」

「・・・残念だったな、これは魔族の生き血を絞って描いたものだ。」

呪いが掛かっているから、ちつとやそつとじゃ消えはしない。」

致死量の血を奪われて魔族は死に、そして呪いが大地に宿る。

人間であるルシーダには手に負えないシロモノだった。

死者の手が、腕が、絡み付いてくる。もがくうちに石段の端へ追いかまれる。死人の一人が、ルシーダの背に負ぶさった。

ガク、

石段が崩れ落ちる。

バランスを崩して、ルシーダも死人達ともどもに落下していった。

遙か地上を見下ろして、偽の皇子は鼻で笑った。

「この高さでは助かるまい、ゾンビが一人増えるだけ……ぐしゃぐしゃでは魔法も掛からないか。」

第九話

朝になつても、ルシーダは戻つて来なかつた。

これはやはり王宮に囚われてしまったものらしい、とフィルとナッツは結論した。

「あんなデカ女でもいいなんて、変わったシュミしてるよ、アルザス王は。」

ナッツは半ば呆れぎみだ。

ルシーダが、後宮に侍る妃達のように色気付いた衣装を纏っているかと思うと、気持ちが悪くなってくる。素肌に皮の鎧だけ、というキワドイ衣装でもまったく色気を感じさせない女なのに。

「どうしようか・・・、正面から行つても、取り次いでもらえるはずもないし・・・。」

第一、この裁判所から出ること自体が難しい。

フィルは思案の末に、一つの閃きを得てナッツの耳元へ囁いた。

「グラントの件は、僕が一人で何とかします。」

ナッツは王宮へ・・・上手く行けば、ルシーダやアルザス王にも会えるはずです。」

フィルはひそひそと囁き、ナッツは時折、頷きながら聞いた。

「・・・あと、問題はグラントをどうするかですけど・・・。この際、国を出てもらつて、落ち合い場所への言付けをお願いしようかと思うんです。彼は信用出来ず、セフの事を話しても大丈夫だと思つから。」

ナッツは唸り声を洩らし、しばらく考えていたが、はなから良い考えが浮かぶはずもなく、結局はフィルに賛同した。

「とりあえず、やれる事をやるしかないな。」

王宮とルシーダは任せろ、セフが入国し易いように手引きは頼む。」
「任せろ。」

少々芝居掛かって、二人は役人の前で大袈裟な喧嘩をしてみせた。

「いい加減にしるよな！ あんな昨日今日知り合った奴に、いつまでも付合つてられねーだろ！」

「そんな無責任な事は、僕は御免です！ 帰りたければ、貴方一人でどうぞ！」

「ああ、解かったよ！」

最後にフィルが目配せをして、二人は喧嘩別れを演じた。

ナッツが提訴を取り下げると、放り出されるように簡単に外へ出られた。

多少のムカツキはあるものの、時間を無駄にするわけにもいかない、宿屋へと引き返し、すぐさま次の行動に移った。

行商街で、買い物を済ませる。なんだかんだと結構もの入りだった。宝石、金銀、混ぜ物のための、少しの鉛。

細工道具は手放さない、ドワーフ族には必需品だ。

これを徹夜で仕上げ、宝飾品をいくつか創り出した。・・・どれも会心の出来だ。

「ふっ、俺様に掛ければチヨロイもんだぜ。」

我がの作ながら、惚れ惚れと眺めている。これに、以前フィルに渡したブレスレットを加えて、皮袋に押し込んだ。・・・フィルは結局、使わずに返しに来たのだ。

王宮へ出掛け、これらの品々を餌に謁見を願う。珍しいもの好きの王様の事だ、きっと、ドワーフの銘というだけで食い付いてくるだろう。職人が一緒なら、なお良い。

この、フィルの考えた作戦は、その読みの通りに見事、成功した。病床の王は、熱のある身体を推して、旅人に謁見を許した。

見せられた腕輪の見事に、じっとしてはいられなかったらしい。

「・・・つむ、これほど見事な品々ならば、妃達も満足するであろう。

代価は望むままに取らせるゆえ、しばし留まり、妃達を喜ばせてやるが良い。」

「はは、・・・されど、王様。
ひとつだけ、お願いがございます。私どもは、こだわりの強い種族
ゆえ、自身の目で選んだ材料しか使いませぬ。・・・王宮と外の出
入りは自由にして頂けますか？
それが叶えられぬなら、何一つとして、創り出す事は出来ませぬ。」
縛られるのは御免被る、との条件に、アルザス王は渋い顔をして唸
っていた。
それでも、やがて。
「・・・解かった、好きにするが良い。」
渋い顔のまま、ナッツに許可を与えた。

「しかし、見事な作よ。
・・・どうだ？ 我が国に永住し、王家直属の職人とはならぬか？
優遇致すぞ。」

この申し出を、ナッツは曖昧に言葉で濁して、逃れた。
王の隣りには偽者のセフが控えている。気に入った品なのだろう、
一つの首飾りを腕に巻き付け、じっと眺めていた。

ナッツの不審げな視線に気付き、目が合った。
「・・・良い品だ、手間が掛かったのだろうか？」
「ええ、まあ・・・、そこそこ。」

誤魔化し笑いは功を成し、皇子は視線を腕に戻した。
おお、それも良い品だな、と、アルザス王の差し伸べた手には、素
直に宝飾品を引き渡した。

「これは第三王妃に与えよう、きつと似合う。・・・そうだろうか？
セフ。」

「ええ、きつと。」
につこりと微笑み、御機嫌の王に答える皇子を、ナッツは訝しげに
ちらちらと見ていた。

・・・男が宝飾品を眺める時は、その先の展開が瞳に映し出される。
女へ与えたり、ステイタスとして他者に見せる時の場面が映り込む

ものだ。偽皇子の瞳には、そういった独特の打算は映らなかった。その目は、どちらかと言えば、女の目に思える。

まあ、男の肉体に女の心を持っているような者も、少なくともないが。その皇子がナッツに声を掛けた。

「これから後宮へ案内しよう。・・・兄上は、見た通り、御病床の身だ。」

これ以上の無理は認められぬ。」

ナッツには言い置いて、横たわろうとする王に手を貸した。

アルザス王は、この皇子をいたく信頼している。その様子が、はっきりと見て取れた。

偽のセフは、気にしない素振りをしているが、やはり、あの首飾りが残念なのだろう、その辺りも表情の中に見え隠れしている。

ナッツは助け舟を出した。

「・・・皇子は、その首飾りがお気に召しましたか？」

どなたか、意中の方に差し上げるなら、もっと良い品をご都合致しますよ？」

すると、今気付いたかのように、アルザス王も弟を見た。

「そうなのか？ セフ？」

「い、いえ・・・私は、」

歯切れの良い普段の様子とは違ったのだろう、王は笑って手を振った。

「それならそうと言えば良いのだ。」

私にとつて、一番大切なのは弟であるお前だ。ならば、お前が一番選ぶのが道理というもの。

さあ、遠慮など要らない。これは今日からお前の物、お前の好きに使うが良い。」

皇子のお気に入りだった首飾りは、兄王の手から、皇子の手へと譲り渡された。

欲しい物が手に入った瞬間、この時をナッツは見逃さなかった。

・・・皇子の目は、確実に、女の目だった。

後宮へと向かいながら、ナッツは考えを纏めにかかる。

あの偽者は、女が化けている可能性が高い。

すると、王への怨みか？ 何か、王に捨てられたかした女の復讐かも知れない。

女は、些細な事で怨みを含む生き物だと、ナッツは心に刻んでいる。そうこうするうち、絢爛な装飾に彩られた王の私室である、後宮に到着した。

後宮には、文字通りの美女がひしめいていた。これもセフに聞いた通りだ。

ナッツは鼻の下を伸ばし、色とりどりの美しい女達にしばし見とれた。

「王の物に手を出した者は、街を引き廻した上で八つ裂きの刑だ。

・よく憶えておけ。」

ナッツの表情を見た皇子は、釘を刺すようにそう言った。

「まあ、いったい何者のですの？」

「あなたはだあれ？」

女達が物珍しげにナッツの周りに集まってくる。

偽の皇子は、簡単にナッツの紹介を済ませると、さっさと戻ってしまった。

「げ！ ちょっと、ちょっと！

こんなトコに一人で置いてかないでくれよ！」

それに、まだ何も探りを入れてないじゃんか！ 心でそう叫びながらも、身動きの出来ない状態ではどうにもならず、偽者が去ってゆく後姿を見送るしかなかった。

「あら、綺麗な腕輪だわ、・・・私に似合う？」

「じゃあ、これは私に頂戴ね？」

女達は遠慮も知らず、ナッツの腰から皮袋を取り上げ、中の宝飾品を我先に奪ってゆく。

「これと似た、でも石は青いので作って頂戴、」

「私は首飾りが欲しいわ。ね？」

品物がなくなると、勝手勝手に注文を始める。

・・・とても、手持ちの品では追いつきそうにない。どころか、幾つ作らされるハメに陥るかと思うと、気が気ではなかった。

「私もよ！」

「なら当然、私にもね！」

後宮の、王の妃はいつたい何人居るのだろう・・・。

フィル〜！ この作戦は失敗かも?! ナッツはついに、声にならない悲鳴を上げた。

第十話

ナッツが後宮の出入り職人を始めてから、数週間が過ぎた。フィルからの連絡はまだない。裁判は長引いているようだ。当然、セフへの連絡もまだだ。

しかし、ルシーダの情報は得る事が出来た。

後宮へ収まったその夜のうちに、姿をくらませてしまったと言う。もしかすると、宿で行き違いになり、先にアルザスを出たのかも知れない。逃亡の罪で、衛兵が探索中だと聞いた。

「アイツがそうそう逃げ出すとは思えないんだけどな・・・」

つい、小声で呟いてしまったものを、女達に聞かれた。

「アイツって誰？」

女達は興味深げにナッツに詰め寄った。

後宮の妃たちは娯楽に餓えていた。ナッツの話を、いつも楽しみに待っている。

ここへ訪れるたびに、ナッツは今までに経験したり聞いたたりした数々の冒険談を披露して、女達に取り入る事に成功していた。

「いえいえ・・・逃げた女房の事なんで。」

悪いジョークで誤魔化して、女達に探りを入れる。

引出せる情報は、何でも手に入れたかった。

「王様に頼んで、宝物庫を開けて貰ったら？」

あそこには宝石の原石も、山ほど積まれているわよ。」

品薄だ、と告げるナッツの袖を引き、一人が言うつと、他の一人は興味深い話を聞かせた。

「宝物庫の伝承ってものがあるわ。」

・・・本当の宝は、宝物庫より雑役の小屋を見よ、・・・なんてね。あんなところ、使い古した武器や防具が打ち捨ててあるだけなのに。

「おかしな伝承がたくさんあるのよ、この国には。」

女達は鈴が鳴るように、一斉に笑い声をたてた。

それからしばらく後のこと。

何も、考えがあつての行動ではない。

女達の情報を確かめようと思つたわけでもない。ただ、急に足が向いただけだつた。

ナッツは、細工の為の材料を見たいといつて、王宮の北にある、倉庫群に出掛けたのだ。もちろん、王の許可も取つてある。

見張りがわりの衛兵が、一人、ナッツの後ろを付いて廻っている。

「・・・このような倉に、どんな宝石があるんだ？」

伝承の、雑役の小屋を漁つていた時に、呆れ顔の衛兵が文句を言った。

「まあまあ、・・・ここだけの話だぜ？」

こここの剣を鑄溶かして宝飾品の土台にしようと思つてさ。」

ナッツは口止め料だと言つて、兵士に小さな指輪をプレゼントした。「奥方を喜ばせてやつてよ。」

兵士もこれで目をつぶってくれるはずだ。これで、心置きなく獲物を漁れるぜ、とナッツはまた、ガラクタ漁りに精を出した。鍛え直せば使えそうな剣がごろごろしている。

まさに宝の山、だ。

そんな中に、一本の剣を見つけた。

錆びたナマクラにしか見えないが、これが只の剣でない事は、ドワーフの彼には一目で判つた。

恐らく、魔法剣。

・・・伝承は、事実だつたのだ。

さて、コイツをどうやって城外へ運び出すか、だな・・・。

ナッツは考える。これ一本を持って出るとして、途中である皇子に出食わしたら・・・。

どうにか誤魔化せる方法を、アレコレ考えて、ナッツは傍の長持ち

に目をやった。

半時も経つ頃には、王宮の外を、長持ちを背中に負ってふうふう息をついているナッツの姿が見えることになる。

「巧く行つたけど・・・も少し数減らせれば良かったぜ・・・」

長持ちの中身は錆びた剣や砕けかけた甲冑といったガラクタ。

・・・さすがに後宮の中を通る勇氣はなかった。

「コイツを土台にする、なんて知ったら、あの妃達、鬼になるだろうな。」

ナッツは自身の言葉に苦笑した。

頭の中はもう、手に入ったお宝の事で一杯だった。

「そうそう、王様に知れちゃならねーんだつたな。」

独り言も自然に多くなった。打ち治しはアルザスを出てからだな、などと呑気に考えていたのだが、結局、血には逆らえず、その夜のうちに鍛え治してしまった。

「見せたら取られるって、解かってんのにな、」

見事に甦った魔法剣の神々しい輝きの前で、また、苦笑を浮かべた。この高潔な輝き・・・間違いなく、聖剣。

ナッツは改めて、荘厳な口調を取り、剣に向き合う。

「名もなき剣よ、今、お前に新たな命を吹き込む。

お前の名は、『グラン』だ。」

剣が、ぼう、と光を放った。聖剣グラン。

魔法剣を扱える者は、魔族か混血に限られる。これを装備出来るメンバーは、今のところ、セフとナッツの二人だけだった。ナッツは、どちらかと言えば小型の武器が性に合う。ナイフがいつも愛用している得物だ。しかも、この剣ときたら、大きい上にけっこう重い。セフも、こういった小回りの利かない武器を嫌うだろう。

・・・どうも、これは元から王のものとなるべき剣だったらしい。

また、ナッツは苦笑した。

朝を迎える頃には、立派な装飾を施された、一振りの剣が出来上がっていた。

聖剣の名に相応しい、白と青の宝石を嵌め込んだ。

「セフが居てくれりゃなあ。魔法を練り込んで、もっと耐性の強い柄をつけられるのにな。」

ナッツには、まだ不十分な仕上がりのようだったが。

ナッツがアテにしていた、そのセフだが、現状で窮地に立っている。いや、セフにとっては窮地という程でもない。数で面倒な事になっているだけだ。

小雨が降り、足元が悪くなっている。コボルトと、敵の下僕が十匹近く、おまけに日暮れからはゾンビが群で参加してきた。

「シャアアア！」

血走った目の女は牙を剥き出しにして、セフに襲いかかる。

ドレスは年月を経て色褪せ、埃が舞う。動きは死者たちよりも遙かに素早い。

・・・ヴァンプの襲撃を受けたのだ。

死者を避けて、一段高い岩場へ飛び移る。

追ってきた女を一刀の元に斬り倒した。さらにもう一人。

刎ねられた首が宙を舞った。

影が薄く伸びる、すう、とセフの足元へ。いきなり背後に人が立った。

にやりと笑った口元に、鋭い牙のぬめった光。肩を掴み、首筋へ牙を突き立てようとすると、振り向きざまにセフのファイア・ソードが唸る。

・・・この程度のファイ打ちで、仕留められるほどに、セフは弱い獲物ではなかった。

振り解かれた爪が虚しく空を鷲掴み、炎がヴァンプの頬を掠る。

「ちっ！」

セフの舌打ち。咄嗟に飛び退いた敵に、一撃をかわされた。すぐさまセフも跳躍し、ヴァンプの背後を取る。

一刀、手心えはしかし、身代わりになった死者の背だった。

群成す死者に紛れ、ヴァンプの姿が幾重に増える。

幻術に罹ってしまったらしい。

「邪魔をしておつて、貴様等！　まとめて火葬してやる！」

最大火炎魔法が炸裂した。

脂の燃える臭いで周囲は咽返るほど。黒い煙は天を焦がし、大地には、未だ冷めぬ熱気で陽炎が立つ。・・・ヴァンプは瞬間に、無数のコウモリに姿を変えて、火炎地獄を逃れた。

黒焦げの死体が、なおも燃え続けて周囲を明るく照らしている。声だけが響く。

「ククク・・・、契約は有効だ。必ず、お前達の血を頂くぞ・・・」

最悪の結果を招いた。

ヴァンプに気に入られてしまったのだ。ガルバとの取引に応じると魔族は答えた。・・・セフの魔力の強さが仇となった。

ヤツはもう、別の作戦に切り替えるだろう・・・セフは焦燥に駆られた。

セフの襲撃に失敗し、その力の差を見せ付けられた以上、ヴァンプが取る手段はひとつだ。

・・・セフの兄を襲う。

そうして、魔力を強化した後に、リターン・マッチを仕掛けて来るはずだ。

王が倒れて以来、魔術師達は国を追放されるか、辺境の地へ送られていると聞いた。

おそらく今の王宮には、ヴァンプと渡り合える術者はいないだろう。兄王も、セフ程ではなくとも魔力を持つ。呪いを受ける身でなければ、ヴァンプなど敵ではない。

目の前に姿を見せるだけで、灰にされてしまうのが関の山だ。

だが、今、王宮に魔力を持つ者はなく、王は伏せている。

・・・偽者が何を企んでいるのか、少しずつ読めてきた。

第二章 第一話

ルシーダの消息は不明だった。

塔の高層から転落したが、奇跡的に生き延びている。

途中の階に、鎖鎌の分銅を投げた。鉄で出来た球体には無数の棘が植えてあり、これが敵の頭蓋を叩き割る。同じ要領で、塔の壁に穴を開けて引っ掛け、体重を支えた。

鎖を胴に巻き、とりあえずは朝を待つことにした。

死者も偽の皇子も気付いてはいない事が幸いだった。

そして、ルシーダはそのままイビキをかいて寝入ってしまった。

ジリジリと日差しが肌を射す。

「う・・・ん？」

ルシーダは目覚めてすぐには、状況を把握出来なかった。

ああ、そうだった、と納得するのに少し掛かった。鎖を手繰り寄せ、壁に取り付いて下を眺めた。

慎重に降りてゆけば、この下に見える階段に降り立つ事が出来そうだった。

煉瓦の隙間に指を差し入れ、慎重な上にも軽いフットワークですぐに下の階へ降りる。

「・・・さて、と。」

あの野郎はどこ行っちゃったかな？」

左右を見渡す。人影一つ、なかった。

上へ進むか、下へ降りるか・・・。ルシーダの選択は「下」だ。

上には例の魔法陣があるのは判っていたが、どうせ、何も出来はない。魔法は魔法、セフかナッツの手を借りるしかないのだ。

ここはひとまず、王宮へ戻るほうが得策だという判断だった。

その王宮から、逃亡の罪で、自身に追っ手が掛かっているとは露ほども知らない。

「生きて戻って、偽者の驚く顔でも見てやるか。」
口調も軽く、階段を降り始めた。

王宮へ戻る途中の街道で、ルシーダは追っ手を掛けられた事を知った。

行く手を阻むのは二人、前に居る男を拳で殴り倒して王宮へと向かった。

「ちょっと、王さん居るかい!!」

無理やり連れてきてきといて、翌日にはお尋ね者とは、どういう事だ!!?」

護衛兵などものともせず、ルシーダは王の寝所へ怒鳴り込んでいった。

「あ?!」

その場に居たのはナッツだ。

「生きて、いたのか・・・?」

そして、昨日の偽者……。驚いたような顔で、ぼそりと呟いた。

「王様! あんたはよくよくボンクラだねえ!

そいつがセフなもんかい! 真つ赤な偽者だよ!!」

怒り心頭、ルシーダはキレて吼えかかった。

「・・・セフ?」

信じられない、といった表情で、アルザス王は弟を見た。

「くっ、くっくっくっ・・・」

弟と信じた人間が、小さな笑い声を漏らす。

「あはははは!」

否定もせず、笑い続けている。

「セフ!」

王は堪らず、叫んでいた。

ぐにやり、顔が歪んで別のものになった。

黒髪の女だった。

「お、お前は・・・」

うめくように、王が呟き、女は凶悪な笑みを浮かべる。

「お久しぶり・・・、成り済ましている内に、向こうは片付くかと思っただけど、・・・順番が変わったようね。所詮ヴァンプじゃ、この程度つてコトかしら？」

女の後ろに薄い影が立つ。

「これはこれは、獲物が三匹も・・・嬉しい限りだ・・・。」

ヴァンプは女の背後を取って、勝ち誇ったようにそう言った。ナッツとアルザス王、それに、この黒髪の女もヴァンプには獲物の一匹だった。

「残念ね。私はおいとまするわ。」

ヴァンプの牙が白い首に突き立つ瞬間、女は煙のように掻き消えた。

ヴァンプの行動は素早い。女に逃げられた次の瞬間には、ナッツの隣りへ移動している。

ルシーダの鎖鎌が唸った。

チエーンを潜り、今度はアルザス王を狙う。

王はベッドの中だ。印を切り、掌をかざした。

バチッ、

ヴァンプが弾け飛んだ。シールドが襲撃を防いだものの、即効性の魔法はその場限り。そこへヴァンプの第二派が来襲する。

王の首筋に深々と牙がめり込む、ナッツは荷解きももどかしく、剣を抜き放った。

光が溢れる。

王を捉えた事が、ヴァンプの命取りとなった。

一刀、ヴァンプは縦に真っ二つ。

ぼふっ、

一同の頭上へと、魔物の破裂した後の、白い灰が降り注いだ。

「・・・驚いたね、一撃かい？」

「クソ重てーったら！」

よるめくナッツの腕を、ルシーダが支えてやった。狙ったと言うより、偶然だろう。

ただの一刀で仕留めたのは、腕よりむしろ、聖剣の力が魔族を上回ったからか。

「魔族の灰は、残らず掻き集めて風に飛ばしてしまわねば……。城内で復活されては面倒になる。……よくぞ、この危機を救ってくれた、礼を言う。」

衛兵に指示を出し、改めてナッツとルシーダには深く頭を下げた。

「い、いや……、そんな改まってもらっちゃ照れるよ、」

「そーだよ、仲間の兄貴なんだし、当たり前的事しただけだって！」
医師が傷を調べるために、仰臥を促し、アルザス王もそれに従い、そして、改めて深い溜息をついた。弟は、知らない間に成長し、仲間たちと巧くやっているのだろう。自分が思う程には酷い暮らしではないらしい……。王は、一抹の寂しさを覚えた。

人々がせわしなく床や調度品の掃除をしている。

これらの灰はすべてヴァンプの肉体だったものだ。

「ま、ヴァンプがいくら不死身つつてもー？ 灰になっちゃったら、復活には五百年は掛かるって言うしー？ ……その頃には誰も生きてねーから、契約は失効だよなー！」
小柄のドワーフとアマゾネスが大笑いした。

「さて、と、王様。

聞かせてもらいましょうか？ あんた、あの女の知り合いみたいだったね？」

いきなり核心をつくるルシーダの質問に、場の空気は一変した。ぴんと緊張が走る。

王の表情が、にわかには曇った。

「ヤツは王様だけじゃない、あたし達の仲間も狙ってるんだよ、教えてもらわないまま引き下がれないからね。」

「そんなキツイ言い方すんなよ、王にとっちゃ、セフは大事な弟な

んだぜ？

しかも、今の今まで騙されてたんだ、ショックが強いのは当たり前だろ？」

最年長らしく、ナッツがルシーダを嗜めた。

王はショックを受けていた。しかし、それは弟のセフが偽者と知ったからではなかった。

「・・・彼女は・・・、私とも愛した妃の妹だ。

姉の生涯を、不幸なものだったと信じ込んでいるのだ。・・・私は妃を愛したが、妃が私を愛したのかは、答えのない質問だ。私がそれを知るより先に、妃は私の元から消えた。

妃・・・シエナは・・・弟と共に姿を消し、そして、次にまみえた時には・・・。」

最後の言葉を聞く必要はなかった。

それでも王は、意を決したように、後の言葉を綴った。

「五年前、クーデターの制圧後、二人を探索した。ほどなく、妃だけが発見された。

惨たらしく・・・腹を裂かれて、・・・秘密裏に犯人を探索したが、手掛かりもない。・・・妃が変わり果てた姿で戻った時、傍には彼女が居た。

・・・私を、憎悪を込めた眼で睨んでいた・・・。」

王は目を伏せ、苦悩の表情を浮かべる。

消えた二人の間に、何が起きたのかは解からない。一緒に居たのか、それともまったく別々に逃亡したのか、・・・第一、逃げたか連れ去られたのかも解からない。

王は再び、おし黙った。

二人の皇子、その出生の頃からの長い経緯を語ろう。

始まりは一人の培養魔族だった。

先王は、有力商人から贈られた高価な奴隷魔族をいたく気に入り、妃の一人として後宮に迎えた。この国には、奴隷や市民といった区

別は、ほとんど存在しなかったため、それは容易く実現された。しかし、国王は、妃となった目も眩むほどの美女が、心にどれほどの黒い澱を沈めていたのかまでは見抜けなかった。

奴隸として産まれ、王に出逢うまでに、この女は心の奥に陰惨な暗黒を貯め込んでいた。

奴隸としての日々によって、貯め込まれていったものだった。

女は王の寵愛を一身に受ける身となった。

王は妃に自由を与え、後宮での高い地位を授けたが、妃はそれでは満足しなかった。

妃は心を闇に食われていた為に、人間を呪い、この国を呪い、国王を呪った。

奴隸として産まれた自らの生をも、怨み、憎んでいた。

王の与える愛情は、この妃の中では凍りついてしまっていた。

やがて妃は望まぬ寵愛の末に、皇子を出産した。・・・それが、現アルザス王・ラルフだった。

第二話

ラルフは優秀な子供だった。

王には多くの息子が居たが、その中でも一番の才能を輝かせた。

・・・けれど。

通常以上の魔力を持たぬ、どこにでも居る半端な混血。純粋な魔族には及びもしない。・・・母の関心は得られなかった。

父王はこの皇子を高く評価した。通常の混血。人間よりも秀で、魔族のような危険さはない。

聡い皇子。穏やかな性質を特に愛した。

「お前はやがて、この国を動かすようになるのだ。」

皇子は世継ぎと定められた。

母の情は得られなかったが、国民の祝福はこの皇子の上にある。

宰相のガルバは早くから皇子に取り入ろうと近付いていた。

「ラルフ様、御勉強のほどはいかがで御座いますか？」

最近、あまり身が入っておられぬようだ、講師達がボヤいておりましたぞ？」

皇子は五歳になった。

まだ母親が恋しい歳だというのに、この子供には母はなかった。

「ねえ、ガルバ。僕は母上に嫌われてるのかな・・・？」

「そのような事は御座いません、お母君は御病弱であらせられるのです。」

その上、後宮は王だけをお招きする場所。たとえ皇子と云えども罷り通る事は出来ない・・・お解かりですか？ お母君は身体が弱いために後宮を出る事が困難なので御座います。

皇子を避けておいでになるわけではないですよ。」

にこやかな笑顔を貼り付けて、この宰相は良く出来た嘘を並べ立てた。

妃が病弱などという言葉は嘘だ。あからさまに、皇子を拒絶している事は、誰の目にも明らかだった。

夏ともなれば、王に伴われて離宮へと移る。

ここでは皇子もその母に近寄る事を許されたが、王の他の息子たちのような温かい時間は得られなかった。

「母上、」

「あつちへ行つて頂戴、頭痛がするの・・・」

その白くたおやかな腕は、誰を抱き締めることもなく、翳の射す蒼い瞳は全ての温もりを拒絶した。

彼女の心の冷たさを、王も疎み始めていた矢先・・・妃は二度目の受胎を知った。

「・・・王は私に冷たい。」

勝手にこんな所へ押し込めたくせに、自由にやってただの、なんだの・・・。私は望んだわけではないわ。・・・そして、私だけだと言った王の口は、もう他の女に触れている。

ああ、信じる者など居はしない。・・・すべて滅びてしまえばいい。

「

自身に宿った小さな命に、毎夜のごとく、呪いの言葉を聞かせ続けた。

ラルフの乳母は、子沢山の大らかな女だった。

王の側近の一人、ニナイの三番目の妻。一人目は家へ帰り、二人目は子供を産みすぎて死んだ。三人目は、多くの子を産み、さらに多くの子供を育てている。

同じ乳を飲んで育った兄弟と、同じ父を持つ兄弟、多くの兄弟たちに囲まれて、皇子は優しい心そのままで育っていった。

「ニナイ！ アニタが蛇に噛まれた！

治癒の魔法はどうやって使うの？！」

「お任せを、皇子。」

大丈夫、この子は強い、・・・ほら、もう毒が抜けた。」

かざした掌からは淡い光がシャワーのように降り注ぎ、幼い娘の細い足首を照らす。青黒く腫れ上がった毒はみるみる薄らぎ、腫れも退く。

二ナイはこんな風に、日々、皇子に魔力の使い方方を教えた。彼も、当時のこの国には数少ない混血の一人だった。

「皇子、私ごときが言うべき言葉ではありませんが、貴方様は国民全てに愛されておられます。

もちろんこの私も、妻も、私の子供たちも、……皆、貴方様を愛しております。

王におかれては、いつも貴方様を慈しみ、深い愛情を持って見守っておられるのです。

……どうか、ご自身にもっと自信をお持ちになって下さい。

貴方様はきつと、父上を超えるほどの良き王となられるでしょう。」心にぽっかりと開いた寂しさの風穴は、皇子を取り巻く大勢の人間たちの愛情で埋められていった。

王宮は平穏だった。

不吉な翳が射したのは、王の正妃が二人目の皇子を産んだ時だった。ラルフが六歳の時に、弟は産まれた。

第二皇子は、産声と共に、王宮の壁を撃ち崩すほどの、強い魔力を秘めていた。

正妃は初めて、喜びに涙した。

女の生涯に光が射した瞬間だった。

奴隷の腹から生まれ落ちた魔族……その力が強ければ強いほど、身体の中には、残忍な心と破壊の衝動を抱えているだろう。

正妃はこの息子に多大な期待を寄せた。この国を破滅へと追い込む恐ろしい怪物を育てようと画策した。

妃は呪いの言葉を子守唄にして、二番目の皇子に乳を与えた。

上の皇子には、遠く、その姿は我が子を慈しむ聖母に見えた。

「……人間は浅ましい生き物です。誇り高い魔族の血を、いかが

わしい目的の為に汚した、罪深い獣です。お前にもその汚らわしい血が流れている……。」

日ごと、夜ごとに、妃は赤子の耳元に囁き、その柔らかい肌を強く摘み上げた。

赤子は痛みで泣き叫び、侍女が正妃から皇子を奪い取った。

王は何度、この皇子を取り上げてしまおうとしたか知れない。

その度に、正妃はあられもない程に取り乱し、許しを乞うた。

そして、また、密かに呪いの言葉を囁きかけるのだった。

「お前は誰にも愛されない。」

愛される資格などないので、お前の中に流れるその血を怨みなさい。貶められた魔族のなれの果てと、汚らわしい人間の血を受けたお前が、誰に愛されようはずもない。

お前は疎まれ、蔑まれ、孤独を友とする。」

予言のように、母の言葉は幼い皇子の心に突き刺さった。

息子の中に眠る、破壊の衝動を揺り起こそうと、母である王妃は躍りになった。

末の皇子は三歳になったが、一言の言葉も、誰に関心を示す事もなかった。

こんな筈ではない、そんな馬鹿な事が……、いくら憎悪を植え付けようとも、我が子はまるで反応を示さなかった。

魔族の恐ろしい性は、この皇子の身には宿っていなかった。

その代りに、母を含んだ全ての存在を遮断した。

そしてついに、王妃は気が触れ、二人の皇子の手には届かぬ遠い場所へと隔離された。

上の皇子は弟を憎んだ。鏡のように、この弟も兄を憎悪した。

心を閉ざした魔物の子が、初めて表に出した感情は兄への憎しみだった。

母の予言は的中し、下の皇子は忌み嫌われる。強すぎる魔力、表情

の乏しさは、危険な魔族の性質を現わしているかのように、人々を恐怖させた。

・・・そして、夜に輝く不気味な瞳も、嫌悪される要素となった。

「セフ、おいで。」

一緒に寝よう。」

憎しみを抱えているくせに、兄の皇子はよくこの弟を寝所へと伴った。

大嫌いな弟だけれど、ただ一つ、この瞳は愛していた。

「どうしてお前の目は光るんだろう？」

皆、言ってるぞ。気味が悪いって。・・・私は、そうは思わないけど。」

夜空に輝く月のようだと思った。ぼんやりと、闇の中で銀色の光が踊る。緑になり、赤を帯び、時折、金色に変化した。

猫のようだ、とも思った。

心を閉ざした弟は、何も答えようとはしない。

「綺麗な目だ。・・・お前の事は大嫌いだけど、お前のその目は大好きだよ。」

明かり取りの小さな炎に照らされてもキラキラと輝く弟の目を眺めて、ラルフはふと表情を和らげる。すると、弟は身じろぎした。

この弟の為に、母は遠くへ追いやられてしまった。そう思うと、とても幼い弟を慈しんでやろうという気持ちなど生まれてはこない。

同様に、この兄の、世界中に愛されているかのような姿を見ると、強烈な憎しみが込み上げる。

女は憎しみと呪いのうちに、生涯を終えた。

兄弟は、憎しみあって育った。

第三話

歳月は流れ去り、王は急激に年老いた。

病に伏せる事も日増しに多くなり、何より、政事を億劫に感じるようになった。

ラルフが二十歳になった日を境に、王は一線を退き、その全ての権限を第一皇子に譲り渡した。

第一皇子は、正式な皇太子として認められた。

大幅に人事が塗り替えられ、宰相ガルバが失墜したのもこの日だった。彼もまた、王と同じく歳を取りすぎていた……。

側近の二ナイが新たな宰相となり、皇太子を補佐した。

魔術に長けた人物で、同じ混血という事も、皇太子が彼を高く評価する理由の一つだった。

しかし、それは、思わぬ弊害を宮殿の裏側に生み出していた。

街を取り仕切る有力商人が、ある日、皇太子に謁見を申し入れた。

「皇太子さま、お初にお目に掛かります。

武器商を営んでおります、ウセルと申します。私が今あるのも、全ては慈悲深き王のお蔭……この国を、自由な貿易の国として下さればこそのもので御座います。何かの折にはなんなりとお申しつけ下さいまし。きつと、お役に立ちましょう。」

若き皇太子はのんびりと玉座の傍に控えている。

中央にて威厳を醸しているはずの王は、今朝も起きては来なかった。このところ、いつも昼過ぎにならないと起きる事がないのだった。

皇太子は笑顔を向けて、商人の挨拶に頷いた。

「王の御前でなくば、失礼に当たるとも知れませんが……よろしいですか？」

商人は空の玉座に、少しびくつきながら、皇太子に問い掛けた。

何かの貢物を持参したのだ。王の居ない時に、その次の位に位置す

る皇太子に貢物をするという事は、あらぬ疑いを招きかねなかった。「良い。・・・父上には私から話しておこう。」

用件を述べるが良い。」
全権はすでに皇太子が握っている。けれども皇子は父を蔑ろにするつもりなどなかった。

今の王を飛び越えて、その次の王に貢物などと、そんな道理はないと思っっている。

商人は安心して、話を続けた。

「港より入荷しました、珍しい種類の女奴隷で御座います。」

お近付きのしるしに、ぜひ、王様あるいは、皇太子さまのお側女にと・・・。」

皇子の前に、煌びやかな衣装に身を包んだ美しい女が引き出された。女の首には鉄の輪が掛けられ、使用人らしい男の手に握られた鎖に繋がれている。

培養が難しいとされる夢魔の一種を、人魚と掛け合わせたのだと商人は言った。

傍に置くだけで、心地良い空気を作り、疲れた心を癒すことの出来る、水系妖魔で、この種類は作り出すのがもつとも難しく、高価な奴隷なのだ、と。

培養された奴隷魔族・・・それがどんな方法で作りに出されているのかは知られていない。

闇のルートで作りに出され、公然と取引がなされている商品は随分と数が多いのだ。

魅惑の薬や毒薬にもなる気付け薬、人間の生きた心臓、・・・何でも正規のルートで手に入る。

奴隷魔族の名は、シエナと言った。

皇太子は、この女に一目惚れだったが、それでもまず王に会わせた。王が気に入れば、今夜すぐにも女は王の後宮に入れられるだろう。

「ほう、美しいのう・・・。」

王も一目で気に入ったようだった。

けれど、傍の皇太子のうかない顔を見て、その女を我が息子へと譲り渡した。

「全ての権利はそちに譲った筈、その女をどうするかは次の王であるお前が決めるが良い。」

「・・・わしはもう歳じゃ。この上、若い妃と遊んでいたのでは、寿命を縮めてしまふわい。」

商人から贈られた女奴隷は、晴れて皇子の所有となった。

皇太子は、すぐにこの奴隷・・・シエナを正妃とした。

他の国にも例のない、珍しいことだった。

「・・・私は奴隷で御座います、妃の座に就くなど、恐れ多いことです、お許し下さい・・・」

シエナは突然変わった我が身の処遇に戸惑い、皇太子に訴えた。

「お前はもう奴隷ではない。この国は、民を身分で分け隔てたりはせぬ。」

「・・・それに、お前が奴隷だと言うなら、この私も奴隷の血を受けた混血なのだよ。」

そう言つて、皇子は妃の訴えを取り合わなかった。

見目麗しい皇子と妃、二人の結婚は国民全てに祝福された。

夫となった皇太子は、妃に兄弟たちを引き合わせた。

「もう一人、血を分けた弟がいるが・・・あれには会わなくても良い。」

妃の目が、不思議そうに皇太子を見つめた。

シエナの美しさよりむしろ、その優しさを皇子は愛した。母に望むことの出来なかった愛情を、この妃が満たしてくれた。

けれど、不穏な翳が、すぐ足元にまで伸びている事に、皇子は気付かなかつた。

「皇太子殿下、僭越ながらお耳に入れさせて頂きます。近頃、弟君の悪い噂を耳に致します。それと、ザルディン公など一部の臣下た

ちの良からぬ噂をお聞きになりましたか？」

父代わりであり、忠実な臣下でもある二ナイの忠告に、ラルフは黙って頷いてみせた。

弟、セフの行動は、日に日に過激になり、先日も危険を承知で東の神殿を荒らした。冥界神の聖域を荒らす者など、この国始まって以来の事だった。

熟練の兵士ですら半日で逃げ出す危険な森を、半分焼き払って皇子が得た物は、古ぼけたテキストが一冊だった。

強い呪いが掛けられており、人間ならば触れただけで指が腐り落ちた。

皇太子にすら、その書物を読む事は出来なかった。強い瘴気を放ち、近づく者を拒む。

いにしえの魔術書・・・それを弟は別の紙へと書き写し、闇のギルドへ売り払ったと云う。

ラルフも、これを見逃す事は出来なかった。

「愚かな弟よ、父上のお許しも得た。

お前は今日から西の離宮へ押し込めの身だ。」

兄の皇子の宣告にも、この弟は鼻で笑ってこう言った。

「およしなさい、兄上。

父上にもう一度御相談を。・・・でなくば、西の離宮は吹き飛びますよ？」

王も皇太子も、この皇子には手を焼いていた。

そして、古くから王国に仕える臣下達が魔族の血を引く皇太子に反感を持っている事に対しても、この事件はさらなる危機感を煽る結果となった。

魔族が支配し、人間が奴隷のようになって暮らす国は、多く聞かえている。

強過ぎる魔力を持つ弟のセフを、臣下達は警戒した。

やがてはこの国を、魔族が支配する、人間にとっては非常に暮らしにくい国へと作り変えてしまうのではないかと危惧した。

年々、混血の流入は増え続け、国民の一割にもなろうとしている。

王はラルフの母より後、正妃を定めなかった。それは皇太子の座が不動のものであると喧伝する事であり、他の腹違いの兄弟たちを抑える事でもあった。

皇太子の正妃と定められたシエナの権勢は、並ぶ者もない。後宮の女達全てがシエナに額ずいた。未来の王妃に。

けれどシエナは一人の時間を大切にした。かすずかれて過ごす事は彼女の好みではなかったし、とても疲れる事だった。王以外には訪れる者のない女の園。誹謗中傷は当然のものだったし、女同士の醜い争いも絶えなかった。

それらの喧騒から逃げるように、シエナは庭園によく訪れる。その隔絶された世界に、時折、招かれざる者は来訪した。

色とりどりの花が咲き乱れる広大な庭の一隅。女達もここまでは来ない、片隅の岩陰をシエナは好んだ。そして、時折、高い城壁の上、皇太子妃の頭上から声を掛ける者がいるのだった。

年端もいかぬ少年が、この高い壁を難なく越えて、シエナの前に降り立った。

「シエナ、いいものをあげるよ。」

後宮は男子禁制だったが、この少年には関係のない事のようにだった。それでも騒ぎにならぬよう、ひと気のない時を狙って、正妃の前へ現われた。

「ほら。」

その手の上には、見た事もない小さな金色の鳥。

羽根が震えるたびに、輝く光の粉を辺りに振り撒いている。明らかに、現世の鳥ではなかった。

「これは・・・？」

「幻獣・・・魔術の本に書いてあったんだ、幻獣を捕え、契約を結ぶ方法。」

コイツは簡単だよ、口移しにある種の餌を与えるだけでいい。だから

ら、シエナにあげるよ。」
いつ、正妃を見付けたものか、気付けば後宮へと忍んで来るようになっていた。

この不思議な少年が、皇太子の兄弟の中でただ一人、妃に引き合わせなかった皇子だという事をシエナが知ったのは、まさにこの時だった。

幻獣など、高等の魔術にもその扱い方など知られていない。魔術の本、その一言でピン、ときた。

ああ、この子が皇太子さまの弟君なのだ・・・シエナは温かい目で、少年を見つめた。

「あなたが末の皇子のセフ様だったのね？」

兄様がお話になっていたわ。恐ろしい森に入り込んで、神殿に安置されている禁断の書を盗み出した、・・・って。」

「あれは禁断の書なんかじゃないよ！ それに盗んだわけじゃない、借りただけだ！」

ムキになって、皇子は反論した。

「でも、それを悪用して、闇の市に売ったのでしょう？」

兄や父にはロクな返事もしないこの皇子が、シエナの質問には素直に答えた。

「・・・大事な事は書かなかったよ。幻獣の事とか、闇との契約とか・・・危なそうな章は全て抜いたから、無害だよ。・・・お蔭で大した金にはならなかったけど。」

ボヤクように告げる皇子に、正妃は腕の高価なブレスレットを外して手渡した。

「こんな物、貰えない。」

「この小鳥のお礼よ。少なくとも、無害な魔術書よりは高く売れるわ。」

・・・ね？ だから、もう危険な真似は止めてちょうだい。

皆、貴方を心配しているのよ？」

皇太子妃の言葉に、皇子は黙って俯いてしまう。

その表情が、何かを言いたげなことに気付き、シエナは促すように少年の頬を撫でた。

「・・・誰も俺の事なんか気にしない。」

兄上は俺を、珍しい生き物か何かのように思ってるし、父上には傍に呼ばれた事すらない。」

吐き捨てるように、妃に告げた言葉の裏側に、この末の皇子の救いを求める気持ちが隠されていた。兄の皇太子がそうであるように、この弟の皇子も、誰かの中にその存在を見付けたいと思っている。・
・愛されたいと願っている。

母が我が子にそうするように、シエナも少年に腕を伸ばし、精一杯の優しさで包み込んだ。

抱き締められる事に慣れていない皇子は、すぐに腕から逃げてしまったが。

「皇子！ 誰にも愛されていない者など存在しないの、父君も兄上様も、本当は・・・」

その言葉は、走り去ってゆく皇子の後姿には届かなかった。

第四話

突然の凶報を、シエナは後宮で聞かされた。

皇太子であるラルフも、その傍にあつた。

最近、体調の思わしくなかった国王が、急に死を迎えたのだ。

国王崩御の知らせは、近隣諸国にまで知れ渡り、それと同時に新しいラルフへの使者が内外から詰め掛けた。

慣例に乗っ取り、盛大な葬儀の列が長く続き、壮麗な墓標が大地にそびえた。

喪に服す長い期間が過ぎると、皇太子は祝福されて王位に就いた。

そして、弟セフとの長い間の確執が、表面に現われるようになった。

「セフはまた王宮を抜け出したのか・・・？」

「はい、今日で一週間になります。三日目までは供の者が見張っておりましたが、その後はさっぱり・・・。」

二ナイの報告を受け、若き王は溜息を吐いた。

「探し出して連れ戻すのだ。」

「・・・あれがまた、騒ぎを起こす前に。」

二ナイは平伏し、それでも下がる事はせずに言葉を掛ける時を窺った。

その様子に気付いた王が、先を促す。

「・・・どうした？ 何かあるなら、言ってほしい。」

私は、そちをもっとも頼りとしているのだ、遠慮は要らぬ。」

「怖れながら・・・。」

ザルディン公とガルバ公の動きが気に掛かります。

何か悪い予兆でなければ良いのですが・・・。」

このところ、何かと貴族達は集まって秘密の会議を開いているようだった。新王の腹違いの兄弟たちも、何人かはこれに出掛けると聞く。

けれど、王や側近の二ナイには、一度も招待の声が掛からない。

王の憂いに気付いたか、問題のザルディンが王に謁見した。

「王よ、このところの財政逼迫の現状を御存知か？」

この危機を脱するには、少々の荒療治では足りませぬぞ。」

専売の品を持たないアルザス王国、国は栄えていたが、王宮の財政は苦しい。

ザルディンは常から、商人の特許剥奪を訴えていた。

「商人たちを通しての流通に任せておいては、物価の高騰を招き、ひいては国の財政をさらに圧迫するのですぞ。・・・このままでは王家が倒れてしましましょう。」

いにしえの昔から、多くの支配者たちが同じ過ちで倒されてきたのです。

私はこの王国を誇りに思い、亡き先王を尊敬している。王家を滅亡から救う事こそが我が使命と心得ているのです。・・・その為の覚悟はすでに出来ておりますぞ。」

「うむ。・・・しかし私は若輩ゆえ、財政の事はよく解からぬ。

そちを頼りとしているのだ、任せるゆえ、存分に力を揮って欲しい。

「財務を一手に握る古参の臣下は、深々と頭をたれ、王に服従の意を示した。」

「・・・ときにザルディン。このところ、ガルバとよく会うそうだな？」

私には聞かせられぬ相談か？・・・お前達、一体何を企むのだ？」

「これは心外で御座います。」

・・・確かにガルバ公とは懇意に接しておりますが、王に疑いを受けよう事など、何一つありませんぞ。まあ、王の疑われる通り、ガルバは腹黒いところもあり、雲を掴むが如きに未だ詮索の尽きぬ男ではありませんがな・・・。」

好きで付合っているワケではない、とザルディンは強調した。

「あれでなくば解からぬような、裏の事情もあるので御座います。」

御心配は無用。全ては私の一存・・・王には及びませぬ。」
有無を言わさぬ口調で、ザルディンは王の詮索を押し止めた。

王は孤立している気配に苦しめられた。

臣下は王を遠巻きにしているような気がし、血を分けた弟は日に日に、母に似てくる。

眉を顰め、横目で睨むような眼差し・・・母に追い払われたあの時を思い出す。

『頭痛がするの、あっちへ行つてちょうだい。』

同じ目で、弟は言った。

「用がないなら、お引取り下さい。」

その横つ面を殴りつけた。

「王！」

叱責の声、侍女たちの悲鳴が上がった。

傍に控えていたシエナがその手に縋り付いた。

「お止め下さい、国王様！ お気を静めて！」

あなたの、たった一人の弟君です！ ラルフ様！？」

頂点に達した憤りを冷ましたのは、この妃の声だった。

「どうか・・・冷静に・・・」

跪くように膝を地に着け、兄弟の間に両手を広げて、身体で国王を止めた。

荒い息の下、王は戻るとだけ告げて、弟の部屋を辞した。

地面が揺れているような感覚を覚え、ふらつく身体を側近たちが支えてくれた。

「なぜ・・・、こうなのだ・・・。」

私の、何が間違っていると・・・、」

絞るように紡ぎ出された言葉の意味を、知る者は妃のシエナ一人だった。

「・・・セフめ・・・、よくもこの私にあのような口を・・・。」

未だぶり返す怒りに拳を震わせ、王は呟いた。

母と同じ冷たい美貌が、まるで見下すようにこちらを見つめる。言い知れぬ怒りに身体が震えるような気がした。

最愛の妃、シエナが冷たい飲み物を差し出したが、手に取る気にもならない。

「ラルフ様、一口だけでもお飲み下さい。」

・・・気分が変わりますわ。昂ぶった心を静める為の一口です、儀式のようなものです、一口啜るだけで・・・ほら、潮が引くのをお感じになられるでしょう?」

シエナの言う通りだった。

ほんの一口のワインが、喉を通り、胃に落ちてゆくだけで、頭に昇っていた熱も、一緒に引いてゆくのが感じた。シエナの、水系魔族の力も働いているのだろが、いつも妃に癒されているのだと、こういう時に痛感した。

「ついカツとなつてしまった・・・。セフには非など無いのに。」

あの目・・・私を嫌うあの目付きが許せないのだ。

母と同じ目で・・・お前までが、この私を疎んじるのか・・・?」

王が弟への不満を洩らすと、決まってシエナは哀しげな眼差しを王に返す。

王と弟君、二人の愛憎が表裏一体である事を、シエナは見抜いていた。

「ああ、貴方様とセフ様・・・お二人が、共にお二人の事を考えられれば良いのです。」

決して、難しい事などではありませんわ・・・。互いを、理解しようという心をお持ちになれば良いのです、弟君を愛して差し上げれば・・・。」

王妃の頬に、涙が流れた。

「私にも妹がおります。・・・いいえ、黙っていた事はお詫び致します。」

これ以上、王に御心痛の種を増やしたくなかったです、妹は早く

に逃げ出して今は自由の身。

私も心配などしてはおりません……。きっと、幸せに過ごしていると、信じておりますもの。」

妃の告白に、王は赤面の思いだ。自分の問題ばかりに気を割いて、愛する女の気持ちにも気付かなかったとは。

「……済まぬ。私は愚か者だな。」

この世の不幸を一身に背負っているわけではないと言つのに……。

「

王は落ち着きを取り戻し、穏やかな目に戻ってシエナにそう告げた。弟への苛立ちは、亡き母への深い想いの裏返しだ。王はそれを素直に認めた。

王妃はまだ、言い足りない言葉を喉の奥に残していた。

弟君を憐れんでおあげなさい……。しかし、その言葉は今はまだ、王の心には受け入れられないだろう。続く言葉を妃は呑み込んだ。

「兄弟姉妹は良いものです、ご兄弟を多くお持ちの王になれば、解かるはず……。」

「……血を分けた者ともなれば、その絆は格別ですわ。」

「もう良い、シエナ。」

あれの話は聞きたくない。」

王はかぶりを振り、妃の言葉を遮った。

弟のセフが、密かに後宮へ通う事実がついに兄王に知れた。

我が弟の、妃へのただならぬ想いに気付いた時の、兄王の戸惑いと憤りは計り知れない。

また、その事実をひた隠しに黙っていた妃にも疑いを持った。

「シエナ……。弟がお前に会いに行っていると、どうして私に話さなかった？」

沈黙を最初に王が破った。

「申し訳御座いません……。言い訳をするつもりは御座いませんが、セフ様は、やましい事など何一つ、なさいませんでしたわ。それだ

けは信じて差し上げて下さいませ。

弟君は、私を兄君の妻とした上で、私に接しておられたのです。

私は断罪されても仕方のないところですが、・・・けれど、誓って、ラルフ様を裏切ってはおりません。信じては頂けないでしょうけれど・・・。

妃の言葉に嘘は感じられなかった。

けれど、一度芽生えた疑惑の種は、どうしても消し去る事が出来なかった。

王は唇を噛み締め、怒りを静めた。

弟のセフが、まるで自分を苦しめる為だけに産まれてきたように思えた。

第五話

王は、疑心のあまりに妃を結界へと閉じ込めた。

術者が呼ばれ、王妃を閉じ込めるために結界を張った。・・・それは、本来、重罪を冒した犯罪者を封じるための職であり、その者自身、王の寵妃を閉じ込めると知って、たいそう驚いた。

同じ術で、弟までも閉じ込めようとしたが、残念ながら、弟の魔力の方が勝っていて、それは出来なかった。セフの為に呼び寄せた術者は、半死半生の呈で逃げ帰ってしまう。

王は知らない。

母の違う兄弟たちが、自分と弟をどのように見ているのかを。

ここに、密かに杯を交わす二人の男がいる。

一人は大柄で、逞しい戦士。もう一人も、細身ながら頑強な肉体を誇っている。

二人共、髪は赤く、赤ら顔だ。王宮の血筋らしい整った上品な顔立ちをしていて、むしろ、釣り合いが悪い。眼光は鋭かった。

若き王より幾らか年上の兄弟のうちの二人だ。

義兄のバーリアとミルアは同じ腹から産まれた兄弟だった。本来、次の王と定められていたのは、このバーリアだった。

・・・それを恨んでいないと言えば嘘になろう。

しかし、多くの妃を抱えるハーレムにおいては、皇太子などという席は、空手形以外の何物でもない。国王の気持ちひとつで、次期国王の指定は変わってしまう。

国王が寵愛した妃の子供が、皇太子の席に着く。

現に、バーリアの前には、その腹違いの兄の一人がそこに座っていたのだから。

・・・それをどうこう言うつもりなどない。

結局は運命なのだ。自分の頭上には、はなから王冠が無かっただけ

のこと。

だが、この生真面目な義兄は、この国の行く末を誰よりも案じていた。

この国のためならば、と、命を差し出す覚悟さえ出来ていた。

・・・そして、それを証明してみせた。

「ミリアよ、亡き父と母には誇りを持つて会いにゆけるぞ。

我等の成したる事、決して間違つてはいない。」

「もちろんです、兄上。

災いと呼ぶ、あやつだけは・・・元凶だけは取り除けるはず。」

二人は互いに頷きあつた。

魔族の血は、多くの人間の考えを変えるに十分な脅威であつた。

ある者は心奪われ、ある者は警戒し、ある者は野心を抱いた。

「ガルバは危険な考えを抱いている。・・・それを思わせたのも、あやつだ。

忌まわしき魔族の仔、どれほど、この国を窮地に立たせれば気が済むのか・・・。」

若き王は知らない。

王の実弟、セフが、黒い陰謀の渦を招き寄せる元凶となつた事を。

その強過ぎる魔力が、災いであつた事を。

「ガルバは魔族との契約を進めているらしい。ザルディンが目を光らせているとは言え、油断ならぬ奴だ・・・、いつ、この国を売り渡すやも知れぬ。」

「兄上。闇のギルドとの取引は、本当に・・・？」

ミリアは兄に問い掛けた。

闇のギルドが、恐ろしい犯罪組織だという事は誰にでも判る。その組織との取引を、兄のバーリアは進めているのだ。

事もあるつか、この国の皇子をギルドに売り、代わりに邪魔となる最大の人物を暗殺させるといふ取引だつた。街の商人達を牛耳る仲買頭頭のダナスという男がそれだ。

ターゲットにされたのは、もちろん、厄介者のセフだ。

「しかし、兄上。あやつの魔力は桁が違いすぎます。・・・どうやって、捕えると言うのですか？」

「この薬を飲ませるのだ。」

「・・・ギルドの者が置いていった。」

バーリアが手に出したのは、小さなガラス瓶に詰められた黒い液体だった。

ミルアも興味深げに見つめている。

「強い麻薬だ。これだけの量をひと息に飲めば、純粹の魔族であっても中毒に掛かり、薬なしではいらなくなる。・・・これを、飲ませるのだ。」

ミルアは目を見張り、息を呑んだ。

黒い麻薬。・・・それは、噂だけは聞き覚えのある、『暗殺者の血』と呼ばれる薬だった。

「セフは我等を信用している、珍しい飲み物とも言え、信じて飲み干すだろう。」

皇子はまだ15歳。

甘やかされて育ち、この世の仕組みも理解はない。

闇のギルドの一系列である、アサシン結社。その構成員たちは、全てがこの薬の常用者であり、強い麻薬の中毒に罹っていると言う。薬のためなら、どんな事でもやってのけ、薬の為に生きている。

そして、この薬は常用する者の精神を高揚させ、限界以上の力を引出す効用もあるのだ。

「・・・恐ろしい薬だ。」

これは、アサシンを作るためだけに開発されたものなのだ。

殺戮の本能を高め、理性を麻痺させる。神経を研ぎ澄ます代わりに、命を削るのだ。」

通常の麻薬のような陶酔はない。だが、もっと厄介な・・・無敵という幻覚に溺れる。

この時代のアサシン達は、皆、短命だった。

後に、薬に代わって洗脳術が、ほどなくアサシン結社の主流となる。

「結社からの使者は、セフを欲しがっている。」

「……あれほどの魔力を持つ者は、ドラゴンくらいだそうだ。」

憎々しげに、バーリアは言った。

「ドラゴン……」

ミアは絶句した。

魔族の頂点といわれるドラゴン種。それが、どれほど恐ろしい魔族なのかは、数々の伝奇が伝えている。

「あやつが暴走するのは目に見えている。」

兄弟でありながら、あの二人の憎悪はどうだ？

「……いずれ、衝突は免れまい。」

この国に、魔族の血は稀であった。混血同士が本気で争った時、どれほどの被害を受けるか……バーリアは、その点を危惧している。この国は、人間の国。

魔族の手に渡すものか……、そんな思いも強くあった。

「ですが、兄上。……もし、万が一、あやつを取り逃がした場合……

……闇のギルドは黙ってはおりませんまい、その時はどうなさるのです？」

「……案ずるな、俺とお前が殺されるだけだ。」

暗い目でそう答えた兄の言葉に、ミアも覚悟を決めた。

契約の不履行は、依頼者の血をもって贖う。……それが、アサシンの掟。

「我々だけではない。」

兵士たちや近衛にまで、不平を抱く者はいらる。

「……そう長くはないぞ、現王の治世もな。」

バーリアの言葉を裏すけるように、ラルフの悪癖が表に現れ始める。若き王は人一倍執着心が強く、望むものは手に入れずにはいられな

いという性癖を現わした。

他人が、大切にしている物ほど、欲しくなった。手に入らない物を欲しがった。

最初のうちは、側近のニナイや妃のシエラが、それを押し止めた。旅の途上に立ち寄った冒険者から、類稀なる宝冠を見せられればそれを欲し、胡散臭い行商人から世にも珍しいと触れ込まれば、猫のミイラであれ褒賞を与えた。

ただでさえ、逼迫した財政は窮状を示す。

けれども、財相のザルデインは何も言わない。・・・むしろ、焚き付けるかのように、商人たちを引き込んだ。もともとが疑心のない王の事、臣下を疑う事も知らない。

新しい王のそんな様子に、臣下達がいつまでも、諾々と従っているはずなどなかった。

来たるべくして、その時は訪れた。

「王よ、お退き下さい！　ここは私が食い止めます、お早く！」
印を結び、鋭い声でニナイは王を促した。

黒魔法、時間と空間へ干渉し歪みを生み出し、負のエネルギーを作り出す危険な攻撃魔法を、ニナイは練っていた。王宮の広間がレンズのように丸く歪んで見えた。

プラズマが幾筋と、その歪みの中に走っていく。

「オン！」
声と共に放たれた一撃は、広間へ殺到した若い近衛達に向けて走ってゆく。

炸裂。

床や壁を抉り、近衛達の身体を引き千切って、衝撃波は渦を巻いて消えた。

再び印を結ぶ。通常の混血であるニナイには、これほどの魔法を扱う能力はない。そのため、命を削って魔力を練った。

練る間に隙が出来る。

飛来した槍が、宰相の腹を貫いた。

「ニナイ！」

「・・・は、早くお行きなさい、

早く王を！ 安全な場所へ！」

留まろうとする王は、味方の兵士に引きずられるようにその場を逃れた。

裏切りの兵たちは後から後から、増えてゆく。

ニナイは、自身に殺到してくる刃もろとも、第二波を放った。

地響きと轟音、かろうじて側近の生を信じ、王は城を逃れ出た。

そこには近衛隊長のラマダと、軍部相のカラルが控えていた。

「よし、国王の御無事は確認した！ 総攻撃！！」

王の言葉を待たず、砲撃が始まった。

・・・ラルフは王としての無力さを再度確認する事となった。

第六話

「馬鹿な・・・、王宮にはまだ、逃げ遅れた者が多数居るのだぞ・・・！」

「そのような者に構ってはおれません、王よ、御英断を！」

王国の危機なのです！」

カラルが続いて、ラマダも言った。

「国王陛下、貴方様の一言で、兵士の士気が変わるのです！」

裏切り者どもに、死の鉄槌を！」

完膚無きまでに叩き潰す事のみが、王国に平穩をもたらすのです！」

事情を未だ知らぬラルフには、彼等の望むままに行動する以外に、出来る事などなかった。

「・・・解かった・・・、そちらの言うままにしよう・・・」

王の苦渋の返答に、即座にカラルが動いた。

まだ歳若く、王よりも少しだけ年上だった。けれど、苦勞知らずの王に比べ、10は上に見えるほどの落ち着きを持っている。もう一人の側近ラマダは歴戦の勇者、引き締まった体の至る所に武勇の跡が見える。

二人は王を誘い、木立の向こう、開けた台地に集結した全兵士の前へ立たせた。

若き王は、声を限りに叫ぶ。

「皆！ 王宮を汚せし者どもを討ち滅ぼすのだ！」

我が威光は未だ衰えぬ事を知らしめよ！！」

歓声は、怒号となって、王宮へと雪崩れた。

・・・クーデターは半日で終結した。

二ナイと対峙した不運の近衛数十人が死に、多くの負傷者が出たが、比較的すみやかに制圧された。平穩なこの国初のクーデターは、このようにあつけない幕切れとなる。

当初、黒幕と思われた二人・・・ガルバとザルディンは、さすがに証拠など残さない。

捕虜となった誰に聞いても、この二人の関連を示す証言は得られなかった。

煙のくすぶる王宮の城壁を眺め、ラルフは焦燥の念に駆られる。後宮の女達にも被害があったと聞いたが、正妃シエナの無事は未だに確認されない。

立ち尽くす若き王の元へ、次々と報が寄せられた。

兵士たちが、続々と王の前に跪いては詳細を告げる。

「街への被害は最小に食い止められた模様です、神殿地区の被害報告をお待ち下さい、」

「地主頭と武器商のウセルを捕えました、逃亡中の商人どもも、必ず捕縛致します、」

それらの報告に、王は小さく頷いた。

兵士たちには威厳の衰えぬ様を演じてみせ、そうして後ろを振り返った時には深い憔悴の翳りをその顔に浮かべている。蒼褪めた美貌が側近に問う。

「・・・妃の無事は確認出来ぬのか？」

狼狽の色を隠さず、王は馳せ参じた側近たちを問い詰めた。

どうして誰も、シエナを連れ出して逃げなかったのか・・・、王は苛立っていた。

ニナイが辛うじて救い出されたという報告が入る。

重症を負い、医師の元へ運び込まれたらしい。

軍部相カラルが告げる。

「軍の不満分子と近衛団が、王族の一部と結託したのです。

ラルフ様の兄、バーリア様とミルア様は混乱の中で死去されました。皇子たちが相次いで亡くなられると、戦線は崩壊、我が軍が勝利を収めました。

・・・おそらく、お二人が中心かと・・・。」

ラルフは無言で頷いただけだった。

疑問を口にする事は憚られた。二人の死に様は、どんなものだったのか・・・おそらく、兵士によって斬り倒されたに違いない。敵とはいえ、皇子を殺傷したのだ、その者は褒美どころか重罪に値する。

ラルフはこれを不問とし、それ以上の言及を避けた。

「・・・弟は・・・、セフはどうした？」

「逃亡中で御座います。しかし、兵を差し向けております、吉報をお待ち下さい。」

カラルが跪き、答えた。

「あれは首謀者の一人だ、必ず捕えよ！」

無理とあらば、殺してもよい！」

王の許しが出たことで、部隊は俄然、色めき立った。

それだけセフは、多くの者に疎まれてきたのだ。

「ウセルら二人を拷問に掛け、首謀者どもの名を聞き出すのだ！」

「・・・一人も洩らさず捕えよ！ でなくば、追放せよ！」

王は人が変わったように、厳しい命令を次々と出した。自身の甘さが引き起こした今回の事件が、骨身に沁みていた。

ザルデインとガルバが遅れて参じた。

「御無事でしたか、国王！」

「裏切り者どもはどうした！ 追っ手は差し向けたのか!？」

二人は口々に言葉を発しながら、王に近付いた。

ラルフは呼吸を整え、二人に対峙する。

「・・・遅い出仕だな。」

会議が長引きでもしたか？」

国王の一言に、ガルバは顔色を変え、ザルデインは押し黙った。

自分たちの命が、首の皮一枚で繋がっている事を思い知らせる一言だった。

セフがクーデターに加担していたかと言えば、決して関わりなどな

かった。誘われて、会議らしき集いに参加はしたが、それが何の集まりかなどという事に関心はなかった。

疎んじられる身が、時折、そうして招いてもらえる事が嬉しかった。それが自身を陥れるための罠だとも、気付く事はなかった。

「皇子、こちらへ！」

抜け道があります、岩窟神殿から外の国へ逃げ延びて下さい！」

年老いた門番が、雑役倉の影から手招きしていた。

何か言おうとする皇子の手を掴み、門番は素早く辺りを見廻すと裏手へと引つ張った。

「ここからお逃げ下さい、まっすぐに、途中の二辻は右へ。」

そして、セフを穴の中へ突き落とす。

穴の底にはわずかばかりの地面があったが、転んだ拍子に膝を擦り剥いた。

見上げると、穴から射す日の光りは徐々に欠けてゆき、やがてセフの視界は暗闇に閉ざされた。穴を塞がれてしまったのだ。

セフが今、出来る事と言えば、この暗闇を歩く事だけだった。

絶望が、支配していた。

何も知らなかったのは事実だ。しかし、どう言い繕ってみたところで、誰も信じるはずがない。

クーデターが失敗に終わった時、多くの商人や地主が逃げ出した。

皇子は逃げなければならなかった。

王となった兄は、決してこの弟を許すはずなどないと知っていた。

そして、現実には、新しい王は弟を許す気などなかった。

「セフはまだ見つからぬのか？」

「・・・妃は？」

王は落ち着いた声で報告を促す。けれど、その目は尋常さを無くし、前へ引出された臣下は怯えた。この王の中の魔族の血を、臣下たちは恐れた。

情報が交錯した。

ある者は、瓦礫の山に潰されようとする王妃の姿を見たと言い、ある者は、二人手に手を取って王妃と弟君が逃げる姿を見たと言う。カラルは堪らず、王宮内に緘口令を強いた。

そのために、後、真実は長く知られぬ事となる。

クーデターの終焉より、十日が過ぎた。

「国王、魔道士ギルドより結界の呪印が届けられました。

・・・しかし、このような物を何に？」

呪印は魔法陣を描く為に、当時、必要とされた書物で、元を正せばあの時、冥界神の神殿から持出された書物の中に書かれていたものだ。

巡り巡って、魔道士ギルドの研修所で洗練され、見事復活した契約魔法の一つだった。

これを使えば、今までは不可能とされた魔族の侵入をも、防ぐ事が出来る。

・・・それほどに、強力な結界の陣を描く書だった。カラルの疑問に、王は危険な笑みを浮かべて答えた。

「弟を閉じ込めるため、必要なのだ。」

この時の、国王ラルフの精神状態は正常ではなかった。

長年、蓄積されたものが、堰を切ったように溢れてしまっている。

王は命令を変えた。

「弟を殺してはならぬ。・・・必ず、生かして我が前へ引き出せ。」

・・・母が愛した弟を、自身のものにする事が、唯一の、救いであるかのように感じた。

人々が忌み嫌う弟の目。夜に輝く、蒼い月と同じ・・・狂気の色だと誰かが言っていた。

確かにそうかも知れないと、兄王は思う。

全ての運命を狂わせたのが、この弟であるような気がしていた。

あの美しい月の瞳を、損ねないよう、閉じ込めて、二度とは外界に出さぬと誓いを立てた。

もう、誰の目にも触れさせぬ、と。

一度たりとも振り返る事なかった母への、復讐だったのかも知れない。

「妃は・・・シエナはまだ見つからぬのか・・・？」

憔悴しきった表情を見せるのは、決まって王妃の安否についての報告の時であった。

この時の王は痛々しく、誰もが目を伏せるほどだった。

第七話

・・・長い沈黙の後、アルザスの王は溜息を吐いた。

傍にはルシーダとナッツ。

「そうだ・・・、あれから5年も経った。

弟は、今でも私を憎んでいるだろう・・・。シエナを結界に閉じ込めた時は、殺してやるとさえ、言われたのだから。」

ルシーダが反論する。

「馬鹿言ってるよ、セフはそんな肝の小さい男じゃないよ。」

「そうそう、ちょこつと、ここの空気が苦手なんだと思いますぜ？

・・・何年も放浪していると、こういう豪華な宮殿ってのは、窮屈になるもんなんですよ。」

アルザスに入る前、焚火の前でセフが告げた言葉は隠して、二人は王に言った。

セフが兄王を疑っているのは、明らかだった。

二人の慰めに、王は笑みを浮かべる。

「済まぬ、気を使わせるな。」

王は感謝を示した後に、言葉を続けた。

「・・・ところで、どうだろう？

弟の目だが・・・、お前達はどう思う？

やはり、我が国だけが、あれを不吉と捉えるのだろうか？ 夜に輝

くのは、闇の力を受ける者だからだと、そのように言う者も居る。・

・・・私は、何処に居ても解かるので、便利だとくらいにしか思わなかったが。

あの瞳は、月の輝きのように、綺麗だ。お前達は、そう思わないか？」

ナッツとルシーダは黙って頷いた。

決して賛同するわけではない。珍しいとは思いますが、別段、それだけの事で、セフはセフだ。

身内を好きだと言うのに、理由など要らない。セフは良い奴だ、それで充分。

この王様は、やはり何処かズレている、二人はそう思っていた。

「・・・今は、セフが戻ってくれる事を心から望む。

二十年という時間を、埋めてゆきたい。私が、どれほど愛しているかを伝えてやりたいのだ。

例え、弟が、未だに私を憎んでいるとしても・・・。」

弟と共に、もつとも愛した女すらも、王は失ってしまった。

「シエラは、クーデターの混乱の中、突然姿を消してしまった。

当時はセフが連れ出したのではないかと、弟を疑った。

国民たちは、細かな経緯を知らない。

無責任な噂が広がり、シエナはクーデターの最中に死んだと思われるようになった。」

「本当は違うんだね？」

ルシーダが尋ねた。

街で拾った情報では、王の寵愛を受けた魔族の女は、クーデターの最中に崩れた宮殿の壁に押し潰されて死んだ、とされていた。

王や仲間たちは知らないが、セフはその噂を真実と思い、信じている。

「・・・シエナは、クーデターの後、二ヶ月も経ってから、変わり果てた姿で戻ったのだ。」

搾り出すような声で、王は悲痛な内容を告白した。

「自ら私の元を去ったのか、誰かに連れ去られたものか・・・、私には判断など出来ぬ。」

両手で顔を覆って、アルザスの王は過去を嘆いた。

連れ去った者・・・それを弟だとする疑いが、今も消せない。

ルシーダやナッツにも、王に掛けるべき言葉はなかった。

セフは何も語らなかつたし、シエナという女性の事も、ここで初め

て知ったのだ。

「でも……、

でも、王様！ 信じて下さいよ、セフはそんな奴じゃないんだ。」
堪らず、ナッツは声に出した。

反論されれば、ぐうの音も出ないだろうとは解かっている。

「私は、真実の全てを知りたいわけではない。

あの日、妃までが私を裏切り、弟と共に逃げたのか……それだけを、弟の口から聞きたいのだ。

……本当に……、お前が連れ出したのか……？」

ここには居ない、本物のセフに、アルザス王は問い掛けていた。

シエナの遺骸が発見されたのは、クーデターから二ヶ月たったある朝の事だった。

朝から二ナイが忙しく走り廻っていた。

さすがに混血、腹に開いた穴は、すぐに自力で塞いでしまったと言
う。

とても、養生などしてはいられない程に、多忙だ。

「国王、謁見の儀が滞っているではありませんか。

これ以上、民に順序を待たせるわけには参りません、本日の御予定
は、全てキャンセルして頂きますぞ。」

「私とて、遊んでいたわけではないぞ、二ナイ。」

王は不平を述べたが、忠実な臣下はまったくの無視で他の者に指示
を送っている。

そんな時に、門番が一人の女を城門の外で押し止めた。

「なんじゃ？ その筵は？」

……うわ、なんてヒドイ臭いだ、そんなものを王宮に入れるつも
りか！」

女の後ろには、牛に引かれた荷車があり、筵に包まれた細長い荷を
積んでいた。

荷は、八エがたかり、ひどい悪臭を放っている。

「ええ、ぜひ、入れて差し上げて下さいな。・・・王は御歡びになるはずですよ。・・・たとえ、どんな姿になっけていてもいい、と仰つたのですもの。」

ベールを深く被つた女は、憎悪を込めてそう言ったが、幸か不幸か、門番は氣付かなかつた。

「う・・・む、さすがにそれは取り次ぐわけには・・・」

門番は、戸惑いを隠せず、迷っている。

「でも、伝えなければあなたの首が飛ぶわよ？」

王の、大切な寵妃の亡骸なのだから。」

女の言葉に、門番は飛び上がり、慌てて城門の中へ引き返した。

その背中に、女は声を掛けた。

「ねえ、王様にお伝えしてね。」

今日のこの日をお忘れなきよう、って。」

門番は振り返つた。・・・女の姿は消えていた。

知らせを聞いた国王は驚いて門の外へと駆け付けた。

荷車は、そこに放置されたままになり、筵も来た時のままだつた。

王は、制止する臣下を押し退けて、筵を剥がした。

・・・そして、一目見るなり嘔吐した。

消えてしまった女が傍に立っていた。

「王様、御褒美を戴きたいわ。」

妃を連れてきた者には、どんな願いも聞き入れようと、仰つたはず。

王は、吐き気とショックで、ふらふらとしながらも立ち上がった。

その脇腹に、女はナイフを突き立てた。

「痴れ者！」

「きさま！」

王の傍に控えていた臣下たちは、あまりの惨状に一瞬出遅れ、女の凶行を止める事が出来なかつた。女はすぐに取り押さえられる。

幸い、王の傷は浅く、自分で歩く事さえ出来る。

「死んでよ！ わたしの願いはあなたの死よ！

よくも姉さんをこんな目に会わせてくれたわね！

なにが妃よ、結界に閉じ込めて・・・結局、奴隷だったんじゃない

！」

女が叫ぶ言葉が、耳鳴りのように響く。

脇腹に突き立つナイフの刃が、握った掌さえも傷付けた。

「シエナの妹は、きっと私を恨んでいる。

姉を連れ去り、死に至らしめたのは弟だと思っているのだ。

・・・私と弟を、殺すつもりでこの国へ入ったのだろう。」

王は目を伏せ、淡々と語った。

クーデターの最終章。

最愛の妃は王の元へと戻った。哀れな姿で。

女は嚴重な見張りと結界の中で、取り調べを受けた。

セフを閉じ込めようと用意していた結界の呪印が、こんな所で役に立った。

「・・・姉の遺体が私の家へ投げ込まれたのは十日も前よ。

窓から・・・、まるで、ゴミでも投げ込むように・・・。」

女はむせび泣いた。

「暗がり、数人の若い男たちの姿が見えたわ。

ならず者を雇って、せめて死体だけは返してやろうとでも言つつも
り？」

ニナイが女を説得した。

「待て、早まった考えを持つものではない。

王は、お前の家を御存知ないのだぞ？

なにより、妃自身がお前の所在を御存知なかったのだ。・・・おか
しいではないか。」

しかし、女にはもはや、何を言おうと通じなかった。

「・・・私は忘れないわ。この仕打ちは忘れない。」

女は繰り返した。

名も言わぬ妃の妹を、王は勅命を使って放免した。
誰もが、その危険を訴えた。

第八話

「それ以上は何を聞き出す事も、説得も、出来ぬと思った。だから……、いや、もうこれ以上、恨み言を聞くのが耐え難かったのだ。」

女は城を出ると、姿をくらませ、それきり見ない。

王は絶望と悔恨に打ちのめされながら、それでも王宮で過ごした。

怨みや憎しみは、最初、行方不明となつた弟へ向けられた。しかし……。

二年、三年と経つうちに……激しい憎悪が、薄れていった。

結局、王も弟も、母には愛されてなどいなかったのだ。

そして、ふと、気付く日が来た。

弟として産まれた皇子の、何も持ち得ないその境遇を……。

「……父にまで疎まれる弟を哀れだと思えた時、初めて、弟の為に涙を流した。」

アルザスの王となつた兄の皇子は、自嘲の笑いを洩らした。

幼い頃、嫌がる素振りも見せず、黙つて後を付いて来た弟セフの望んだものは、この兄の関心だつたに違いない。愛されることのない弟の目は、獣の光を宿していた。

月の瞳が輝いて見えたのは、獣の目が澄んでいたからだ。

ふと、王は気が付いた。

「……そういえば、私はセフの顔も知らないままなのだ……。」

今の今まで弟と信じていた男は、偽者で、敵の女が化けていた。では、本物のセフは……弟は、どんな成長を遂げたのだろうか？ 王は関心を持って、二人に尋ねた。

本物のセフ……その足取りを追う前に、フィルの行方を追ってみ

る。

ファイルは、ようやく終えた裁判の後、グラントと共に、岩窟神殿へ到着した。

追放者の行動は今日一日は不問とし、明日には追放としてこの国のいかなる場所へも立ち入る事が出来なくなるのだ。

「・・・懐かしいぜ・・・。あの日以来だからな。

ここ、この上に出口があるんだ。覚えときな。」

ある場所へ来ると、グラントは指で示してホルに教えた。宮殿からの抜け道。

「あの日、俺は親父に言われて、ここでセフを待ってた。とある偉い方からの指示だ、ってな、皇子を逃がす為に待機してたんだ。」

グラントの手引きのお蔭で、セフは無事に逃げ遂せる事が出来た。

二人は顔見知りで、時折、セフは城を抜け出てはこのグラントの仲間たちと共に街で暴れた。

「俺はよお、最初見た時あ、お姫様だと思ったんだぜ？」

グラントのこの言葉に、ファイルは目を丸くした。

「んな驚くことか？」

「・・・可愛い面して、やる事のえげつなさつたらよ？」

さすがは魔族の血だ、って妙に感心したもんだぜ。」

さらに上方に見える破壊された神殿部分を指差し、あれはセフがフツ飛ばしたんだ、と付け加えた。奇妙な形に抉られて、岩山がすっぽりと無くなっていた。

「アルザスから逃がす為に、何人かの連携で、外の国へ・・・な。

誰の指示だったのか、ガキの俺にや教えてくれねえし、・・・第一、親父もその後、口を封じられちまった。陰謀は、どんな形で、誰それが関わっていたか・・・今じゃ、誰にも判るまいよ。」

グラントの口調は静かだ。

しかし、その悔しさは、表情の中に見え隠れする。

「クーデターが終わって・・・、首謀者と見られた中にも尻尾を出

さねえ奴等がいるには居たが、その後、些細な事で全員、押し込めにあつて引退させられた。

ガルバに、ザルディン、ライアスって言う街の顔役もクビになつたな。

なんでも、闇のギルドと連絡を取っていたのがバレたらしい。」

「闇のギルド？」

フィルはその辺りを詳しく聞きたいと思つた。

「ずいぶん手酷い拷問を受けたらしいが、最後まで口を割らなかつたそうだ。

ま、それは噂だけだな。

でも、案外、本気かもな。闇のギルドとの契約は厳しい。

破れば、命がないって言うくらいだしな……。」

喋りやしねえだろうさ、誰だつてな。……グラントはそう言つた。

「言付けは確かに預かつたぜ。」

……まさか、こんな近くにまで戻つてやがるとは思ひもしなかつたけどなあ。

一言くらい言つてよこせばいいのによ、相変わらず付合ひの悪い奴だぜ。」

傭兵崩れの男は笑う。

一緒に行こうというフィルに、一人で大丈夫だと大笑いする。手引きなら、慣れたものだ。

「だいたい、俺は追放になるのは三度目だぜ？」

法律の抜け穴か、よほどズサンな管理体制なのか、グラントは特別な手があると言っていたが。

「簡単な方法なのさ。……おっと、セフの知り合ひには教えられねえよ。」

その一言で、違法な抜け道と気付いた。

グラントは手を振り、フィルと別れて街へと続く坂道を下つていった。

フィルは予定が狂ってしまった。

「・・・さて、と。」

僕はどうしようか。」

フィルはしばらく考える。ややあって、一人、頷いて歩き始めた。

・・・神殿内の、抜け道へと。

洞窟は所々に日が射し込み、薄暗いながらも歩く事に支障はなかった。

巧く太陽光を取り入れられるように、明かり取りの穴が開けられているらしい。

・・・今、どのあたりを通っているのかも解からないが、もう随分歩いた。

セフもまた、ここをただ一人で歩いたのだと思うと、妙な感じがした。

フィルの進む洞窟の先に、人影があった。

不審。

「だれ？」

フィルは呼び掛けてみる。

この洞窟は、知られていないとグラントは言った。けれど、フィルより先に侵入者が居る。

まさか、セフが痺れを切らして一人で潜入してきた？

フィルは訝しむ。セフなら確かにそのくらいはやってのけそうだが、それならそれで、すぐに仲間と合流するはずだ。なにより、フィルの声を聞いて、無反応という事はない。

フィルはもう一度、呼んだ。

「誰だ？ セフ？」

影が動いた。

「・・・その名を知ってちゃいけないよ。」

この場所を知ってて、その名前も知ってる奴は、殺す事になってる。

「

少年の声だった。

フィルのすぐ後ろに、その影は立っていた。
おそらく、フィルよりいくつか年下だろう。

首筋に掛かる息が甘い。

その匂いを、フィルは知っていた。強い麻薬・・・アサシンだ。

冷静に、フィルは切り返す。

「結社の者か？・・・どうしてここを知っていて、皇子の名を知る者を殺すんだ？」

「頼まれたからさ。」

「誰に頼まれたって？」

「それは言えない。」

冷たい感触が首にぴたりと吸い付いた。

フィルは呼吸を計っている。

息を吐き・・・次の瞬間、後ろの敵から飛び退いた。

首筋をほんの僅かだが、斬られた。

フィルは敵の姿をようやく見とめた。全身黒づくめ、顔は目だけが覗いている。

その目は、暗殺者特有の濁った光ではなく、獣のような澄んだ光を湛えていた。

アサシンは狂喜した。

「すごい、今のすごい。」

・・・じゃあ、これは？」

ニードルが襲い掛かった。

フィルはさらに飛び退る。

その間を、アサシンは一気に詰めた。

一刀、これは辛くもフィルが避ける。剣を抜く間を与えてくれない。得物の剣はたぶん、特別製。少し短めで室内戦に向く。・・・こういう洞窟での闘いも。

目にも止まらぬとはこういう事をいう、凄まじい斬撃が繰り出され

る。

足元の苔に掬われる、態勢を崩したところへ更なる一撃が襲ってきた。

フィルは倒れる姿勢そのまま、思いきり敵の腹を蹴り上げた。

浅く入ったところでアサシンは飛び退ったらしく、ダメージを与えられなかった。

ようやく剣を抜く。

「すごい、すごい！」

こんなに強い奴、初めて。・・・じゃあ、これは？」

無邪気に笑っていたアサシンの目が、赤く光った。

第九話

アサシンの目が異様な光を放ち始める。

瞳と白目の区別はなくなり、ただ、禍々しいばかりの紅い光を放っている。

そして、全身を覆う黒い衣装が引き裂け、体躯が大きくなる。すでに、人間の形を留めていない。

頭が洞窟の天井につかえると、無造作に天井の岩を打ち砕いた。

それは、まさしく怪物であった。

掌を上に向けた。

鋭い鉤爪が伸びる。

ゴアアアアア！

人間の言葉は発しない。

「くっ！」

フィルは防戦一方となり、それも徐々に押され始める。

パワーの違い、スピードの違い、なにより殺気のケタが違っていた。

押し潰されそうな重圧に、ときに、目が霞みさえした。

したたかに、壁へ叩き付けられる。

ずるずると地へ倒れ伏した獲物を、さらに鷲掴みにして反対の壁へ

叩きつけた。

フィルの身体が動かなくなると、怪物は少しだけ身体を縮めた。

そして、人間の言葉でフィルに話し掛けた。

「ねえ、あんた名前は？」

ぐい、と髪を掴んで上を向かせる。

「ふ、フィル……だ、」

辛うじて答えたフィルの髪をぱたりと手放す。

力尽きたように、また、フィルの頭が地に落ちた。

「フィル、か……」

良い名前だなあ。羨ましいなあ。

俺、名前無いんだ。・・・貰ってもいいよね？」

無邪気な笑い声の後に、化け物は付け足した。

「これから死ぬ奴には、要らないもんね。」

鉤爪が、鋭利な刃に変化した。

トドメを刺される、フィルが目を閉ざした時、鏗鳴りの音が鋭く響いた。

ギリリリ・・・

兇刃を押し止めていたのは、炎を纏った二本の剣だった。

「セフ！」

一体、どういう事なのか、怪物とフィルの他にも侵入者が居たとは。「嘔吐きだ、アイツ。」

ここを知ってる奴は男と女が一人づつしか居ないって言ったのに！「さすがの怪物も、セフが相手では余裕を見せてはいられないらしく、表情が険しい。」

パワーも、スピードも、この新たな相手は互角の敵だった。

だらりと下げていた片手が上向けられ、鋭い鉤爪を生やした。すぐさま刃に変化。

右手一本でセフの両刀を防ぎ、左手で、腹を薙いだ。

風を感じ、セフは飛び退る。

間一髪で致命傷は避けたものの、破れた服の間からはぱっくりと開く傷口が覗いていた。

セフも、落ち着いたもので、冷静に判断を下す。

二本の剣を一本に戻した。

仕切り直し。

じりじりと、互いが間合いを計る。つ、と双方が動き・・・片腕同士がぶつかった。

続いて、怪物の右腕。

セフは空いた左手で印を結んだ。

掌を放つ。怪物の攻撃を弾き返した。

怪物は己のパワーに押されて、吹き飛んだ。

その隙に、セフは倒れたフィルに呼び掛ける。

「おい！ いつまで寝てるつもりだ！？」

さっさと起きて加勢しろ！」

朦朧とした意識の下に、フィルは仲間の声を聞き届けた。

ぐらぐらと揺れる感覚を元に戻そうと、フィルは頭を振った。

目を上げると、まさに、怪物とセフの一騎打ちの様相。

「二対一なんて卑怯だぞ、

弱くなんかなくせに。」

怪物はガシガシと爪を振り廻してセフを追い詰める。

セフは僅かな隙に怪物を蹴り飛ばして、間合いを取った。

「貴様のような怪物に、正々堂々も何もあつたものか。」

さっきの答えを告げてやる。

「・・・お前、嫌いだ。」

怪物はぽつりと呟いた。

「何やってる、フィル！」

時間を稼げ！」

声だけをフィルに向け、セフは怒鳴った。

振りかぶった怪物の、がら空きになった脇腹へ渾身の一撃をフィルが加えた。

すぐさま、反撃の刃が襲ってくる。激怒の唸り声を轟かせた。

怪物の意識は完全にフィルの方へと向かった。

セフはその機に乗じて、ぶつぶつと呪文を口の中で詠唱した。

意味のある呪文ではない、気を練る為にこうする。

炎のイメージ、火山のイメージ、マグマのイメージ・・・、

フィルがまたしても弾き飛ばされる。

怪物は、フィルにトドメを刺そうと手を振り上げた。

パワー、スピード、剣技、それらは互角。

しかし、魔力に至っては・・・、
セフの掌にチリチリと熱が集まる。

それは周囲が熱気に咽るほどの高温となった。

フィルと怪物の間に、音もなく人影が滑り込んだ。

閃光を伴う灼熱の火球が、セフの掌から弾き出される。

怪物の脇腹に、今度こそ、一撃が叩き込まれた。

肉の焦げる臭いが鼻をつく、そして、フィルは最大の技を繰り出した。

下から顎の骨、頭蓋骨までを一刀両断し、返す刀で肩から斬り下げた。

・・・普通なら、これで死なぬ者は居ない。ドラゴンの固い鱗すら斬り通す、奥義。

だが、この怪物はそれでも生きていた。

「い・・・痛い・・・、
痛いよお・・・」

か細い声で、泣いていた。

セフが近寄り、その脳天に剣を振り下ろした。

「・・・この怪物は、一体何者だったんでしょうか？」

痛む身体に顔をしかめながら、フィルは問い掛けた。

「さあな、・・・いずれ、この国に悪意を持つ連中が送り込んだんだらう。」

頭の程度も良くはなかった。」

早くから結社に入れられ、育てられた者は、知能の発達が極めて遅くなる。

暗殺技術のみに長け、それ以外の取り柄がない者など、数えきれないだらう。

「・・・誰が雇ったのか・・・、」

おい、その貴様・・・知ってるんだらう？」

視線は怪物の死骸に向けたまま、セフは声を荒げた。

「今すぐに出てこい。」

脳天を叩き割るぞ。」

姿無き第三者に、今度は向き直った。

「ま、待て！ 待ってくれ！」

「……出るから！ 今、出てくから、助けて！」

気配を消していたのか、痩せこけた男が岩陰から姿を現わした。

フィルは驚く。

「……その男は、裁判所で見た、役人の一人だった。」

「さあ、知ってる事は洗いざらいぶちまけて貰おう。」

「……コイツは何者だ？ アサシンにしては尋常じゃない。」

セフの質問に、男は悪びれたような曖昧な笑顔を向けた。

「……死にたいらしいな？」

「わ、わかったよ！ 言うよ！」

ソイツは結社の実験体だ！

「……アサシン結社では、色々やババい実験をやってるんでな……
そのうちの一匹さ。」

男の笑顔は卑屈なものから、なにやら嫌らしい笑みに変わった。

「……へへへ……、素質は良かったんだがな……。」

やはり、本家の化け物には敵わなかったな……。」

男の視線は、ねめつけるようにセフへと注がれている。

セフの眼光が陰しさを増した。

「本家？ どういう意味だ……？」

セフより先に、フィルがその意味を尋ねた。

「血筋が一緒でも、そいつは通常の混血以下だったのさ。」

第二世代って奴だ、混血と奴隷魔族の掛け合わせだって言うから、
期待したんだがな……。」

「お前は一体……、」

フィルの言葉を遮って、男はセフに向かって指を差してあざ笑った。

「はははは！ お前が殺したこの怪物が何者か、教えてやるよ！」

お前はなあ、実の甥を殺したんだよ！ 脳天を叩き割ってなあ！」
緊張が走った。セフはむろん、ファイルも声すら出ない。

「お前はまんまと逃げ遂せたが、実はもう一つの取引があったのさ……。」

あの女、王の子を宿していやがってな……、その胎児が売られたんだよ。」

男の言葉にセフは絞るような呻きを洩らす。

「ギルドの連中は血も涙もない、生きたまま、押さえ付けて女の腹を掻っ捌いて、中の胎児を引きずり出したそうだけ？ 奴等は胎児の段階から手を加える事で、遺伝子まで操作しちまうって話だ……そして出来上がったのが、そこに転がってる化け物ってわけさ……。」

「貴様……。」

セフの、くぐもるほどの低い声が漏れる。

裁判所の役人……民間の振りをしてはいるが、たぶん、ギルドの者だ。詳しすぎる。

「あの奴隷魔族を売ったのが誰か判るか？

……へへへ、知りてえだろう？ 知りたかったら、そのまま動くなよ……。」

男はじりじりと後ろへ後ずさる。……逃げようという考えが丸解かりだ。

セフは瞬時に男の胸倉を掴み、擦じり上げた。

「よ、よせ！ 俺を殺したら、永久に真実は闇の中だ！

わかった、黒幕の名を教える！ な？！ だから……！」

その先を、男は告げる事が出来なかった。

男の腹は、胸を中心に食い破られて、無くなっていた。

セフも、もんどりうって倒れ、呻き声をあげる。

左の肩が食われ、肉が削げ落ちていた。

ファイルは視線を戻す、さっき倒したはずの怪物に。

怪物は立ち上がっている。両腕は大蛇のようになり、先端が口を開け、その丸い口内で細かい牙を律動させていた。血が、洞窟の白い岩の上に落ちて、しみになる。

死によって、新たな生物学的な変化が加わったのだろうか、頭部はだらりと後ろへ逸れている。

・・・不死身？ いや、そのまま、どう、と倒れた。

第十話

怪物の変化が、元に戻り始める。ぶよぶよと、身体の筋肉や皮が、独自の生物であるように蠢いている。・・・やがて、止まった。

フィルは目をそむけた。

セフは地に伏したまま、まんじりともせず、遺体を見つめている。洞窟の床に血と脳漿を撒き散らした惨状の真ん中には、小さな子供の骸が横たわっていた。

二人共、一言の言葉もない。

実験により、麻薬漬けにしたあげく、肉体操作をして無理やり大人の能力を引き出したのだ。

それがどれほど惨い状況だったかは、すぐに見当がつく。

闇のギルドは、人体実験から戦争の仕掛け人まで、およそ考えつく限りの非道を尽くす。

まさか、血縁の者が、その犠牲者になるとは・・・。

セフがようやく口を開いた。

「フィル・・・、頼みがある。

事の真相は、誰にも話さないでくれ・・・」

力なく、その声は悲痛なものだった。

フィルは、無言で頷いた。

セフの傷は重症だった。腕が、まったく上がらない。

「この先に新しい連れを残している、そこまで手を貸してくれ。」

フィルの肩を借り、ひどい激痛に苛まれながらも、なんとかか歩を進める。

血は、止めどなく流れ続けている。

薄暗い洞窟の中、二辻に分かれた場所へ辿り着いた。

「セフ！・・・ひどい怪我だ、すぐに横になって。」

金色の髪少年は、フィルの手を借りて、怪我人を仰向けに寝かせ

た。

蒼褪めたセフの額には汗が浮かび、一刻の猶予もない事を知らせる。少年は、フィルの目の前で、いきなりセフの唇に自分の口を合わせた。

「?!」

フィルはよほど驚いたらしく、仰け反って尻餅をついた。

「あ……」

「ごめんなさい、驚かしましたか？」

一息吸うと、また、同じように口付ける。

よく見ると、口を合わせて、その中に息を吹き込んでいるのだと知った。

うつすらと、セフが目を開ける。

徐々に、その身体が柔らかい光に包まれ始めた。

「……ぼくは治癒の息を使うんです、」
息を吸う。

「じゃあ、魔族かい？」

フィルの質問には頷く。そして、口付ける。

何度か繰り返し、やがて、深呼吸をして治療を終えた。

「もう、大丈夫。」

……セフは寝息を立てていた。

「いつまで待っても戻らないから、まさかと思って心配していたんです。」

少年はフィルに事情を話した。

ガルバの屋敷で出会い、助けられた事。一緒に仲間であるフィル達に合流しようと宿を尋ねた事、この時、セフは知人の追放の事実を知り、ルシーダが城へ招かれた事を知って、この洞窟へ来たのだと言う。

「短気な女性だから、放っておくと危ないって……」

セフが言っていたという言葉に、フィルも頷いてしまう。本人が聞

けば怒るだろうが、確かに当たっている。

「・・・ところで、名前を聞いてなかったね。

僕はフィルだ。」

「アシュです。」

思い出したように、二人は自己紹介をした。

「・・・今、何時くらいだろう？」

夜になる前にここを抜けないと・・・、

フィルは死者の群れを警戒していた。

「ああ、それなら大丈夫。彼等は自分の腰より高い場所には登れないようです。階段のない洞窟出口からは、侵入出来ないはずだとセフが言っていました。

城の側の入口も、たぶん、何かで塞がれたままだろうから、大丈夫だって。」

フィルはその言葉に安心しかけて、はっ、と気付いた。

・・・あの子供。

さっき倒したあの子は、いまも奥の通路に放置されている。
憂鬱な気分になった。

「今日はここを動かない方がいい。

・・・とりあえず、明日、考えよう。」

たぶん、襲ってくるだろう。けれど、その時はその時だ。

フィルの言葉を受けて、アシュはザックを降ろし、中から簡易ボンベとランプ、それと小さな鍋に携帯食料をいくつか取り出した。

フィルは困惑の表情でその様子を眺める。

食事の用意をしてくれようというのは嬉しいが、とても、食べる気にはなれなかった。

どのくらいか、時間が過ぎる。

アシュは手早く食事の準備をし、眠っているセフの隣りへ腰を下ろし、スープを一口啜った。

フィルは溜息ばかりが出て、手をつける気になれない。

「・・・なんの音でしょうか？」

ふと、アシユは手を止めて、フィルの方を向き、尋ねる。
ずるずると、何かを引きずるような音。

「・・・来たな。」

憂鬱な面持ちで、ホルが答えた。

セフは昏睡状態が続いている。

フィルが立ち上がった。

暗がりの中から、人影がゆっくりと姿を見せた。

その姿を見とめた時、アシユは最初、目を見開き、そして、堪らずにそむけた。

・・・どうやれば、あんな惨い殺し方が出来るのだろうか、
身体が震えた。

緩慢な動きで、死体はフィルに近付いてくる。

「どうしましょう・・・？ セフがこれでは・・・、」

アシユは横たわる仲間の傍へ駆け寄り、身構えた。

フィルはと言えば、困惑の後に、思い掛けぬ行動を取る。

子供の死体を、強く抱きすくめた。

「僕はセフのような魔力を持たない。・・・だから、こうやって止める以外の方法を思い付かない。

アシユ、この子はちょっとした知り合いなんだ。だから、これ以上は傷付けないでやって。」

フィルの思い切った行動に、何かを感じたのだろうか、アシユは何も聞かなかった。

食事を片付け始め、時折、心配げにフィルに視線を送った。

フィルは、夜の間中、この子供の死体を抱いて止めるつもりでいるようだった。

死体が腕の中でもぞもぞと動く。

「・・・ゾンビというのは、生者の温もりを求めて動くと言われて
いるけど、どうなんだろう？」

これだけ温めてやっていれば、そろそろ満足してくれてもいいの、と思う。

「そうなんですか？　．．．ごめんなさい、．．．僕は長い間閉じ込められていたので、世間の事は何も知らないんです。」

腕の中の死体は、小さくて、冷たくて、死んだばかりの為か、まだ柔らかい。

こびりついた血の跡が黒く変色し始めていくくらいで、死んでいるのか生きているのかも、見ただけでは判断し難い。

柔らかいふさふさとした髪が、首の辺りを撫でてくすぐる。

小さな掌が、しきりに爪を立てて、あげくに生爪を剥がしてしまうため、さらに強く抱き締めてやる事で、それ以上の身動きを封じた。こんな姿になって、これだけひどい目にあつて、それでもまだ、安らかに眠る事さえ許されない子供。．．．せめて、変化しないでいてくれるのが救いだ。

僕の知る限りで、もっとも不幸な子供だ、と、フィルは思った。

その子は今、フィルの胸の固い皮の胸当てを、食い破ろうとしてしきりに歯を立てている。

顎を割られているため、ほとんど力は籠もっていなかった。

これほどに、酷い話があるだろうか？　フィルは唇を噛んだ。

アシユはいつものまにか、寝入ったようだ。

フィルはぼやける思考をなんとか保っている。．．．一睡も出来なかった。

腕の中の感触は、相変わらず単調な動きでもぞもぞと暴れていたが、急に大人しくなった。

顔を上げ、映らぬ眼でフィルを見つめる。

何かの拍子に意識が戻ったか？　奇跡の到来を、フィルは期待している。

フィルはつい、手を緩めた。

やんわりと、その手を握って、子供はフィルから離れる。

掌の小ささが、胸を刺した。

背を丸め、地面に吸い込まれるように、子供の死体は岩の中へと溶け込んだ。

母の体内に戻ろうとするかのように見えた。

・・・朝が来たのだ。

どうか、このまま永久の眠りに誘われますよう・・・、フィルは祈った。

第十話（後書き）

とりあえず、ここまでです。

第三章 第一話

現在、宰相として力を揮っているのは二ナイだ。5年が経ち、彼ももう若くはない。王の右腕としての地位を、誰かに譲り渡す事を考えている。

「・・・本来、その第一の候補はすぐ傍に居るはずだったのだが。セフ様・・・、今、何処におられるのか・・・。」
年を取ると、溜息ばかりが漏れてくる、と、宰相は頭を振った。執務の為、机に向かいっぱなしの日々だ。

ラルフ王には腹の違う兄弟が大勢居るのだが、すでに半数は代が変わった。

現王は、兄弟の中でも下から数える方が早いほど、年若かった。王より下の者といえば、セフと、数人の弟君だけだ。

神殿地区から、その弟の一人が二ナイを訪ねてきた。

「国王は相変わらず、御病床の身か？」

「・・・呪いを解くに、専門の者が居ると聞かすが、呼んでみてはどうだ？」

兄弟たちからは、あれやこれやと智慧が寄せて来られるのだが、どれも今一つ、王の心を動かす事が出来ない。

「ええ・・・。そうしたいとは存じますが、なにぶん、国王ご自身が・・・。」

「うん、とは言わない。」

腕を組んで考え込んでしまったこの若い神官長は、国王のすぐ下、セフより三つ年上の兄弟だった。王の事も、セフの事も、よく知っている。

彼は人間で、魔族の血はまったく入っていない。

アルザスの神官は、人間でなくては勤める事を許されなかった。

神殿地区に住まう事を許される魔力の持ち主は、巫女の少女ただ一人だ。

二ナイのような重臣も、旅人でさえ、立ち入る事を禁じられる場所もある。

「バドロア様、・・・神の御掲示が？」

神官、バドロアと呼ばれたその小柄な青年は、うむ、と頷いた。

「巫女が神託を受けた。」

王の血が途切れた、と・・・。」

どういう意味かが解からん、と神官は答えた。

「先日は、王の命が途切れる危機。その前日は、運命の変転。」

・・・近頃の神は、謎掛けが多う御座いますな。」

二ナイは皮肉な笑みを浮かべた。

「それだけ、道が細かに分かれている証拠。」

我々の取る道筋次第で、運命はどのようにも転ぶと告げているのだ。

・・・とても険しい峠にかかったのだろう。」

バドロアは大きく息を吐いた。

運命の時。・・・後の歴史家はこういう時期を、そう呼ぶのだろう。

「死人たちには安らかな眠りが訪れるという事だ。」

「・・・それはよう御座いました。」

気休めのように、二人は笑い合った。

王の身辺の保障は一言も為されていないわけで、二人の笑いは諦めまじりのものだった。

「そうそう、さきほど、ザルディンに会ったぞ？」

・・・珍しい事だ、近頃は城にも出ては来なかったのに・・・。」

とって付けたような神官の言葉に、二ナイはなぜか言い知れぬ不安を感じた。

もう年を取りすぎて、出仕が困難、と、財務の職を辞したのは何年前だったか。

確かに、最近はめつきりと年老いて、よぼよぼになってはいた。

・・・しかし、あいも変わらず、眼光は鋭く油断がならなかったの

を覚えている。

そのザルディンが、今更、何をしに……？　二ナイは席を立った。「どこへ？」

呑気に若い神官が声を掛ける。

「いえ……、客人がたに挨拶もまだです。」

これから向かうところです、とその場を誤魔化した。……もちろんそれは口実で、二ナイが向かおうとしている先は、ザルディンの居室だ。

「では、私もそろそろ戻ることにしよう。巫女がまた抜け出すかも知れんしな。」

ドアを開けかけた二ナイの手が止まる。聞き捨てならない台詞に、彼は振り返って怪訝な目をバドロアに向けた。

「抜け出す……？」

「そう、最近とみに多くなってな。」

訳を聞いても、頑としてお答えにならぬ。……まあ、そういう事は前々からの事。

気にする必要もなからう。」

二ナイは首を傾げた。

確かに、巫女の娘は気難しい面があり、何を考えているのか計り知れないところもある。年端も行かぬこの娘が、神の言葉を聞き、王に助言を与えた事も数知れぬ。

しかし、自分の知る限り、神官たちに黙って奥の宮を抜け出したことなどなかった。……何か、重大な決意あつての事か……、二ナイは勘ぐっていた。

「案じる事はない、巫女には万が一にも間違いなどないのだから。」
神官長は、そんな宰相の不安を笑い飛ばして肩を叩いた。

「そうだ！　急いで戻る必要もあるまい、私もその客人たちに紹介してくれんか？」

あの弟がどこで何をしていたのか、私にも興味がある。」
バドロアは気さくな笑顔を向けて、二ナイに申し入れた。彼はセフ

を悪くは思っていないのだ、あの独特の目も、さほど気にはしていない。

彼にしてみれば、巫女もセフも、異質という点では似たり寄ったりなのだろう。

話す機会こそなかったが、出来れば暖かく迎え入れてやりたい、と思っているうちの一人だった。

「はあ……、

では、一緒に参りますか……？」

どこか困惑した表情のまま、二ナイは開いたドアの外へと神官長を促した。

当初の思惑とは裏腹に、足は目的地とは別の方角へと向かって歩み始めるのだった。

「……ときに二ナイ、お前の娘……アニタはいくつになった？」

渡り廊下を歩きながら、唐突にバドロアが尋ねた。二ナイの娘は沢山居る。首を傾げ、記憶を巡らせねばならぬほどに、彼の子供は多く居た。

「そう言えば、そろそろ年頃ですか？」

嬉しそうに二ナイは神官長を見る。こういう言い方をするくらいだから、お眼鏡に適ったのかも知れないと思った。沢山の子供たちを持つと、手放す事がさほど辛くはないのだ。

「そう、そこでだ……あの子を後宮に入れてはどうかと思うのだ。

」

続くバドロアの言葉に、娘の父は絶句した。

思い掛けぬ言葉だった事は間違いない、しかし、この危急の時にそのような考えが浮かぶこの青年の神経を疑う。

「アニタも美しい娘に育った。毎日、神殿で見ているのだ、その瞳が輝く時に誰を映し込んでいるのかも知っている。」

笑みを浮かべてバドロアは答えた。

父の二ナイすら知らなかった娘の恋心。幼い頃から一緒に居たが、

親としては二人を兄妹のように育てたつもりだったのに、と、ひどく驚いた。

「王の為、・・・いや、アニタの為にもそうした方が良いと思う。王はまた洩られるだろうが、私がなんとか言い含めてみよう。」
バドロアはそう言い、ニナイも素直にその好意を受ける事にした。病床の王に娘を献上するなど、通常の考えでは理解に苦しむだろう。しかし、この二人の臣下には何の策略も陰謀もありはしない。純粹に、当人同士の事を想っての相談だ。亡き正妃に縛られ続ける今の王には、妃の替わりに愛を注いでくれる者が必要である事を、二人は痛感していた。

王は亡き妃を忘れはしないだろう、後添えとなるアニタにとってそれは重大な障壁となるに違い無かったが、それでもニナイはこの提案に賛同した。

若いラルフ王の後宮に、美しい妃たちは大勢居たが、真実、王の愛情を勝ち得た者は一人も居ないことを、この父親は知っている。それでもなお・・・。

娘のひたむきな想いが、あるいは王の心を動かすのではないかと期待した。

廊下をいくつも渡り、大広間を抜け、階段を昇り・・・そして、王の居室へと辿り付いた。

王の傍には先客がいる。

正体を明かした、第二皇子の友人たち。

「ご紹介が遅れました、私はこの国の宰相を勤めさせて頂きます、ニナイと申す者です。」

以後、お見知りおきを・・・。」
うやうやしく頭を下げる重臣に、ナッツとルシーダの方が逆に恐縮した。

「うへ、頭上げてくださいよ！」

俺たちや、何の変哲もないただの冒険者なんだから！」

慌ててナッツがわめいた。

「貴殿らが、弟の面倒を見てくれていたのか？」

「・・・私はバドロア。神殿地区を任されている。これからも、宜しく頼むぞ。」

気さくに声を掛けられ、手を掴まれる。突然の高貴な人間からの握手に、ナッツは目を白黒させた。ルシーダはただただ、啞然とするばかりだった。

第二話

新参の二人・・・いや、積極的に聞きたがったのは兄のバドロアの方だったが、二人はセフの話に聞き入っていた。

今までの経緯やなれそめを、ナッツは王を含めた三人に改めて話して聞かせた。

「セフは最初、他の仲間と一緒に居たんでさ。

なんか揉めたみたいでね、派手な大喧嘩して殴り合いの後に俺等と合流したんですよ・・・小さな女の子が一緒でね・・・あ、この子はこことは違う国で待機中なんすよ。」

王の目を逃れるために置いて来た、とはさすがに言えずに誤魔化した。

「喧嘩の原因なんかは教えちゃくれないのさ、つまらない事だ、つてね。」

話の途中にルシーダが一言、紛れ込ませる。

「なんつーか、水臭い、つてののか、秘密主義つてののか・・・あんま、喋りたがらねえヤツなんす。

あ、心配はないんですよ？俺等だつて、似たようなもんだし・・・あんま、冒険者やってて饒舌なヤツなんて居やしないですよ。」
ナッツがフォローの為に告げた言葉は嘘ではない。冒険者たちはあまり、自身の素性を語らないし、また、詮索もしない。それで充分やっていけるし、駄目なら他のパーティーを当てるまで。

冒険者のチームは、けっこう、どこも出入りが激しいものだった。気の合う仲間を見つけられたら、ラッキーだ。

「で、この小娘・・・エシャロット、つてんですけどね、コイツがまた傑作で・・・」

含み笑いと共に語られかけた名が、途中で遮られる。

「笑ってんじゃないよ、あの子は本気で言ってるんだからね。」
釘を刺したつもりルシーダだが、当のナッツにそれは通じなかつ

た。

ぶーっ、と吹き出したナッツは一段と大きな声で、セフの兄弟たちに報告した。

「アイツ、もう婚約者なんて居るんですよ！ それも7歳！」
言うなり、ナッツはゲラゲラと笑い出した。

兄二人は顔を見合わせる。・・・話が見えなかった。

婚約というのは、言葉が過ぎるかも知れない。エシャロットの方は本気だったろうが、セフにとっては単なる言葉のアヤに過ぎない。適当に返事をしただけの状況下だった。

本人も、未だに気付いていないかも知れない。

「セフは本気にしてないよ、子供の世迷言、くらいに思ってるのさ、

ルシーダも本心では面白がっているのだろう、くっくつと笑いを噛み殺している。

彼女がそう思うのも、無理はない。当のエシャロット自身が、ひどく気が多くて、ハンサムと見るとトコロ構わず見惚れるおマセさんだった。そのくせ、自称恋人である事を盾にしてセフの恋路は片端から潰した。それらの珍事を思い出しては笑っている二人なのだ。セフにとってこの少女はお荷物以外の何者でもないだろうに、なぜか何かと世話を焼いている事も可笑しかった。あのクールな男が、である。

「いいコンビなんだよ、あれがさー、」

堪らずに大声で笑い出すルシーダが、付け足すように兄王に告げた。

「そうか・・・では、セフは本当に巧くやっていけているのだな・・・。

お前達を見ていると、弟が今、どれほど満ち足りた生活を送っているのかが見えるようだ。」

安堵の声で兄王は呟き、神官を勤める兄も笑みを浮かべた。

「セフのヤツは幸せ者さ、・・・あんだ達みたいないい兄貴が居る。」

ルシーダが二人にウインクを贈った。
終始にこにこしている古参の臣下には、「あんたもね、」と、ニヤリと笑う。

そのセフが、今、まさに戦闘不能に陥っているとは、予想もしない面々だ。

「今頃はフィルと合流した頃かな・・・、王様、もうじき本物と会えますぜ？」

得意げにナッツがラルフ王に告げた。

セフは戦闘不能。

傍には新しい仲間のアシュが居る。そして、合流したフィル。

ナッツやルシーダが思う以上に国王の弟君は、すぐ近くにまで接近していた。

「セフはもう暫く動かさない方がいいと思います、僕がついていまずから、フィルは誰かにこの事を知らせて下さい。」

アシュの提案に、フィルはうむ、と頷いた。

「では、僕が城に潜入してみよう。なんとか仲間合流して、助けに戻る。」

「お願いします、出来れば日暮れまでに・・・あの子のもあるから・・・」

アシュは少しだけ眉を顰めた。

あの子とは、朝になって眠りについた哀れな子供の亡骸の事だ。

フィルは目を伏せる。この夜の罪は、きつと一生付いて廻るだろう。自責の念に苛まれる。

知らなかったのだ、と真実から目を背けることなど出来そうにもない。

幼い子供を手にかけた、それは事実だ。

「しばらくの間、待っていてくれ。」

力強く、フィルは言い残して立った。

抜け道の洞窟は長く、薄暗い。

明かり取りの為に開けられたらしい人口の竪穴から、ところどころに光が僅かに差し込むばかりだ。どれくらい歩いたか、振り返っても、二人の姿が見えない所にまでやって来た時、洞窟は急に勾配を見せた。

かなり急な登り坂。セフが落とされたと思った洞窟の、城側からの入口。

坂をよじ登り、閉ざされた鉄の板に手を掛ける。

・・・ここまで来て、開かなかつたら、・・・不安が過ぎる。

しかし、懸念するほどもなく、鉄の戸は簡単に開かれた。

フィルが地上に出たその場所は、以前、ナッツが剣を漁った例の倉庫の裏だった。茂みの中に巧妙に隠してあった事に、フィルは感心した。

侵入には適さない時刻ではあるが、夜を待つてなどいられない事情がある、フィルは茂みや物陰に潜みながら、そろそろと城の中を移動し始めた。

どこか解からないまま、いくつものくぐり戸を抜ける。壁伝いに身を潜め、人の気配を伺ううちに、ひょっこりと大きな庭へ出てしまった。

身を隠すものが見当たらない。まずい・・・、フィルが焦りを覚えた時だ、人の談笑する声が耳に届いた。咄嗟にフィルは身を隠すために塀を乗り越えた。

低いと思われた塀は、外側は予想に反して高くなっており、フィルは木々の上へダイビングしてしまった事を知る。

枝や葉に受け止められ、衝撃を和らげられたものの、地に落ちた時には息が止まりそうだった。

フィルとて、無傷というわけではなかったのだ。

夜に痛めつけられた身体が、ここで更に悲鳴を上げるように軋んだ。

「ぐ・・・っ、」

呼吸すら拒む身体に、無理やり深呼吸を命ずる。

何度か呼吸を繰り返し、ようやく激痛が退いた。改めて、フィルは辺りを伺う。

「・・・どこなのか、さっぱり見当も付かない。」

「ようやくお出で下さいましたね。」

突然、フィルは声を掛けられ、飛び退って身構えた。

視界に入ったのは、12〜3の少女。静かな笑みを湛え、手をたおやかに前で重ねる。

見慣れぬ白い衣装を着て、その場に立っていた。

深い緑の木々の中で、その姿は精霊のように見えた。

黒い髪、黒い瞳。幼さを残すまるい頬。混血らしい美貌に笑みを絶やさず。

「あなたを待っていたのです、ここへ来ることを予見しました。」

その笑みと同じく静かな声で、少女はフィルに手を差し出した。

「・・・君はいつたい何者だ？ どうして僕がここへ来るなんて・・・？」

「あなたをお呼びしたのは、我が君です。」

あなたはこの国を救い、この地の呪いを解いて下さるからです。

わたしはこの国の巫女。・・・我が君の声を、唯一、聞くことの出来る女です。」

巫女・・・それでフィルは納得がいった。

するとここは神殿地区。城のエリアから外れてしまった事は予定外だったが、助けを求めるなら、むしろ好都合かも知れない。

なにせ、この国の人々は未だに、行方知れずの皇子の顔を知らないままだ。

「僕は助けを求めに来たんです、仲間が今、重症を負っていて・・・」

「アシユの治療の息を持ってしても、応急手当が精一杯、という危うい状態にセフは陥っている。」

腕の神経を切断されているのだ、スペシャリストの医療が必要だっ

た。

「これをお持ちなさい、魔法薬です。

セフ様はまだ城へ戻られてはいけません。あなたと共に東へ行き、黒き炎を得なければなりません。」

「黒き炎・・・？」

何の事かとファイルが問うと、巫女は首を振った。

「わたしにも判りません。・・・わたしはただ、我が君の声を伝えるだけなのです。」

「我が君、というのも、・・・もちろん、解からないんだろうね・・・？」

最後は諦めの口調で、ファイルが尋ねる。少女は頷いた。

「我が君の名は知りません。たぶん、我が君も、それを御存知ではないでしょう。」

この世界の住人ではないのかも知れませんが、・・・この世界、という感覚が、我が君からは感じませんから。とても強い方なのです、別の場所から、わたしだけに語り掛けて来られるのです。」

そう言えば、情報を拾っていた時に聞いたことがあった。神殿地区は魔族や混血は立ち入り禁止の場所がある、と。それはきつと、この少女と『神』のコンタクトを邪魔されなためなのだ。

「心配には及びません。」

我が君は、この世界を気に入っておられます。」

そう言つて、少女はにっこりと花のような笑みを浮かべた。

第三話

神殿地区から外の行商街を抜け、フィルは駆け戻った。

南の岩窟神殿。秘密の抜け道の奥で待つ、仲間たちの元へと。

「・・・よう、御苦労だったな。」

足手纏いになるが、すまん。」

セフはすでに目覚めていて、開口一番にフィルにはそう答えた。

「いいえ。それより、腕は？」

他は異常ないですか？」

「ああ。」

短いやりとりのうちに、フィルは手渡された二枚貝の赤い紐を解く。薄く虹色に輝く真珠がひとつ、鎮座するものを、指先でつぶす。少量の水を差し、混ぜた。

「・・・そいつは・・・」

驚くセフの声は無視して、フィルは中の軟膏を怪我人の傷口に擦り込んだ。

小さな貝の、僅かばかりの薬は、肩の傷を覆う頃には尽きてしまう。

「フィル、こいつを何処で手に入れてきた？」

お前・・・これが何か知ってるのか？」

咎めるように強い口調でセフが尋ねる。フィルは素直に知らないと答えた。

知らないのも無理はない、この小さな貝ひとつが、国の一年分の財政にも匹敵する価値があるのだ。富み栄えるアルザス王家にすら、数えるほどしか所有されていない、秘宝中の秘宝。

魔道士ギルドで僅かばかりが生産されている、幻の秘薬、『奇跡の虹』だった。

「あ・・・つつ、」

セフの顔が苦痛に歪む。

ものすごい熱が、肩口で湯気を立てていた。

「セフ?!」

これにはフィルも驚いた。薬と言って貰ってきたものを一瞬、疑ったほどだ。

ついに目を閉じて歯を食いしばってしまった仲間の姿に、アシユともども、フィルは成す術もなく狼狽えるしかなかった。

ようやく熱が引いた後、セフは手をどけた。

覆われていて見えなかった肩が、三人の前に晒された。・・・元に戻っていた。

食いちぎられて無くなったはずの肉が、見事に修復されている。

セフは腕を回した。・・・痛みはなくなっていた。

「完全に治癒したぞ。」

さすがは幻の秘薬だな、・・・あの熱さは頂けないが。」

皮肉を返せるほどに、セフは回復した。

「良かった・・・!」

フィルよりも、ずっと見守ってきたアシユの方が心配が深かったのだろう、泣き出してしまふ。

緊張の糸がわずかながら、解ける。和んだ空気・・・。

アシユが泣き止んで、目を擦った。

そのアシユに、セフは顎をしゃくってフィルに注意を促す。

「アシユ、どうしてついでにフィルも見てやらのだ?」

あいつも平然としちやいるが、けっこうな大怪我だぞ?」

お鉢が自分に廻ってきた事に、フィルは大いに慌てた。アシユの治療は経験のないフィルには刺激が強過ぎるものだった。

「け、結構です! 僕は打撲だけで大したコトないんです!」

アシユの治療を目の前で見たフィルは、必死に辞退する。邪まな考えを持つわけではないが、やはり気恥ずかしい。

「内面だからちようど良いんじゃないか、遠慮するな。」

構わんからやつちまえ、アシユ。」

セフは、元気になった途端に後ろからフィルを羽交い締めには掛ける。

「いえ！ 結構で・・・ぎゃー！！」
フィルの発した悲鳴は、途中で途切れた。

「どうだ、楽になつたらう？」

にやにやと人の悪い笑みを浮かべてセフは問い掛け、未だに目を白黒させるフィルは涙目になって、彼を睨んだ。じつと、手は口に当てたままだ。

「あ、あの・・・僕、もしかして余計な事をしたんでしょうか？
イヤな思いをさせてしまったんじゃない？・・・？」

フィルが不機嫌な態度を取った事に、アシユは自身の責任を感じたのか、しきりに頭を下げた。

どうも自分の行く治癒の方法に問題があるらしい、とは先刻からのフィルの態度で感じ始めている。世間から隔絶された場所で閉じ込められて暮らしてきたアシユには、何が悪かったのかが解からなかったが。

「ごめんなさい、あの・・・、僕・・・」

不安げな瞳を交互に二人に向けて、ついには黙り込んでしまった。フィルを離して、その手でアシユの肩を叩きながらセフは言う。

「何を恥じる必要がある？」

・・・自身を卑下することはない、お前は今、立派に役立つ事を証明してみせたんだ。

お前が居なけりゃ、俺はとうに死んでいるんだ、もつと胸を張れ。」
胸を張れ、と言われても・・・アシユはそれでも二人を見る。

「ありがとう・・・君のお蔭でずいぶん楽になったよ。」

僕らのパーティには回復担当の者が居なくてね。いつも苦勞するんだ。」

内面の複雑な思いは奥深くに沈めておいて、フィルはあらためて礼を述べた。

ずっと重く感じていた体が、今は嘘のように軽くなっていた。

「・・・これで、気兼ねなく東のダンジョンへ向かえるよ。」

「ダンジョン？」

いぶかしむようにセフが繰り返して尋ねた。

フィルは事の経緯をようやく話す機会に恵まれたのだった。

「黒き炎・・・か。」

何だか判らん予言というのは昔からの事だが、今回ははっきりと指定してきたようだな。」

セフの言葉にフィルも頷く。

「東といえば、行くべき場所は一つしかない。」

東の、冥界神の神殿。

「あの森はそれ自体がダンジョンのようなものだが、神殿には書物庫があるくらいで、お宝なんぞ、あるとは思えんが・・・。まあ、5年も前の情報では、アテにはならんか。」

腕を組んだセフの多少投げやりな言葉で、それぞれの意志も固まった。

とにかく、行ってみるしかない。

「・・・やれやれ。来たと思ったら、もう用済みか。」

立ち上がりながら、セフが呟いた。真上の岩を見上げる。

たぶん、この地面の上には城がそびえているはずなのに・・・。

東の神殿へは、一旦、国を抜けねばならない。その為のルートを、すでに計算し始めてもいた。

「夜を待って、市街地へ戻る。・・・定宿にしている場所からなら、簡単にアルザスを抜けられる。」

行けるな？ ホル、

視線を向けられ、ホルは大きく頷いて答えとした。

夜に動くという事は、普通に道を歩くわけではない事を予測しておかねばならない。冒険のうちには、そういった一風変わった移動を何度も経験してきていて、フィルは慣れたものだ。

この国は、現時点で夜は死者のものだ。それを見越して、セフは念を押した。

問題は、何も知らずに生きてきたアシユの方が。ちら、とアシユに視線を向けて、二人は苦笑した。・・・さて、これが普通と思いはしないだろうか・・・。「なんです？ 二人とも・・・？」その笑いの意味を掴みかねて、アシユは居心地が悪そうに身じろいでいた。二人はそもそも、道など通るつもりがないのだった。

日が落ちた。

岩窟神殿を少し離れた木立の影で、身を潜めていた一行が動き出す。洞窟の中で待った方が良かったのだが、例の子供に会うのが嫌で、誰言つとなく外で待つ事に決定した。

木の上から見下ろせば、いつかのように死者に囲まれている。無意味に手を伸ばし、揺れている死者たち。

「・・・どうします？」
困惑気味にフィルが尋ねた。

「俺達だけなら、強硬突破も出来るんだがな・・・。とりあえず、木を渡って行くしかないだろう。」

会話を耳にしながら、アシユは交互に二人を見る。言葉の意味を知らされたのは、二人が行動を開始してからだ。次々と枝を渡り、木を飛び移ってゆく二人に、アシユは懸命に後を追う。

テンポよく木を渡り、少し先で二人はアシユを待っていてくれた。アシユは自力で木から木へ、ゆっくりとだが、なんとか渡っている。世間知らずでも魔族は魔族、すぐに要領を掴み、徐々に木を渡るスピードは上がっていった。

「・・・街だ。」

木の上から見渡す夜の街路。眠らない街デュアス。

それでもこここのところ、夜の通りはひっそりとして、人影ひとつ見当たらないのだが。

セフの定宿に到着した。

第四話

言い付け通り、家人は客を気にせず寝てしまっているらしく、家中はひっそりとしていた。

屋根にある天窓は、変わらず鍵が外れたままで、いとも容易く侵入を許す。・・もつとも、そのために高価な宝玉を手放したのだ。

一等地とも言える部屋に入った三人は、とりあえず寢床の割り当てを始める。

ベッドは一つ、そしてソファがひとつ。・・運の悪い一人が床で寝るハメに陥る。

数分後、ふてくされたようにブツブツと文句を垂れているセフが、床の敷物に転がっていた。

ジャンケンの勘もくじ運も、この男はすこぶる悪い。

朝、クエストの準備を整えてから出立するつもりで、銘々が眠りについた。

翌朝、追放の身となっているフィルを留守番にして、セフとアシユは買い出しに出ている。

「ええと・・・薬と食料、それから着替え？」

シークなど初めてのアシユは、どこか嬉々として隣のセフに問い掛ける。

「着替えなんぞ邪魔にしかならんだろう、要らないから、その分食い物を詰める。」

ああ、その乾パンは買っつな、激マズだ。」

不味い、と声も落とさずに言われ、店の主人がじろりとセフを睨んだが、怯みもしない。

シーク・街の市場だが、この地方では全体が大きな屋根に包まれて、巨大なテントのようになっていて、通称でシークと呼ばれている。

「おい！・・・お前、もしかしてお前か!?」

突然、肩を叩かれ、セフが声の方向を振り返った。・・・そこには傭兵崩れのような、ならず者が一人、微妙なニュアンスの笑みを張り付けて立っていた。

「・・・グラント・・・?」

名前を言い当てた。

「やっぱり！ 面影があるから、もしかやと思った！

久しぶりだな、いつ帰った!?」

「おお、昨夜入ったばかりだ、お前こそどうしてた!?」

顔見知りらしい二人の会話を、ここでもアシユは交互に顔を見比べながら、黙って様子を覗うだけしか出来なかった。

秘密のルートである地下を通り、三人に増えた一行はアジトの民家へと戻って来た。

家人は何か言いたげに三人を迎えたが、セフを恐れるのか、結局何も告げずに戻っていく。

その後、お茶を出してくれた夫人の、契約違反だと言いたげな苦い顔を、セフは懐から出したブローチでさっさと笑顔に変えてしまう。
「・・・すぐに出てゆく。足がつく前にアジトを変えなきゃならん隣近所には素知らぬ顔で通せばいい。・・・世話になつたな。」

帰りぎわ、それとなくアシユに近隣の噂を探らせていたセフの判断で、この家を引き払う事に決定した。

居心地のいい部屋での、最後の作戦会議。

「・・・さて、これからだが・・・グラント、巻き込んで悪いが、俺達は東の神殿に行く。

サポートを頼めるか?」

「OK、・・・水臭いぜ、セフ。」

昔のように、また、一緒に暴れようぜ。」

にやりと笑う傭兵に答えるように、セフも片頬を吊り上げた。

パーティは4人。今回のクエストには充分な人数だ。

一方、城内でも作戦会議が開かれていた。

「あの女が作った魔法陣が、塔のてっぺんにあんのさ。あたしは魔力を持たないからね、どうにもならなかった。」
「ようやく重大な情報を告げたルシードに、ナッツがキリキリと眉を上げる。」

「どーして、そういう大事な事を先に言わねーんだよー!!」

怒鳴られてなお、ルシードはきよとん、と意味を掴みかねていたが、そうして、現在、塔を攻略するための作戦会議が開かれているのだ。

「・・・まず、結論から申しましょう、王。」

現在の段階では、我々に成す術は御座いません。」

地図を広げ、深刻な面持ちでニナイがそう断言する。

詳しい状況を聞き、呪いの掛かった魔法陣であると知った後の事だ。強い呪いの掛かる陣ならば、それを遙に凌駕する魔力の者でなければ、呪いを跳ね返し、陣もろともに消し去る事は叶わない。

それが出来る者は恐らく、未だに姿を見せない本物の末皇子だけ・

いつまでも戻らぬフィルに痺れを切らし、アルザス王はセフが待機するという山里へ兵を送ったのだが、そこでは、行き違ったという報告を受けている。

セフだけでなく、今はフィルまでもが行方不明だ。

女の狙いが、はっきりとセフにあるのだと、一同は理解した。

この国で、逃亡中の皇子だけにしか解き得ぬ呪い・・・。

「きっと、あの女の狙いはそこにあるのだ。・・・魔法陣そのものが、弟をおびき出すための罠なのだろう・・・。なんとかならぬのか・・・？」

一同を見渡し、病床の王が声を掛けた。

「私では、魔法陣の呪いに対抗出来ぬのだろうか・・・、この国の王として、それは私の責務だと思うのだが・・・。」

強い魔力を持たぬ事が、このような時には恨めしく思う現国王だ。

あの女とて、そう考えれば奴隷魔族のシエナ同様、大した魔力を持つてはいないはず。ならば、まだ、黒幕の存在が浮かんではない事になる。純粹の魔族を屠り、その生き血を絞ったと言うのだから、さきほどのヴァンプなど比ではない、強力な敵だ。その狙いもまだ、はつきりしない。

弟を呼び戻し、この国で何をしようというのか・・・。

ふと、王の言葉を聞いたナッツは閃きを感じる。

「あ！ 王様、ひとつ、・・・試してみないと解からないが、イケそうな手が無い事もないですぜ？」

ナッツの言葉に、その場の全員が額を寄せる。

興味深く、次の台詞を待った。

「さつきお見せした宝剣ですよ、・・・名前はグラン。

こいつは見ての通り、俺が持つべき剣じゃないし、セフにも似合わない。

つまり、王様。・・・正真証明、コイツは貴方が持つべきもの、ってこった。」

大振りの長剣を恭しくアルザス王の手に委ね、ナッツは得意げに会釈した。

グラン、という名は実はフィルの出身の王国、グラン・シルバから得た。グランとは、大地という意味なのだと、ナッツはフィルに聞かされた憶えがある。

神々しい輝きを放つ、その剣を、アルザス王はしげしげと眺め、溜息を吐いた。

・・・とても美しい剣だ。

けれど、剣の根元に位置する場所に、不釣り合いにぽっかりと穴が開いていて、奇妙にも思えた。

「この穴は・・・？」

指差された場所を見て、この剣を鍛えた鍛冶は頭を掻く。

「え・・・いや、なんかどの宝玉もしっくり来なくて・・・」

口の中でごによごによと、そんな言い訳を捏ね回していた。拳大の穴が開いたまま、聖剣はアルザス王の所有に移る。

「この剣を使えば、もしかしたら、呪いごと魔法陣を切ってしまうかも知れませんか。」

ヴァンプを葬ったあの威力なら・・・、一縷の望みを、この剣に賭けた。

「王よ、まさか先陣で出るおつもりか・・・？」

二ナイが慌てて、床を出ようとすする王を押し留める。

「私が出ずに、誰が出るのだ・・・我が威光、未だ衰えず、だろっ、二ナイ。」

斥候の報告で、すでに塔の周辺が敵の勢力に固められている事は知っている。

どこから召喚したのか、魔獣がひしめいているという・・・。

それと同様の状況が、セフ達の向かった先、東の神殿に続く黒い森・嘆きの森にも展開していた。うろつくと木々の間を行き交う魔物は、すべて召喚で呼び出された低級なものばかりだ。

この世界広しといえども、召喚術を使う魔道士は少ない。

それほどに召喚は高度な魔術であり、また、呼び出せたとしても、あまり役には立たぬ低級魔獣ばかりで、身につける者自体が少ないのが現実だった。

「・・・変な話だな・・・中途半端なゾンビどもに、お次は召喚士か・・・。」

グラントが首を傾げるのも無理はない。どれだけ数を揃えようが、低級魔獣などいくら呼んでも、それこそたった一人の高等な魔族にやられてしまうだろう。

その証拠に、チームはまったく慌てる事もなく、敵陣の様子を覗いているくらいだ。

力の差は、それほどに激しいのだ。

有象無象をどれだけ掻き集めようが、ここに居るセフ一人、倒す事も出来はしないだろう。

「嫌な感じだな・・・、まるで・・・命を弄んで、楽しんでいやがる・・・」

セフの言葉にグラントは首を捻った。言葉の意味を測り兼ねたのだが、あまり気にはしない。

どこから攻めようか、と森を見渡している。

セフの目が陰惨と暗く濁り、昨夜の死闘を思い起こした。締め上げた時に、あの男が告げた台詞が甦る。

『ギルドの実験で作り上げられた怪物・・・』

これではつきりした。

祖国は今、アサシニングルドの実験場と化している・・・。

第五話

「見られた時には始末する、いいな。」

念を押して、セフが確認すると、グラントは頷き、フィルは溜息を吐いた。

行き当たった敵はとにかく屠る、と言うのだから、気が重い話だった。

中にはさして悪さもしていないような者も居るかも知れない。それらの区別なく、出会いが運の尽きとばかりに命を取るのだ。

敵が闇のギルドと判明したからには、仕方ない事だと解かっている。けれど、気乗りしない作戦だった。グラントもセフも、こういう場合の割り切りは早く、フィルは自身の甘さだと感じている。

アシユは経験不足から、今がどういう状況なのかを飲み込めてはおらず、その事もフィルの気を重くする。……きつと、今回のクエストは彼に精神的なダメージを与えるだろう……。

強い者が勝つ、という……道理だけでは納得しきれない、それをどう説明してやれというのだろうか……。セフも同じ懸念を抱くのか、ふつと、アシユを見た瞳に不安が映った。

誰にも、幸せに生きる権利があるのだ、と……自由という名の権利を与えられたばかりの金髪の少年が、今、現実に直面する。

「……行くぞ、」

合図と共に、音もなく一行は移動を開始した。

最初に殺めたのはグラントだった。

こちらを向いた瞬間、若い男は首を掻き切られて絶命した。

口を塞ぎ、抱きかかえるように動きを封じて、素早く仕留める。そうして、音を立てる事もなく、そつとその場へ下ろすと、一同に手招きをする。

上空を何羽もの妖鳥が飛来し、そのまま飛び去ってゆく。哨戒役を果たす、スピードだけが取り柄の妖魔だ。鳴き声はつんざくように

大きく、けたたましい。

見つからぬように物陰に潜み、やりすごしつつ、進んでいく。今日のところは出きるだけ血を見ないで済むだろう・・・しかし、夜にはゾンビが彼等を発見し、そうして文字通り、血路を開いて進撃する事となる。

それを思うと、ますます気が重くなるフィルだ。

「昼のうちに出来るだけ進むぞ、遅れるな。」

グラントの鋭い声に頷き、フィルは屈めた背をさらに小さくして、次の地点へと急いだ。

現在、進行はグラントを先頭にフィル、アシュと続き、しんがりをセフが務めている。

日が傾き、すぐに夜がやってきた。

死者たちはどこからとなく集まって、すぐに一行を見つけて出す・・・物陰や、気配を消すなど、無駄なことだった。嗅覚なのか何なのか、どうして生者の存在を見つけられるのかは謎だ。

死者の群れとアサシンの一団、それらを掻い潜って、四人は走っていた。

「離れるな！ バラけたら、勝算はないぞ！」

グラントの鋭い叫びに続け、後方からの指示が飛ぶ。

「伏せる！」

セフの声に、フィルは動作の鈍いアシュの頭を押さえつけた。

頭上を灼熱の波動が通り過ぎる。

前方の死者とアサシンの何人かが黒焦げになった。

怯む敵に、第二派とばかりにグラントが襲いかかる。

あっという間に三人を斬り倒した。

「突破しろ！ 構うな！！！」

少しでも速度が落ちれば、容赦なく横合いから敵が踊り掛かる。

振り下ろされる刃を受け流し、アシュを片手に引きずりながら、フ

イルは無言で疾走する。

後方で、光の火球が炸裂した。閃光を視界の端に感じながら、前方の死人を切り捨てた。

セフは幾つかの火球を操り、殺到するアサシンの身に叩き込む。まるで糸でも付いて操っているかのように、小さな球体は彼の意のまま、自在に動く。

右へ左へ、魔力のコントロールを受け、敵を追ってゆく。

「また凶悪な技を身につけたもんだな、セフ！」

「必要だったのさ、」

グラントの皮肉にも平然と答えた。

行く手を塞ぐ巨漢。

セフのホーミング・ショットが弧を描き、その身を貫いた。続けて三発。

しかし、巨人の動きは鈍ることさえなく、手にした棍棒を振り上げる。麻薬による痛覚異常、瞬時に判断した一同が散開すると、巨人は目標を失い、辺りを見回した。

動きが止まり、隙だらけだ。

フィルの手がアシュを放し、続いて跳躍した。

振り下ろされる棍棒の一撃を避け、その愚鈍な首を刎ね飛ばした。

そのまま振り向きもせず疾走に移る。

アシュはセフの肩に担がれていた。

もう、何人の実験体とやらを斬り捨てたか知れない……。およそ、人間離れたアサシン達に、幾度も出会っては、薙ぎ倒した。

「はあ、はあ、・・・っ、」

どうにか神殿に辿り付きましたね、」

苦しい息の下から、フィルが問う。

フィル同様、普通の混血であるグラントも、言葉も出せない状況だ。

一人、セフだけがアシュをひょいと肩から下ろし、息も乱さず、周囲を見回した。

思ったほどに、血は流さずに済んだ。・・・運が良かったか、先導のグラントの判断の良さか。

強い敵に当たらなかつたと言うよりは、強力なサポートを得たお蔭か。自在に走り廻る火の珠が、フィルやグラントとまみえた敵を、横合いから貫いていったのだ。

そして、素早く敵を倒し、追撃を許さず、森を走り抜けた。

アシユに至っては、気が動転しているのか、呆けたまま座り込んでいる。

重大なショックは受けていない・・・それだけが、救いとなつた。うつすらと闇が蒼く色を変えた頃。一夜を掛けて、一同はようやく冥界神の神殿に到着したのだつた。東の空は、神殿の後ろになり、ここからは見えないが、朝日が昇る寸前という頃か。壁のレリーフなどを調べていたセフが、振り返る。

「北の一角に着いたようだ。・・・ここから中へ入るルートがあつたか？ グラント、」

「さあね？ ・・・五年前に来たつきりだからな、あん時もお前がほとんど先に行つちまつて、確認する暇なんかなかつたろうが。」
痛いところを突かれ、セフはしらばっくれるように視線を外す。

「そうだったか？ ・・・まあ、壁を伝って行けば入口に突き当たるだろうさ。」

そう言つて、また、いつかと同じに一人、ずんずんと先へ歩き出した。

「あいつ、ワガママだろ？」

ひそ、とグラントがフィルに耳打ちし、フィルは答える代わりに苦笑を浮かべた。

セフだけでなく、ルシーダもナッツも意見を曲げないから、これが普通なのだと思つていた。

「あいつと付き合うなら、いい事を教えといてやる。」

「・・・気紛れだから、ダンジョンの先頭はやらせるな。」

そう言い捨てて、先導権を奪い返すため、セフを追つて走つていっ

た。

大胆というか、その場の気分だけで行く道を決定する、セフのようなタイプはこういうダンジョンには向かないのかも知れない。

同じような通路、曲がり角、レリーフの文様・イライラと脚で地面を踏み鳴らした。

「だから言っただろうが！　．．すつかり迷子だぜ！？」

「うるせえな！　いざとなりや、壁を吹き飛ばして出れば済むだろうが！」

苛立った一人が怒鳴れば、もう一人も怒鳴り返す。

以前とまったく同じやり取りに、目を合わせた二人が同時に吹き出す。

「あはは．．！　変わらんなあ、俺達はよお．．．、」

「．．．まっただ、」

懐かしく昔を思い出している場合ではないのだが、しばし、過去に浸っていた。

東の神殿にはセフが。そして、南の岩窟神殿より少し手前の古い塔には、兄のラルフが進軍中だった。普段、おだやかで明るいはずの森は、最近の情勢に相俟って、どこか危険な空気を孕んでいる。

日差しが木々の茂みから漏れ、視界は決して悪くない。

朝もやに霞む森林の中を、兵士に護られながら、アルザス王と冒険者達が進んでいた。

そこここで、小さな戦闘が絶えず続き、先陣の兵士達が魔物を薙いで通っている。

時折、横合いから討ち漏らした魔物が飛び出しては、ナッツやルシードの前に倒される。王は剣を抜く必要さえなかった。

「大した手応えもない連中だね、こんななら、王様が出る必要もないんじゃないかい？」

得物を一振り、血を振り落として、ルシードが言った。

「だーから！　問題なのは、コイツ等じゃなくって魔法陣の方だっ

「言ってるんだろ!？」

呑みこみの悪い仲間に、ナッツが噛み付いた。

「ああ、そうだったね、忘れてたよ。」

森に巢食う魔物など、単なるオマケでしかなく、一行の目的は塔の頂上に描かれた魔法陣にあるのだ。いくら敵が貧弱な内容であっても、なんの慰めにもならない。

「・・・二ナイからの報告では、巫女の神託は、死者に安らかなる眠りが訪れる、というものであったと聞く・・・。この剣が、呪いを打ち破るという意味であれば良いのだが・・・。」

腰に帯びた剣の柄を抑え、馬上の王は不安を打ち払うようにそう言い、頭を振った。

「案じても仕方あるまい・・・、やるだけの事を行うだけだ。」

塔の頂きへ差しかかる頃には、日は中天に掛かった。

多くの兵を率い、敵を屠りながらの進軍では、この間のように行かないものだと、ルシーダが思うほどに、進行は遅い。

半日あれば足りるはずの行程に、一日を費やしてしまうだろう、と感じた。

王などは馬に跨っている。一打ち、鞭を入れれば、それこそあつという間に塔へ行けてしまうのに・・・。身分というものは、本当に、厄介なものだ、と、声には出さずに冒険者の二人は思っている。

第六話

塔は古く、あまり大人数を支えられるような強度は残されていない。階段のあちこちが、ともすれば、踏みしめたと同時に崩壊するのだ。王は塔の周囲を兵で固め、自ら塔へと赴く旨を皆に知らせた。数人の選りすぐった精鋭だけを警護に、ルシーダとナッツを伴い、崩れかけた階段を慎重に登り始めた。

敵の内容はまだ一同の耳には届いておらず、彼等は敵の正体を知らない。

シエナの妹が中心に、得体の知れない者達が暗躍しているのだと思っている。それは、自国の内部の者で、五年前のように、クーデターを狙っているのだとばかりに思っていた。

明るい森を疾走する一頭の馬がある。

老体に鞭打ち、馬を駆るのは今回でも黒幕と噂されるザルディンだ。突然、その馬の騎首に影が走り込んだ。

馬は暴れ、老人を放り出して、駆け去る。

「・・・くっ、」

かろうじて受け身を取って、難を凌いだ老将は、前方の敵を睨み付けた。

「いけませんねえ、今更、貴方が行ってなんになるんですか？

大人しく、我々の仕事が済むのを待っていていればいいんです、悪いようにはしなと言っているではありませんか。」

倒れた老将の前に姿を見せたのは、黒い衣装に身を包んだ、一人のアサシンだった。

細身で油断無く、腰に手をやり、やれやれと溜息を吐く。

「ええい、黙れ！」

貴様等のいいようになど、決してさせんぞ！

魔神に魂を売り渡した悪鬼どもめ！！」

気迫だけは衰えぬ老人が、腰の剣を抜き放った。

「何を言われるのか・・・心外ですな。」

この国を売り渡したのは、他でもない貴方がたでしょうに。」

「く・・・、ち、違う・・・、わしは、わしが貴様等に渡したのは、穢れた王家の血筋だけだ・・・、

あの忌まわしい魔族の血・・・それだけだったはずだ、それを・・・、

」

ザルディン始め、当時、クーデターを影から操った者達が、闇のギルドの力を借りて、その代償として約束したものは、皇子と若き王、そして、その血に連なるシエナの腹の仔だった。

ギルドが最初に求めたものは、強い魔力を宿す皇子・・・けれど後に、ヴァンプとの契約でも重なっている事が知れた。

ザルディンは臍を噛んだ・・・。

勝手に進められた契約であり、彼等の知らぬ間の事であっても、闇のギルドは契約違反を言い出した。ヴァンプなど知らぬと言って、聞く相手ではなかった。

「次に貴方が言っただけの物は、使い物にもならぬ、ただの合いの子。」

・・・知らなかったでは済みませんよ？ 第一世代である王妃と、第二世代である王を掛け合せれば、産まれる仔は第三世代・・・。通常の魔族より、魔力は低い。」

ほとんど人間と変わりはない、と、アサシンは吐き捨てるように言った。

「契約不履行として、ガルバ公は始末させて頂きました・・・。なにせ、彼が裏切らねば、最初の計画通りに皇子の身柄は確保出来たわけですからね。」

アサシンの言葉に、老人はごくりと喉を鳴らした。拭いきれぬ恐怖が、背中に汗となって流れ落ちる。この国のあちこちに、ギルドの手先が送り込まれ、国民面をして、暮らしている・・・。五年のうちに、アルザスは闇のギルドに侵食されつつあった。

王に危険を知らせるため、文字通り、命懸けで挑んだのだ。裏切れば、殺される。契約不履行もまた然り。

塔の頂上では、今まで森で出くわした敵など及びもしない、敵の精鋭が待ち受けている。

あの女も復讐心を利用され、真実も知らぬままに、憎い仇の手伝いをしている……。

女の身体には魔物が同化され、実験体の一匹として、密かにデータを取られているのだ。

結社のうちでも比較的位の高いこのアサシンは、せせら笑いながら、老人を見ていた。

「あの女には、昨夜、夢魔を掛け合わせてみたのですよ。

見るも無残な姿となりましたが、なかなかどうして、魔力でカンタンに修復出来るようです。

「……ま、見てくれだけね。化粧をするようなもので、もう、あのような醜い化け物は女とも呼べぬ代物ですがね。」

「……惨い仕打ちを……」

ザルデインが絞り出す声に、アサシンは嘲笑して答える。

「何を仰る、貴方がたが皇子にしようとした事と、大差はありますまい!？」

高く笑うアサシンの声を、老人は目を伏せて聞いている。

確かに、噂では聞き及んでいた事ばかりだ。魔族同士の掛け合わせ、魔獣との結合、遺伝子レベルでの操作、薬品を用いての悲惨極まる実験の数々……。

そして、承知の上で皇子に猛毒である麻薬を投与しようとした……。

今になって考えれば、よくぞ、逃げ遂せてくれた、と、感謝する。

あの魔力が悪用されれば、どんな災いを世界にもたらすかも知れない。そして、真っ先に矛先を向けられるであろう、我が国。

思惑が交差した上での偶然とは言え、ガルバが皇子を逃してくれた

事を感謝せずにはいられなかった。

「・・・ガルバを処刑したのは、お前達の差し金だったか・・・。」
いつも何者かに怯え、身辺を固めていたはずのガルバが、いともあっさり倒されるなど、考えてみればギルドにしか出来得ぬ事だ。

「志願者が居たのでね。・・・因縁を絶ち切るためにも、彼に任せただですよ。」

亡霊でも見るような顔をして、傑作だったそうですよ？

まあ、これで彼もしがらみから解き放たれて、仕事に専念出来るようになるでしょう。」

良心の麻痺した罪人を、大量生産する結社・・・彼等の行為はエスカレートの一途を辿り、敵などないと言うように、闇を我がもの顔で闊歩する。

・・・王に知らせなければ・・・！ その思いだけで、老人は荒い息を吐きつつ、恐怖の前に対峙していた。畏なのだ、と。塔に辿り着くのが兄であろうと弟であろうと、ギルドにはどちらでも構わない。王を偽者とすり替え、アルザスの実権を奪い、いずれ戻る皇子を捕らえる。

これは、畏なのだ。

この平和な地を、地獄に変える計画が始動していた。

ザルデインが黒幕と対峙しているその頃、国を挟んだ反対の土地では、問題の末皇子がクエストの最中にあつた。神殿の中には完全に、闇のギルドの本拠地と化して、身を隠すだけで一苦労だ。ゾンビに襲撃されない事は有りがたかったが、数歩進んでは物陰に潜む、の繰り返しで、気ばかりが急いた。

侵入した時には誰も居ないのかと思っていたが、それは間違いだつた、と今は解かる。

「あの・・・この辺りの床が、いままでと足音の響きが違います、」
控え目にアシュが進言し、フィルが耳を床の石畳に付けて確認する。湿り気のある石の廊下はひんやりと肌に心地良かった。

廊下には等間隔に並んでいる松明があり、いつでも火が燈って、煌煌と明るい。五年前、悪友達とのクエストでも、これは変わらなかった。

当時は無人の神殿内で、なぜ、この松明が尽きないのかは、誰にも知られてはいなかった。

現在も昔と同様、明るい灯が一行を照らしている。

耳を澄ましていたフィルが、顔を上げた。

「・・・確かに、音が響いて返ってくるみたいです・・・、下にも通路があるのでは・・・？」

聞くが早いか、すぐさまセフが床の石を一つ、打ち砕いた。

ガラガラガラ・・・

重い音と共に石は割れながら、地の底へ吸い込まれるように消える。慎重に、周囲を覗い、騒ぎになれば一戦交えるつもりで、身構えて待った。

幸い、気付く者はなく、変わらぬ緊張と静寂。アジトの端にでも位置するのか、定期的に見廻りが訪れるだけだ。

・・・下は真っ暗で、明かりはなかった。

続いて、セフは幻獣を呼び、その穴へと放つ。

ほどなく下僕は主人の元へ戻り、中に毒やガスが満ちてはいない事を教えた。

「よし、降りるぞ。」

・・・五年前と同じルートなら、お前に従ってもいいが、こうなると話は別だよな、グラント。」

にやり、とセフが笑い、グラントに悪戯な視線を向けた。

渋った顔をしたグラントが、その視線に気付き、顎をしゃくった。

先へ行け、と。

先頭にはセフ、続いてフィルとアシュ、しんがりを今度はグラントが務める。

親友同士とも言える、二人の様子に、フィルはほろ苦い疼きを感じ

ている。

いつだったか・・・自分にも、このグラントのような友人が居て、共に冒険ごっここと称しては、城内のあちこちを探索して廻ったものだった。

亡国の時、その親友とは苦い別れを喫した。

敵の陣営に居た友は、親友の皇子を密かに城外へと逃し、炎の向こうへと駆け戻っていった。

その後ろ姿が、親友を見た最後だ。

黒煙を吐き、紅蓮の炎に焼け焦げた空・・・森を抜け、夕闇に紛れながら逃亡するファイルを見た、それが故国の最後の姿。

風の便りに、隣国に攻め滅ぼされ、国民は奴隷に落ちた、と聞いた。その隣国が、さらに近隣によって滅ぼされたのは、二年後の事だ。

・・・近隣が纏まり、大きな帝国を築いている。奴隷制度は廃止され、六人の公爵が交代で国を治めると聞く。

ファイルは、今更、無くなった故郷へなど、帰ろうとさえ思わない・・・。

第七話

大きな広間へ出た時、辺りは暗闇が広がり、セフのかざす炎だけでは到底全てを照らしきれなくなった。目前に、なにやら祭壇のような段差があり、その奥にはさらに大きな台座がそびえているらしい。天井はどのくらいなのか・・・見当も付かない。

セフは炎を台座のてっぺんに向けるようにして、投げ込んだ。一度目は届かない。台座の壁を照らしながら落下し、炎は床に転がって消える。

そして、二度目に、台座の頂点を炎は照らした。先が広口の瓶のようにながっていて、それを見定めたと同時に、何かに引火した。台座の頂上で、炎が火柱となり、燃え盛っている。

そして、広間全体を明るく照らし出した。次々に、壁に掲げられた明かりの装置へと炎が移ってゆく・・・。巨大な斎場が姿を現わす。

祭壇の床には紋章が彫り込まれ、取り囲むように、古代の文字がレリーフとして浮き上がる。

円陣の中央は真っ黒に変色し、とても年代の古い代物だと教える。床の黒いシミをしばらく見ていたセフが、おそらく血だろう、と呟いた。アルザスの歴史でも、古くは神殿で贄を捧げた事は教わっている。歴史書が正しいと証明する様相が展開する。

陳列された、とても古い人骨の山。
生贄を捧げるための、祭壇。

巨大な炎の塔。

神殿の、最深部に間違いなさそうだ。

「ここなら、確かにお宝が眠っていてもおかしくないな。
手分けして捜そう。・・・セフ、俺と来てくれ。そっちの二人もペアでな。」

フィルとアシユは頷き、セフも声の主に近付いて行った。

「上にも足場がありそうだ、俺達はそっちへ廻った方がいいだろう？」

荷物の中から用意のロープを取りだし、手頃な岩を括り付けて、上へと投げた。

グラントは混血だが、通常の掛け合せだ、セフのように岩場を蹴って飛び移ってゆくわけにも行かない。まったく、彼から見れば、セフには羽でも生えているようにしか思えない。

上に登っても、これといってめばしい物は何もなかったが、台座の火柱が真近にあつて、熱気で汗が吹き上がった。喜ぶのは歴史家のお歴々だけのようだ。

「くそ・・・、何もないじゃねーか、

おい、引き上げようぜ、セフ。」

「いや、待て。・・・炎の中に何かあるぞ・・・？」

セフが指差す先、火柱の中だと言うが、グラントには眩し過ぎて、まともに目を開けてなどいられなかった。

「・・・どこだ？」

疑問には答えず、セフは跳躍した。

火柱の中へと。

「!!!・・・セフ！」

いくらなんでも、と、グラントは炎に近寄りかけて、その熱気に慌てて飛び退いた。

こんな中へ飛び込むなど、自身が生贄にでもなるつもりか、と舌を打つ。

息を呑む間に、セフは戻って来た。

衣服に焼け焦げは多少あるものの、まったくの無傷・・・改めて、化け物だと思わせる。

あの、灼熱の炎を防御する結界を張っていたのだらう。

「あつたぜ、・・・コイツが例の予言の品だらう。」

掌に、灼熱に燃える球体が乗っている。素手で掴む男を、グラントは固唾を飲んで見返した。

徐々に熱が冷めると、球体は黒くなった。

「おっと、触るなよ。指に火が付くぜ。」

そつと指先を伸ばしたアシュから、セフは遠ざけるように手を上げた。

「さっきまで真つ赤な火の玉だったんだ、セフの野郎は特別だから持てるが、俺達はヤケドくらいじゃ済まないぜ？」

荷物を作り直し、グラントが捕捉の説明を加えた。

「とてつもない高温の珠だ。すぐに冷えるとは思うがな。」

来てすぐだが、ここも用済みになった事だ、急いで王宮へ向かおう。

「兄がやはり気掛かりなのか、セフはいつになく焦れているように見えた。」

「まあ待てよ、ここには幸い、ゾンビは居ない。……一泊してから、明日、森を抜けた方が得策だろう？ お前はパワーが有り余ってるが知らんが、俺達はもうギリギリだぜ？」

辺りを見回したグラントが提案する。

ここには呪詛が届かないのか、山ほどもある人骨はただ、そこでひっそりとうずくまっただけだ。動き出す気配もない……。

グラントの言葉に、セフも改めて仲間たちを見渡した。

森を強硬に突破した名残りが、メンバーの顔に色濃い疲労の翳を落としていく。

アシュの息吹で誤魔化しているだけで、グラントもフィルムも、相当に疲れていた。

「ああ……、そうか、……そうだな、すまん。」

先走った事に気付き、セフは素直に頭を下げた。

それをグラントが驚いたように見つめる。

五年前には、こんな事は決してなかったのだ……。

「……五年、か……。お前も成長するわけだよなあ、」

苦笑で、言い掛けた他の言葉を濁した。

神殿でのクエストは一応、成功で終わる。

一息吐く間に、アシュが夕飯の準備に取り掛かった。

もう、それが仕事だと言うように、すぐに動く。

地下のダンジョンと、地上のダンジョン・・・塔の上を目指した一行はと言えば・・・。

「王様、セフに会ったら・・・とりあえずは、昔の誤解を解いた方がいいね、」

ルシーダが言った。

塔の頂上まではまだまだ掛かるだろう、アルザス王は天を見上げて、溜息を吐いた。

塔は壁の周りに剥き出しの階段が長く連なり、下を見下ろせば、いかに危険を掻い潜った冒険者であっても、足が竦む。

恐る恐る下を覗きこんだナッツが息を呑んだ。

「うへ、ずいぶん上がって来たよな・・・、」

はるか下方には小さくなった森が広がり、連れてきた兵達はごま粒のように見える。少し力を入れただけで、階段の端が崩れ、ガラガラと派手な音を立てて崩落する。

「うわわ！」

ナッツは慌てて飛び退いた。

「気をつけよ、あまり端を歩いては危険であろう。」

王は馬を降り、兵に護られながらも徒歩で進む。危険を承知で隣・・・階段の端に移ろうとする護衛を退けた。

「死んでしまつては、我を助ける事も叶わぬだろうに、」
忠義に厚い臣下に苦笑を投げ、このような中空で狙い撃たれることなどあるまい、と諭した。

困つたような顔で笑う時の、その口元が、さすがに兄弟だと思つほど弟に似ていた・・・。

魔法陣が描かれた場所は、塔の最上部・・・どのくらい登つたもの

か、風が強くなった。

「気をつけな！ 壁に寄って、足元を確保してから進むんだよ！」
ルシーダが前衛の兵に向けて怒鳴った。

「落ちる時は、後ろも巻き添えなんだかな！！」

そしてナッツが後を締め括る。

温存されて戦闘経験の少ない、こういう国の兵隊は、ここぞという時に役に立たない。

平和なのはいいことだとは思う、しかし、こういう場面では少々歯痒い……。

「いつそ、あたしが前に行きゃ良かったよ、」
臍を噛んで、ルシーダが唸っていた。

「それは困る、貴公らに何かあつては、皇子に顔向けが出来ぬ、」
立派な髭を蓄えた壮年の男が、逸るルシーダを留めるようにそう言った。

服装などを見ても、かなり地位のある人物らしいと見て、二人は首を竦めた。

「……五年経つてるとは言え、セフはこの国じゃ歓迎されてなかったんだろ？」

今になって、どうしてまた……。

あんた等は王様と違って、セフに反感持ったままだと思つてたよ。」
ルシーダの、遠慮のない言葉に男は怯む様子もなく、苦い笑みを浮かべた。

「事情が変わつたのだ、……皇子のあの目は、今でも異端として好奇の目に晒されるだろう。」

だが、以前とは違う。この国も多くの混血を受け入れ、迷信を迷信として、惑わされぬほどには知恵も付けたのだ。」

不吉の象徴とされた、月の瞳……それは、ただの迷信、世迷い言だったと人々は知った。

五年のうちに多くの混血、魔族がこの国に入り、そして、多くの奇異な姿がアルザスを闊歩するに至って、ようやくこの国は異端に慣

れ始めたのだと言つ。

耳が長かるうが、牙があるうが、肌が緑色であるうが・・・何もこの国にはもたらさない。

この国は変わらない。

「皇子に戻つて欲しいと願っているのは、眞実、陛下だけではないのだ。

今は、国民の全てが、あのお方に戻つて頂きたいと願っている。」

魔族や混血の存在を知るにつれ、その強さ、脅威を思い知らされる・そして、この国がかつて追い払った者達を悔やんだ。

皇子と同様に、多くの混血がどさくさに紛れてこの国を脱出した・

クレーターの混乱は、彼等に命の危機さえ感じさせるほどに大きかった。

「一部の特許商人や地主を追い出した事を、我等は間違いとは思わぬ。

彼等のために、この国は外の世界を知らされず、魔族の脅威さえ関知せずになっていたのだから。あやつ等が悪戯に情報を歪め、入国者までをも制限しておつたから・・・。それらを駆逐し、国家が正しく、国を統治するようになった・・・これは、喜ばしい事だ。」

その影には多くの、謂われ無く国を追われ、命さえ絶たれた者が居たとしても・・・。

国家の前には必然の犠牲である、と・・・そう肯定することを嫌つて、ルシーダは眉を顰めた。

第八話

巫女の予言した、黒き炎は手に入れた。

これをどうするべきかは導きがない。けれども、皆に行く手は明る
いと思わせた。

一泊の予定が決まれば、それぞれが動き出す。

アシュが、まるで自身の担当であるかのように、進んで食事を作っ
てくれた。

それを皆で囲んで、一息つく。

カンタンな携帯食料を使った料理ばかりだが、どれも味はとても旨
いものだった。

「うーん、あの時のスープも飲んでおけば良かった・・・！」

岩窟神殿で、アシュが作ってくれた食事を、フィルは辞退している。
あの時はとても食べる気がしなかったのだが、今はなんとなく、後
悔している。

アシュははにかんだ笑みを浮かべ、照れたようにもじもじするだけ
で、言葉にして何かを言いはしない。それでも、その態度だけで、
とても嬉しいのだと表現していた。

「食事が終わったところで、飲み物でもどうだ？」

続いて、グラントがコーヒートを淹れてくれた。順番に、金属性の力
ツプを全員に廻していく。

「案外、呆気ないクエストだったと思わないか？ セフ。」

なんだか、このまま全て巧く行くんじゃないかと思っちまうねえ・
・、

自らのカップを手に、グラントがそう告げた。

感慨深い呟きの中に、セフは自身の過去をも読み取り、微かな笑み
を浮かべる。

五年・・・長いようで、短かったと思う。

いや、むしろ短いようでいて、長かったのやも知れぬ。

セフと同じように、フィルも無常に過ぎ去る時の流れを感じ取り、目を閉じる。

一時、感傷に浸ることは許されるだろうか……。

クエストを通じて絆を作り上げた友が居て、一時の安らぎを共有する。金属のカップは冷たい石の床に当たり、高い音を奏でる。回されてきた飲み物が全員に行き渡った。

カップを手にし、口元へ近付けた時、フィルは馴染深い香りと色合いに、記憶を刺激される。

この、漆黒の液体は……コーヒーの中に、猛毒が盛られている事にいち早く気付いた。

微かに漂う甘い香り……フィルはアシュの手にあるカップを叩き落とした。

「飲まないで！ セフー！」

寸前で、セフの手が止まった。

悠然と、グラントのみが、その液体を飲み干した……。

信じられない、という顔付きで、セフが親友を見る。

「……どうして……、お前が、これを、俺に飲ませる……？」
やっと絞り出した声が、震えた。
信じられない。

猛毒であり、自己さえ失う強い麻薬である『アサシンの血』が、どうしてここにあるのか、理解出来ない……したくない。

アシュはフィルの思い詰めた表情を見、続いてセフとグラントを交互に見た。

ひどく傷付いた表情のセフと、誰にも目を向けてはくれない、グラントとを。

カラになったカップを指先でいじくって、グラントは目を伏せて床を見つめていた。

「……アサシン・ギルドを束ねる元締めは、迎下と呼ばれてるんだ。」

その、お偉い方が約束してくれたのさ。・・・薬を飲ませたら、俺にしてくれるってな。」

グラントの口調はまったく今までと変わりがなかった。気さくな友達、そのままの声がセフの名を呼んだ。

「お前の兄貴と同じだよ、・・・俺も、お前の狂気にやられた一人だ。

なあ、セフ。・・・昔みたいに、また、一緒に暴れ廻ろうぜ・・・？」

何を求めてそう言うのか・・・真意が図れず、途方に暮れる。誘い掛ける台詞に、セフはかすかに首を振り、否定する。

何があつたのかは解からない、五年の歳月は確かに全てを変えてしまう。それはセフだけでなく、フィルやアシュにも。この、目の前の旧友すらをも変えてしまうのだ。

「アサシン・ギルドに、いつ、入った・・・？」
セフの声が震えている。

どんな言葉を交わしていようと、得られる結果は一つしかない。・・・

・もう、この道は一つでしかないのだと、知っている。哀しみが押し寄せ、震える唇を噛み締めた。

互いの望むものは、別の方向を向いている、と・・・目の前のこの男は気付いているだろうか。

無理にでも望むと言うなら、その先に何が待ち受けるのかを。グラントは普段と同じに質問を考えているようだった。

「いつ？・・・そう・・・いつだったかな。」

実を言うと、昨日のことさえ怪しいんだ。俺の、ここは。」
指先で、とん、と自身の頭を示した。

クスリによる副作用と、強い依存のために、その部分は劣化が激しい。

いつ、セフと再会したのか・・・仲間と呼べる者達が増えたのか・・・。

なにもかもが、朧な記憶の彼方でしかない。

ただ、いくつかの忘れがたい景色があり、それだけは手放したくはないと、脳が固執している。

その風景のいくつかに、目の前のセフが居た……。

別の風景も記憶に新しい。徐々に消え失せてゆく記憶の中。

黒衣に顔の見えない男は命じた、セフにクスリを飲ませると。そうすれば、また、かつての日々が戻ってくるのだ、と。

笑い合つて、楽しかった日々・微かな記憶の中にも、鮮明に描き出されている。

クスリを飲ませること、それが、至上命令。

グラントの頭には、命令としてではなく、自身の希望として刻み込まれている。

塔の最上階には何もなかった。

すべての兵士が辿り付いた先、開けた場所には黒くいびつな魔法陣のみが残され、人の気配はない。王は周囲を見回した。

それが合図であったのか・一人の兵士が血飛沫を撒き、斬り倒された。

「な・・!？」

戸惑う者達に容赦なく白刃が閃く。実戦に慣れない兵士たちは次々と、見えぬ敵に倒されてゆく。ルシーダの鎖が唸りをあげ、何者かを叩く。

ナッツが、隠し持った液体をぶちまけた。

気配をなくす術・・景色に紛れる魔術は、聖なる力を込めた水の前で無効になる。

敵が姿を現わした。

「ギルド・・!」

数名のアサシン、黒衣に顔を見せぬ者達は血に染まる双眸をして、表情は消えている。

強い薬の影響によって、その肌は土のように変色していた。

またたく間に、王の精鋭は数を減らす。

それでも、精鋭は自身と刺し違えてアサシンを葬っていった。壮絶な闘いが、其処ここで繰り広げられている……。

王の魔術は強い。至近距離に迫る敵に、冷静に凍てつく吐息を指で弾く。

アサシンの身体は勢いのまま走り、凍った頭だけが置いてゆかれ、砕け散る。

王の傍、前のめりに倒れた。

「冷静に対処せよ！ 敵は少数、数で勝る！！」

一人には複数で対処するようにと、王は指示を下した。

一対一の愚を諭し、敵のアサシンは騎士ではないと檄を飛ばし、陣形を指揮する。

病の身とは思えぬ的確さで、戦闘を有利に運んでゆく。

複数が一人のアサシンを囲み、切り刻む戦法を取った。訓練された兵士は瞬時に組を作り、隊列を築きあげて、見事な統率を見せる。

突進する敵の肩を斬りつければ、動く方の腕が振り上がり、武器を振り下ろす。応戦する兵士が剣で防ぎ、横合いから別の兵士がアサシンの胸を払った。それでもなお、一瞬のズレさえない動きは、まるで斬られている感覚がないようだ。

自身が血を撒き散らし、腕も無くしている事にすら気付かぬまま、彼等は動いている。ゼンマイ仕掛けの人形のように、機械が動きを徐々に止めるように、鈍くなった手足がふいに止まって崩れ落ちるのだ。……斬られるアサシンは、何も苦痛を感じることなく絶命する。

王自身も、ついに剣を抜き放った。

神々しいばかりの煌きを放つ聖剣……グラン。高く、掲げる。

暗い地下神殿では、すでに戦いが始まっていた。

親友同士の、命を賭けた闘い……セフはツイン・ファイア・ソードを両手に、渾身の力でグラントの身体に斬撃を叩きつける。手応

えのない結果に舌を打ち、さらに追った。

暗闇からニードルが音もなく飛翔し、床の影を縫い止める。

飛び退ったセフの背後から、拳に仕込まれた鋭い爪様の刃が弧を描き、風を送った。

アサシン独特の武器・・・絶望に打ちひしがれている場合ではなく、気力を振り絞る。

友が、凶悪と評したホーミング・ショットを撃ち放つ。挟み撃ちを狙う。

コントロールの甘さを突かれ、とん、と頭を越えて逃れてゆく・・・

強敵。

殺す気になれば、いつでも殺せるだろう・・・そのくらいに、二人の戦闘力には差が感じられた。

フィルもアシユも、動くことさえ出来ない。

二人の動きを目で追うことだけで精一杯の、そんなセフの仲間のアサシンは目を付けた。

「ぐっ・・・!？」

いきなり背後を取られた。アサシンがフィルの胸にナイフを突き立てたのは、一瞬後のこと。

すべての時間が瞬時に凍り付く。

深く突き刺さった刃は、辛うじてフィルの命を奪うには至っておらず・・・交渉を開始する。

「・・・セフ、・・・さあ、そのクスリを飲んでくれ・・・、」

仲間の命を奪いたくないのなら・・・。

第九話

鋭い緊張で時が止まる。・・・フィルは自身の背を這い登る痛みに顔を歪め、微かな呼吸だけをなんとか繰り返していた。

・・・正直、グラントのこの策は巧い手だとは思っていない。

仲間であるセフが、時に冷酷な判断をも下せる男だという事は熟知しているから・・・瀕死の仲間と、無傷の自身たちとを天秤に掛けたりはしないと思っていた。

そして、フィルもそれがこの場合での正しい判断だと考えている。

自分を見殺しにして、この、隙の生まれた敵を屠ることが最善の行動だ。

「・・・・・・・・・・」
目前の・・・頼れる仲間だと思っていた男が、ここにきて様子がおかしいとフィルは感じる。

迷う必要もない状況のはず、それが、明らかな戸惑いを瞳に浮かべている。

・・・まずい・・・、

苦しい息の下にも、心臓は嫌な動悸を早めてゆく。

親友との思いがけぬ不幸な再会や、故郷の惨状などで、彼の判断力が著しく低下している事によく気付いた。迷う必要もない状況・・・もう、自分は助からない・・・。

セフの視線が、床に置かれたままのカップへと向かった。

声にならないまま、フィルの口だけが動く。

駄目だ、・・・それは飲んじゃいけない・・・、

乾き切った喉がしきりに上下し、全身を冷たい汗が濡らす。

彼が薬を飲んだところで、フィルが助かる見込みは少ない・・・。

いや、この敵は、最初からフィルを助ける気などない。それどころか、セフが彼の言うままにすれば、きつと、残るアシュをも殺すだろう。

チームは全滅だ。

駄目だ……、セフ……！

手に取られたカップが彼の口元へと運ばれる。

ほんの僅か、フィルを拘束するグラントの腕が、力を抜いた。

「……！！」

残された手は、これしかない、フィルの上半体が大きく傾げ、自らの意思で兇刃を引き抜いた。

血が、霧のように吹き上がり、一気にアサシンの視界を塞ぎ、青年の命を削る。

「ちっ……！」

咄嗟に死に体の青年を前方へ突き飛ばし、グラントは後方へと飛び退る。

血の霧の中から、まっすぐにこのグラントの胸へと、セフの剣が延びた。

二人の動きはほぼ同時。

我がの胸を刺し貫く剣を片手で掴み、残る片手ではその持ち主の首筋にナイフを宛がっている。

相討ち……しかし、ナイフはセフの首の皮膚一枚で止まり、そのまま床へ落ちた。

心臓を貫かれてなお、グラントは余裕を残している。

「……馬鹿だな……、こういう時は、首を、落とすんだ……」
アサシン相手に情けは無用、喉を掻き切られるだろう、と、忠告を

残して。

ゆっくりと倒れる彼の胸から、血塗れた剣が、ゆっくりと抜けていった……。

「フィル……！ しっかり！」

一瞬の金縛りから逃れたアシュが、即座にフィルの蘇生を試みる。

完全に死んだわけではなく、彼は微かに息を継いでいる。セフの時よりさらに酷い状況……それでも、アシュは懸命に努力した。

「絶対に・・・死なせない・・・！」

頼りなく見えたアシユが、毅然と死神に対峙する姿とは対照的に、打ちのめされたセフは蒼褪めた表情で、時折、力なく頭を垂れた。張り詰めた緊張の糸が、ここへきて、切れてしまったようだった。この国に戻って、色々な事が一度に過ぎた。・・・正直、気持ちがいまいけないでいる。

目をやれば不幸な形で失った親友の骸があり、今、また、連れ合った仲間が死にかけている。

成す術もない自身に、激しくかぶりを振った。

「セフ・・・、血が、血が止まらない・・・！」

このままでは・・・、
地下神殿にはある種の結界がある、それはアシユの魔力にも幾らかの影響を与えた。

アシユの訴えはこの男から弱気を払拭するに充分で、すぐにセフは行動に移る。

「よし、魔法陣のあった場所へ戻ろう。・・・あそこなら、たぶん、ゾンビどもも来ない。」

なんとか蘇生魔法で時間を稼いでくれ、・・・なんとかする。「
ゾンビ化の魔法が内外で騒がれる中で、祭壇の人骨たちは動いた気配がなかった事を思い出した。あの魔法陣はきつとゾンビ化の魔法を遮断するのだろうか。」

・・・ここに居ると、夜が危険に思える。もし、あの骸が再び起き出してきたら・・・アシユでは太刀打ち出来ない。ファイルは今、アシユの魔力だけで生き長らえているのだ。

セフは小さく黙祷を捧げ、友の冥福を祈った。
不幸を嘆いている暇は、一刻とてない。

「魔法陣の真ん中で救助を待っていてくれ。・・・かならず、戻る。」

「
ファイルを救える方法は一つ、兄を頼り、あの秘薬を手に入れる・・・
それしかない。」

どの道、この国へ戻った時から、顔を出せば刑死は免れまいと感じていたから、覚悟はある。

ただ・・・自身を憎んでいるはずの兄が、その願いを聞き届けてくれるかどうか・・・無理な願いに思えた。

兄には、母を奪い、愛する女を奪い、さらに国まで奪おうとしている弟としか見えないだろう。

交渉するしかない、この命と引き換えに、あの薬を得る・・・目の前で、命を絶ってみせようか。

今、嘆きの森を抜けられるのは自分以外にこの国にはない、と思いついて、セフは瞳に剣呑な光を宿した。・・・どの道、嫌われ者なのだ・・・無法者に徹するか、と。

「猶予はどのくらいだ？」

「・・・今夜いっぱい・・・」

前方の闇を見つめる。

「充分だ。」

今度こそ、セフはなんの計算も抜きで王宮の門を潜る。

「兄王はどこだ!？」

突然の侵入者に、当然の事だが、居合わせた兵士の群れは抜刀で答える。侵入者、しかし、一目でその正体が魔族である事が知れる、強いオーラを纏っている。

どれだけの人数に囲まれようが、セフからすればどうという事もない。じろり、と一瞥してのけた。

挑発された形に、兵士たちが殺気立つ。イラ立っているセフも、今にも討つて出そうな勢いだ。

慌てて登場した宰相が、一目でその正体を見抜き、鋭い声で場を制した。

「や、やめる! 全員、剣を引くのだ!」

あまりにも強い魔力の接近に驚き、とりもなおさず出てきたのだが、その正体を知り、さらに驚いた。

セフを囲む無数の剣が切つ先を逸らす。

動揺が場を包むが、いつさい構わず侵入者はずかずかと奥へ突き進んでゆき、それに釣られて包囲の衛兵もあとずさって行った。

「セフ様!? まさか・・・、本当に・・・?」

宰相の前で、ようやく止まった。

「・・・久しぶりだな、兄は?」

どこか余裕のないその様子に、宰相は訝しむように眉を潜めたが、とりあえずとセフの腕を取った。5年ぶりに戻ってきた王族・・・それも、ようやく出てきてくれた本物の末皇子だ。

「お久しぶり御座います、皇子。よくぞ、御無事で・・・!」
多少の疑問よりも歡喜が上回った。

兄王ラルフが再会を熱望して止まなかつた末皇子・・・生きている事だけが、辛うじて伝わっていただけの、行方不明の末弟が、今、目の前に居る。

そして、現在急を告げるこの国を救うことが出来る、唯一の人物・・・。

ニナイの双眸がみるみる潤み、笑みの形に唇が開かれた。

セフは苦笑いを浮かべ、古い重臣の言葉より先に、用件を告げた。

「悪いが、話し込んでいる時間はない。・・・急いで、兄王に会わせてくれ・・・!」

「ど、どうなされたのです? なにか・・・? 火急の用件でも・・・?」

一分一秒が惜しいセフは、曖昧に頷きながら王宮へと進んでいく。奥にゆけば、そこに目指す人物が居るはずだ、と。

「セフ様・・・! 兄君は・・・、ラルフ様は、今、王宮にはお出でになりません・・・!」

「・・・! なんだと・・・!?!」

一瞬、耳を疑う。しかし、すぐに切り換え、明確な判断を下す。意思は決していたが、とりあえずで尋ねた。

「何所へ?」

「兵を率い、塔へ行かれました。」

二ナイに向けられた視線が、西へと向かう。……ここから西にある、崩れ掛けた遺跡の塔を記憶から手繰り寄せた。今から行って、戻っていたのでは間に合わない……。

「二ナイ。責任は必ず取るから、宝物庫を開けてくれ。」

突然の来訪に続く、この唐突過ぎる願いに、宰相は絶句した。

かすかに横へと振られたその首の動きに、それでも皇子は食い下が
る。

「頼む、俺の仲間が死にかけているんだ、……助けてくれ、」

切羽詰ったその様子に、宰相はごくりと喉を鳴らし……やがて、
頷いた。

宝物庫、死にかけ、……それらの言葉で推測出来る、この突然の
来訪の目的。

王家の秘宝である『奇跡の虹』を求めてやってきたのだ。

一存で決める事は重大な裏切りかも知れない……。

皇子は家臣である二ナイに、深く頭を下げた。

「……恩に着る……！」

あとは迷いもない。まっすぐに、目指す場所へ。

進み続ける皇子の背を見遣り、二ナイは複雑な心境を持て余す。

王の許可もなしに、王家の宝が収められた宝物庫を開けようとして
いるのだ。

いくら、皇子の命とは言え……許される範囲ではない。

……しかし……。

仲間、というのは……合流予定であった、あの若者……同じ王族
の出と話に聞いていた、フィルとかいう者に違いない……。

再び、二ナイは喉を鳴らして、口内に溢れる唾液を呑み下さねばな
らなかつた。

何が起きたのか……あるいは、絡み合う糸が、一本に繋がったも
のか……。

第十話

宝物庫を開き、薬を手にしたニナイが出した条件は、セフの予想とは違うものだった。

「・・・この薬はわたしが責任を持って、神殿へ届けましょう。どうぞセフ様は西の塔へ向かい、兄君と合流を・・・。」

「無茶なことを・・・！ あそこは今、ギルドの本拠だぞ!？」

俺がここへ来るにもやっとなつたのに、お前や人間の兵など何名居ても、役には立たん!！」

セフが思い余つて、事実を曝け出してしまつと、やにわに動揺が走つた。

舌打ちでセフは自身の迂闊を悔いたが、それでもさすがに兵達はすぐに静まる。

「・・・俺が行く、いや、俺でなければ辿りつけん。

解かってくれ、ニナイ。」

一刻を争うのだ、ファイルは今にも死に囚われようとしている・・・。ニナイの瞳が戸惑いで揺れる。

その時、一羽の使い魔が、ニナイの胸へと飛び込んできた。もともとは、やはり昔セフが持ち出した、古の書物から復活した契約魔法の一つ。魔力などなくとも使役が出来る。

「!!! これは、ザルディン公の・・・!？」

宰相の意識が自分に向いたことを確認すると、使い魔は白い霧となり、風景を映し出した。

塔の最上階で、苦戦中の自軍兵士と王、それと対峙するアサシンの群れとを・・・。

「・・・!!!」

目を見張る二人の前、白い魔は役目を終えて霧散した。

「セフ様、猶予はありません！ あなたにしか、あの陣を消すことは出来ないのです！」

早く・・・！ 兄王を、お救いください！」

「しかし・・・！」

残酷すぎる二者択一がもたらされた。

「お仲間の青年はわたしが必ず、救い出します！ 駐留兵力のすべてを投入し、ギルドの本拠を叩きましようぞ！」

遅れてきた軍務将のカラルが、そう叫んだ。

セフには声もない、いくらカラルが氣勢を上げようと、人間だけの部隊ではあのギルドを倒せはしないだろう。むざむざ殺されに行くようなものだ。

しかし、塔に向かった王が殺されたなら、その影響は計り知れない・・・。

セフは決断した。・・・せざるを得なかった・・・。

「・・・無茶はするな・・・、夜を待って、突入するんだ。」

魔法陣とやらは、俺がなんとかするから・・・だから・・・、ゾンビが居なくなつた事に気付かないうちに、奇襲を掛けて、森ごと焼き払え・・・。」

とうてい勝ち目などあるはずもなく、それでも最善の策を練るなら、夜まで時を稼ぎ、王の危機を払った後に、セフ自身が軍と合流する方法を取るのが一番だ。

「俺も後から合流する、・・・早まって、この機会を逃すな。」

カラルの瞳がきらきらと燃え立つ。勝利の約束されたようなものかと思えたのだろう。

逆に、セフの瞳は深い哀しみに沈んでいた。

フィルは諦めるしかない・・・神殿の地下に居るなら、アシュだけは助かるだろう・・・。

あるいは、フィルの生命力が死神を撥ね返すなら・・・運命が彼を見放さないなら・・・夜まで保ってくれたなら・・・。今すぐに、自身で助けに戻れない悔しさが、心を焼く。

とうてい希望など見出せない仮定ばかりで、自身に嫌気が刺した。無力に、目を伏せる。

王宮と遺跡の塔をむすぶ街道の森では、のどかな景色とは似合わぬ場面が展開されていた。

木漏れ日の差す明るい林の中の小道だ。鳥のさえずりさえ聞こえてきそうなこの場所で、老将は恐るべき敵と対峙していた。

「・・・身勝手な事を言うな、承諾したのはそちらも同じ。

産まれる子供が天才だろうが馬鹿だろうが、我々の知った事ではないわ。」

「そうはいかないですよ・・・我々には我々なりのルールがありますから。それを貴方がたの理屈と違っているからと言って、撥ね付けられてもねえ・・・。」

所詮は力のある者の理屈が押し通されるだけだ、とアサシンは嘲った。

今回でいうなら、アルザスの理屈よりもギルドの理屈がこり押しで通るのだ、と。

老将、ザルディンの歯がぎりりと鳴った。

いったい、強者の理屈が正義だと言うなら、それはあまりな世界の仕組みではないか・・・。

老練な古参の臣は、それでも、絶対的に不利な状況の中でも打開策を練っていた。

もう命など惜しむべくもない、ただ、どうすればこの国の危機を回避出来得るか・・・それだけをひたすらに考えていた。

急がねば、王は塔を登ってしまう・・・！

それは賭けであった、もう、それ以外の策は思い付く時間がない。しゃにむに敵へ向かい、剣を振るう。

むろん、倒せるなどとは思わないが、アサシンの傲慢さは自身を這いつくばらせるだろう。

読みの通りに紳士ぶった暗殺者は、老将を軽くいなして、地に叩き着けた。

激痛の中、ザルディンは敵の嘲笑の声を聞く。

そうしておいて、アサシンの耳には届かぬように、微かな呪文の詠唱を口内で行った。

「馬鹿な人ですねえ……。あなたのような御老体に引けを取る事はありませんよ。」

老獪な知恵が何を考えるかを、アサシンは読めなかった。

倒れ伏したまま、ザルデインは自身の指輪の透明な石を嚙む。

「ちい……！」

閃光が走り、小さな妖魔が宙を猛スピードで飛翔し、気付いたアサシンが追いつがる。

その足に老将は無が夢中でしがみ付いていた。

飛び去る妖魔は契約の使い魔……。老将の思惑に嵌まり、アサシンは激怒する。

「愚かなマネをしてくれましたね……！」

紳士ぶっていたアサシンの顔が怒りに歪められる。

「この……、くそジジイが……！」

化けの皮がはがれ落ちた。

宮殿内の一角に入り込む形で隣接する神殿地区……。そこでは今日も、居なくなつた巫女の姿を探す女官たちの声が遠く近くで響いていた。

このところ、巫女の少女は忽然と姿を消しては人々を騒がせている。総出で探索をしても、いっこう姿を現わさず、昨日はついに街中にもまで搜索の手を伸ばした。

それでいて、少女はいつの間にもやら神殿に戻っているのだから、人々にとっては大迷惑だった。

何所へ行っていたのかと問うてみても、なんら納得のいく返答などない。

相変わらず、ワケの解からぬ予言と意味深な微笑を湛えて、人々を閉口させた。

「……我が君に、お会いします。」

そう言つて、少女は嬉しそうに笑っていたが……。
今日は今日で、もう、姿がない。

急激に歴史が蠢く。

……王は塔の頂上で、運命の女と対峙していた。
こうしてみると、やはり……シエナとよく似ている。
悲しみが押し寄せた。

「……なぜ……、誰が、シエナを殺したのだ……？」

「それはあたしが聞きたいわ。……そう、貴方の弟君にね。」

「弟が……セフが関係していると、お前はそう思うのか……？」
拭い切れない疑惑が、再び、頭をもたげる……。

二人、手に手をとつて、逃げる姿を見た……あの証言は、出所
も掴めぬ噂でしかなかったが。

けれど、誰かが、見た、と、言った。

「……セフ、」

教えてくれ、本当に、わたしはお前を信じていいのか……？

「お喋りはこれくらいにしましょう。……ほら……。」

……待つていた人物も現われたことだし……？」

肩で息を継ぎ、女を睨み付ける青年に、王は視線を移した。正規の
街道など通らず、森をまつすぐに抜けてきたのだろう、衣服には若
葉が絡んでいる。あの道は迂回路だったな、と、兄王は奇妙な感想
を抱いた。

面影が僅かに残されている。昔日には線の細い幼い顔立ちをしてい
た、弟。

今は精悍な顔付きをして、ともすればどちらが兄か解からないくら
いだ。

「……セフ……？」

弟からの返事はなかった。ちら、と一瞥したその隙に、女が襲いか
かったのだ。

魔族同士の闘いは、やはりここでも人間の兵士、混血の王には速度が違い過ぎて、目で追うばかりだ。シエナの妹は禁断の技術によって、持てる最大にまで魔力を高め、時にあのセフがたやすく攻撃を受けてさえいた。

腹に受けていた傷がさらに抉られ、血を吹き出す。

「ぐっ……！」

「あははは！ 大したことないわね！ それでも本気！？」

女は余裕さえ持って、セフを追い詰めようと迫る。

ようやく目が慣れたのだろう、ルシーダの鎖がこの時、唸りを上げた。

「ちっ！ 邪魔すると殺すわよ！？」

なんとか動きが取れるのは、人間ではこのルシーダと、あとは混血の二人……ナッツと王だけだ。

横合いから、王がセフを庇って女の剣を防いだ。

ギン！ 高い金属音。

女は咄嗟に空いた左手で王の身体を弾き飛ばした。

「……！」

場所が悪い、王は勢いのまま、塔のへりから落下……それを、間一髪でセフの右手が掴み、支える。

王の左手首をセフの右手がしっかりと掴んでいる。

「……！」

次の瞬間、女の持つ細身の剣が、セフの背に突き立った。

どういっつもりなのか……わざと、急所を外したらしい。

傷が痛手となっていて、力が入らない……懸命に、王の身を支えることが精一杯だ。

「セフ……！」

王が声を上げた。

最終章 第一話

「影縫い!!」

女の声が場に響く。

とたん、駆け寄ろうとした姿勢のまま、ルシーダもナッツも、もとより動けぬ兵士達も、ぎしり、と奇妙なままで動きを止めた。

自由を保っているのは、今や、術者の女と王家の兄弟だけ。

「・・・手を放せ、セフ。」

二人共、死ぬ必要はない・・・。」

声を落とし、王は冷静に対処を示す。自身を見捨て、反撃せよ、と。魔族と同じだけの力を持つ弟であれば、この状況であっても、この、兄の手を離しさえすれば、打開するに違いない、と。

セフは苦しい下から、笑みを浮かべた。

「・・・嫌です、」

「セフ・・・!」

女がまた、高く笑い声を響かせた。

周囲の者たちは凍り付いたように動きを止めたままだ。

影縫い、と女が叫んだ瞬間から、身動きを封じられている。

「・・・さあ、観念する時が来たようね・・・。貴方には、幾つか聞きたい事があるわ。」

「そうかい？ 俺はないな。」

女の足の細いつま先が、セフの痛めた腹の傷を蹴り付けた。

「うぐ・・・、」

「減らず口ね。・・・へたな事を言うなら、貴方のお仲間を一人ずつ殺すわ。」

まだ何か言おうとしていたセフの唇が、呪詛の言葉を呑み込んだ。

軍務将、カラルの率いる一軍も、戦闘態勢を整え、息を潜めて森の

全面に展開していた。

夜まで待つて仕掛けろ、との厳命だ。じきに、あの末皇子が合流する……。

全員がじりじりと夜を待つていた。

嘆きの森の黒い木々は、人間を寄せ付けず、不気味な静寂を保つて
いる。

「……………」

軍を率いる將軍は眉を潜めて前方を見遣る。

首をかしげつつ、所在無さげに引き返してくる斥候の姿を、カラルは認めた。

「どうしたのだ？ 敵は発見出来たのか？」

「そ、それが……、」

斥候の背後から、巫女の少女が姿を見せた。

時間を少しだけ、戻さねばならない。

暗い地下神殿に残され、アシュは心細くセフの到着を待つていた。

フィルの容態は次第に悪化していく……もう、セフの帰る頃には手遅れである気がした。

涙をこぼしながら、それでもアシュは懸命に努力を重ねていたので。

「うわ！？」

突然、目の前にふわりと少女が舞い降りた。

「お静かに。……ここから、離れてくださいませ。」

少女とは思えぬ怪力で、アシュはいとも簡単にフィルの身体から引き剥がされる。

有無も言わず、少女はアシュを魔法陣から放り出した。

そして、自身もするりと陣から抜け出る。

少女の意図を、その瞬間に把握した。

「やめて！ 彼はまだ生きてる……！」

生贄の儀式が行われたはずの、陣だと、アシュは蒼褪めた。

黒い霧が、フィルの身を包み込む。少女に抑えられ、もがきながら

アシユはワケも解からず喚いている。得体の知れない何かが、死にかけた仲間の足元へと忍び寄ってくる恐怖を感じた。

居竦んでしまったアシユの背を、巫女の少女はようやく離す。前へ回って、言葉を紡ぐ。

「儀式が復活したのです……ただ、一度きりの。」

恐ろしい行為を行いながら、平然とした少女の目に、アシユははつきりと恐怖を感じた。

ゆらりと宙に浮く、死に掛けの青年。

何者かが乗っ取っている……。

アシユは全身の冷たい汗と、微細な震えをどうしても抑えられない。この恐怖……心臓を鷲掴みにされたような、すぐに逃げ出したいくなるような、この恐怖は。

何も知らされず生きてきたアシユには、その存在を言い表す言葉もまた、知らされていない。

再び目を開いたファイルは……生者の目ではない、どんよりと曇る死人の目をしていて。

畏れがピークに達した。

少女がアシユの手を取らねば、そのまま失神していただろう。

はっ、と我に返り、噛み合わず鳴る歯を、無理に止めようと顎に力を込めた。

「さあ、今度は陣の中へ……」

入れ替わりで、青年の身体を乗っ取った何者かが中空で歩を進め、外へ出た。

「死に近づくことによつて、我が君は呼び出されるのです。

……彼は、この国を救ってくださったのです。」

少女の言葉に、改めてアシユは神殿の暗い天井を見上げた。

ここは……、そう、セフに聞いた。

ここは、『冥界神』の、神殿……。

どんよりと死人の目になった青年の両手が、ゆるやかに広げられた。

黒い霧が、果てもないほどに急速に周囲を呑み込んでいった……。森の外には、未だカラルの軍勢は姿も見せず、王も塔の頂きで精鋭たちと交戦中の折り。

静かに進軍し、この将軍が到着したのはそれからまもなくだった。森の手前で陣形を整えた将の前に、少女は現われた。斥候の背後から。

「……薬を届けてあげてくださいまし。

あの方々は、神殿の入口にいらつしゃいます。」

一刻も早く、と少女は付け足した。

何の事かは解からなくとも、カラルも兵も、この少女の言が疑いなし事実しか語らぬ事だけは熟知している。カラルの指揮のもと、全軍が移動を始めた。

森の、道なき道を進むうちには数名のアサシンと行き会ったが、彼等はみな死んでおり、交戦の必要は一度たりともなかった。

胸部を掴むように息絶えた姿に、従軍の医師が心臓発作ではないかと告げる。

一様に、皆、苦悶の表情を浮かべ、僅かにもがいた形跡を残して、事切れていた。

巫女の少女はまったく関心すら見せることなく、その横を平然と通りすぎる。「死」というものが、彼女にとっては何ら畏怖すべき事ではなく、当たり前前の事象でしかないらしかった。

なぜギルドの者達が死んでいるのか、……。どうやら全滅しているらしい事は、この大群が移動していてなお、一度たりと、生者との遭遇がないことから覗える。

冷たいものがカラルの胃に落ちてくる。感覚的なもの、どうにも得体の知れない恐怖がそのような錯覚を覚えさせるのだとカラル自身は判断していた。

兵たちの足取りも重い……。言いようのない恐怖で、彼等の進軍は徐々にスピードを落とした。

何者が、この状況を作り出したのか・・・アサシン・ギルドがほんの僅かな時間で全滅した、などと・・・誰が信じようか。進路のそこここで見掛ける死骸は、数を増してゆく。

およそ人間とは思えない怪物まで含めて・・・この数を、いつたい誰が。

抵抗の痕跡さえありはしない、おそらく反撃の暇もなく、命を奪われたのだ。

絶対的な力の差が、そこにありありと見えて、兵の士気を鈍らせる。ギルドを遙かに凌駕する、新たな敵の出現であった。

嘆きの森は変わらず静寂している。生き物の気配さえなく・・・。

先頭の少女が、時折、振り向いて首をかしげる。

恐る恐る進む兵達を眺め、不思議そうな顔をしていた。

少女の言葉通り、神殿の入り口付近には生きた人間の姿を見付ける。ようやく出会えた生者の姿に、人々はほっ、と胸を撫で下ろす。・・・

これでようやく、文字通りの「嘆きの」森ではなくなった・・・。

「これはいつたい、どういう事なのだ？」

駆け寄ったカラルが、唯一の生存者である二人・・・瀕死のフィルを見、傍らのアシュに問う。

すぐさま大切に仕舞っていた薬を、アシュに手渡して、先に治療を促した。

奇跡を呼ぶ薬がフィルの塞がらぬ傷に塗りこめられる。・・・セフの時同様に、僅かにフィルも呻いて、そして、今度こそゆっくりと瞼を開いた・・・。

「・・・う・・・、ここは・・・？」

蒼褪めて、冷たい汗の浮く額に従軍の医師が手を置いて、さらに塞がった傷と首にも手を置き、症状を検める。手際の良い仕草に、フィルは戸惑いながらも身を任せていた。

「・・・少々、貧血がひどい程度で、命の危険は去りましたな。もう大丈夫でしょう。」

その言葉に一番安堵してみせたのは、怪我を負ったフィルよりむしろ、傍らのアシュだった。

緊張が解けたのか、へたり、と石の床に転がってしまった。すぐに兵の一人が抱え起こし、支える。疲れ果てたアシュは体力も限界で、その肩に体重のすべてを預けているから、まるで引きずられる囚人のように見えた。

「よし、では全軍引き上げだ。すぐに王宮へ戻り、塔への援軍を編成せねば・・・！」

カラルの指揮で、兵たちは一斉に進路を変える。

屈強な兵士がもう一人、前へ出て、負傷したフィルをおぶってくれた。

辞退しようにも、まったく手足に力が入らず、動ける状態ではない事に、遅れ馳せでフィル自身も気付く。自身の自殺行為があり・・・あの後、なにが起きたのか解からない。

アシュに目を向けると、苦い笑いを浮かべて、涙も浮かべていた。

第二話

「なにが起きたのかを、説明頂けるか？ 冒険者殿。」

兵の列を縫い、すぐ傍へとやってきたカラルがフィルに問うた。

しかし、説明と言われても、フィルにも何が起きたのかなど解からない。困り果てた顔で首を捻るだけだ。助けようとするかのように、代わってアシユが口を開いた。

「あ、あの・・・、えと・・・、何かが・・・」

説明のしようもなく、アシユも視線を流し、傍らの少女に救いを求める。

「この森にいた魔物たちは、冥界神にすべて殺されました。」
「いともあっさりと、少女はそう言った。」

「死に近付いた者が祭壇に上がることで、冥界神は降臨するのです。フィルが、その役を負ってくださいました。・・・そして、降臨した神に、あの者達はすべて殺されたのです。」

カラルは神妙な顔で頷き、気味が悪い、とつぶやいて身震いをした。

「あれって、神様だったの・・・？」

アシユが恐々と問う。

「いいや、あれは多分、魔神の仕業だ。・・・冥界神と言って、古代においては神と崇められていたらしい記述が、古文書の中にも残っている。生贄を求める、悪神の類だ。」

毎日のように生贄が捧げられ、この地域では戦も絶えなかった・・・。

現在、アルザスで信仰される神は、生贄など求めない。・・・まったくの別物だ。」

カラルはアシユに答えてそう言った。

今になって甦り、多大な生贄を求めたのだ・・・と。

アシユは首を捻り、傍らの少女を見た。この少女は、その悪神を「主」と呼んだ気がしたが・・・。

自身は常識的な事柄を何も知らないのだと、それ以上の疑問を口にはせる事をアシュは諦めてしまった。

「巫女よ・・・、いったいこの国はどうなるのだ・・・、ゾンビの来襲に王の病、その上にこのような魔神の類までが・・・我等は最期の時を迎えたのか・・・？」

カラルの推理は見当外れでもあるのか、訴えられた巫女の少女は首を傾げている。

不思議そうな顔をして・・・けれど、何も言わずに前方を向いた。

カラルにすれば無理もない悲嘆だ。アサシン・ギルドと古代の魔神が入れ替わったにすぎない。

少女は神とコンタクトを取る唯一の者。祭壇の地下で、フィルに対して行ったことを、アシュは現実から遠いものであったかのようにしか受け止めず、フィル本人にも記憶がない。

多くの生贄が捧げられた悪神・・・それと、フィルを一時支配したあの黒い影とは重ならなかった。

アシュには、ここで何が起きているのかすら、理解がないのだ。

魔神と、復活の儀式とは、アシュの中では1つに繋がらなかった・・・。

フィルは大きな背に負われながら、考えている。

少女は、フィルがこの国を救う、と予言した・・・あれは、今、果たされたのか・・・。

自身に記憶はなく、そしてギルドだけは壊滅した。

魔神は魂を求めるもの、と、誰もが信じている。

そしてこの森はかつて、冥界神の庭であった。

森に巣食っていたギルドの構成員は、そのために命を奪われたと・・・。

その解釈が、もっとも妥当と思われた。

カラルの率いる軍勢は、城への帰還を果たしたが、一方の、王と精鋭とは未だに戻らない。

軍勢が城へ帰着した頃に、ちょうど金縛りの術に陥っていた。未だセフが知り得ない、女アサシンの正体。

シエナの妹……。

その女がまた、セフに質問を投げた。

「シエナを知っているわね？　……彼女を連れて城を出て、それから何所へ？」

「？」

女の質問に、セフは慎重に思考を巡らせねばならなかった。

迂闊な事を言えば、確かにこの女は仲間の手を掛けるだろう。しかし、女の質問はあまりにも予測外で、しかも、あまりに意外で、問い返さずにいられなかった。

「……シエナは、……城で死んだんじゃない、なかったのか……？」

セフの返答に、女は無表情で答えることもない。

……この回答を初めから解かっていたような……なんの感情の乱れもない。

王は目を閉じた。……その一言で、すべての疑惑は氷解したのだ……。

女は静かに告げた。

「貴方のせいで、死んだことに間違いはないわ……。」

さらに質問を浴びせようとしていたセフの言葉を遮った。

女のセリフはセフの強靱な神経でさえ、容易に抉る。

きつと、彼女に縁の女なのだ、その程度は予測できたのだ。

深すぎる憎悪が、冷たい空気となって場を覆い尽くすようだった。

「……彼女は……シエナは幸せそうだった？」

続く女の質問も、表面通りのものではないと知って、セフは思考を巡らせる。

いったい、何を聞きたいのか、女の真意を測ることは難しい……。

「……たぶん、」

曖昧な返答を返せば、気に入らなかつたのだらう、また容赦なく腹の傷をえぐる。

「幸せなはずはないわ、嘘をつかないで！」

どうしても彼女を不幸だった、とせねばならぬらしい。セフは舌を打つ。

それとも、正確な事実を知りたいのであれば。セフは溜息を吐いて、再び口を開いた。

これを兄に聞かせる事は、酷であろうが、仕方がない。

「・・・確かにシエナは幸福ではなかつたかも知れない。」
右手に兄の動揺が伝わる。

セフは視線をそらし、兄王の見えない位置で目を閉じた。

「彼女は・・・いつも悲しげだった。・・・もつとも愛する者から、疑われていたからだ。」

愛情深く、二人は結ばれていたのに。・・・俺が、横合いから、引き裂いた。・・・。」

兄の苦悔と女の得心が、同時に伝わる。

結局は、自身が妃を信じてやらなかつたためか。・・・王もまた、唇を噛む。

「シエナは幸せじゃなかつた。・・・よく、解かつてるのね。・・・。」

「
そう繰り返した女の顔は、むしろ穏やかだった。」

「・・・もし、彼女が幸せだった、と言いつ張るなら。・・・すぐに殺してやるつもりだったわ。」

女の言葉は、取り返しのつかない過去の日々を、無理矢理に思い出させる。

「・・・悔いて、いる。・・・。」

ラルフ王は項垂れたまま、小さな声で呟いた。

「
「こんな国など、消えてしまつがいいわ。・・・。」
憎悪に満ちた声で、女は宣言した。」

不幸だった王妃・・・彼女を死へ追いやったものが、真実、この国の頑なさであり、無理解であり、偏見だった、と知っているのだ。狂気に支配される者の声音だと、兄弟は思った。

「・・・お前の望みは、亡き妃の仇であろう？ わたしを殺せば、済むはずだ。」

王の言葉には、再び高笑いである。

「彼女の墓標に、貴方たち兄弟の首を、並べて飾ってやるのが望みよ。」

その返答で、兄弟は説得を断念した。

「・・・もう一つ質問があるの。」

女はまた、セフの腹の傷に、細いソールのつま先を捻じ込み、彼の苦痛の表情を見つめて微笑みながら、問い掛けた。

「黒き炎・・・手に入れたんでしょう？」

「頂こうかしら。」

女の言葉で、今度はセフの頭脳が高速に回転を始める。やはり最初から、この女とグラントには、繋がりがあったのだ。闇のギルドという・・・。

「・・・・・・・・」

「さあ。」

女の焦れた催促を聞くうちに、決意する。

無言のまま、剣を握った左手を開き、そのまま懐を探り・・・小さな宝玉を取り出す。

女の目が、宝玉に向かう。

「ほらよ、」

無造作に投げられた黒い小さな宝珠を、女が慌てて両手で受けた。

「開呪！」

灼熱の勾玉が、その正体だ。

一気に周辺の空気を焼き、女の身を巻き込んだ。

「ぎゃああああー!」

女の悲鳴が喉から絞り出される。

と、同時にセフは右手に集中し、すべての力を一瞬に込める。

王は思いがけないタイミングで引きずり上げられ、そのまま頭上へ放り投げられた。

一瞬の判断と、そして、やはり兄弟の似通った思考。

振りかぶった聖剣は、炎にぐしゃりと崩れた女の肉塊を両断する。

女は声もなく、ぐずぐずと、焼けた腐肉の池へと姿を変えた……。

度重なる実験の影響で、すでに人の肉体ですらなかったものか……。

まるで、下等な軟体生物であったかのような、無残な末路だった。

「……憐れな女だ……。」

誰を想うのか、王は立ち尽くしたまま、目を閉じている。

走馬灯のように脳裏を巡るのは、きつと、別の人物との想い出であろう……横たわったままのセフは、自身も一時の感傷に身を預ける。

術者を失った魔法陣は、これ以後、この国の夜を脅かすこともないだろう……。

日を改めて、消滅させた方が安心であろうか。

魔法陣の、血で描かれた図形の一部を黒く焦がして、宝玉は転がっている。

灼熱の球は太陽の輝きを宿し、周囲に陽炎を写し出していた。熱気に蒸せるほどだ。

金縛りが解け、熱さに堪りかねた者から、塔のはじへと避難する。

セフはなんとか半身を起こし、封呪の印を掛け直した。

一同が陰惨な空気に暗く沈んでいた、その時。

黒い小さな宝玉が、自身で転がり、ふわりと宙に浮かぶ。それは王の持つ聖剣の柄へと自身で収まり、そして、黒い霧を吹き上げた。

一瞬で王の身体を黒い霧が覆う。

「王さん！」

命知らずのルシーダが、即と王の手から剣を奪おうと手を伸ばす。

『わたしに触れてはいけない……』

王の声に重なって、何者かの声がそう告げ、ルシーダを見えない壁で弾き返した。

「うわっ!？」

派手な尻餅で、ルシーダは目をしばたかせる。

王は静かな足取りで、ゆっくりと塔のへりへと身を寄せた。

『……うつくしい景色だ……我の眠る大地は、美しい……』

膨れ上がる魔力、恐ろしい威圧感。

苦しい息のまま、セフは声を絞り出す。

「……何者だ、……お前は……?」

王は答えず、そのまま、とん、と床を蹴った。

兵士たちもルシーダもナツツも慌てて手を伸ばしたが、間に合わなかった……。

第三話

嘆きの森に展開していたギルドの本拠は壊滅したが、それは深く根を張る悪徳の、ほんの一部に過ぎなかつた……。ただの一施設、実験場の一つに過ぎない。

闇のギルドは世界に根を張り、世界を侵食し続けている。

アルザス本国には未だ無傷のギルド構成員が無数に存在している事実を、しかし、王も冒険者たちも知り得ない……。

本国の状況を誰よりも知る者は、今、死に向かつていた。全身血まみれで、地に這う。

残虐な敵により、切り刻まれ、苛まれていた。

明るい森林の片隅に、老いた將軍は死の淵を覗いている。

「神よ……、」

我が国を、救い給え。

絶望の中ですがり付く。

誰でもいい、この命をくれてやっていい、……魔神よ、この老いぼれの望みを聞け。

そこへ。

若き王が降り立った。

「……これはこれは国王陛下。」

アサシンは慇懃な態度に戻り、恭しく王を迎える。

「このような場所にまで、御足労頂き、恐縮至極……。事をついでに、あなた様にはここでお休み頂きましょう。」

殺意を込めて、アサシンは王を見た。

王は静かな眼差しをアサシンに向けていた。

「……、」

アサシンが、怯んで一步後ずさる。

麻薬のために、恐怖心などカケラも感じぬはずの自身がなぜ？

不可解な心境に、アサシン自身が戸惑っていた。

老将には、それが王でない事は一目で解かる。

王は、これほどの魔力を備えたバケモノではなかったからだ。声にならぬ口元が、しきりにその正体を問うていた。

老将の代わりに、アサシンが同じ意味合いの疑問を投げる。

「・・・いつたい、どういう事なのです・・・？」

あなたは、いつたい、何者です・・・？ 王ではない・・・？」

アサシンの緊張した質問に、王の器を借りた何者かは一切答えることがなかった。

しばしの沈黙と、ねめ回すような視線・・・。

そして、嫌悪の表情を作った。

「・・・お前達の作る波動は、気に食わぬ・・・」

理屈もなにもない、ただの感想でしかない。

しかし、ただそれだけの理由で、目の前のアサシンは命を奪われた。

「ぐ・・・!？」

胸を掻き穿る。

呼吸を止められ、アサシンの口がぱくぱくと開閉した。

・・・どう、と倒れ、痙攣の後に、動かなくなった・・・。

王は手を広げる。・・・それは、地下神殿で、ホルの身体を乗った魔神が行った行為とほぼ同じ形であり、そして、同じように黒い霧が吹き出した。

霧は、今度は細かな糸となり、針となって飛散した。

アルザスの大地を、その周辺の国々を、はるか大海を越えた大陸にまで及んで・・・。

彼の気に食わぬすべての波動の発生源を貫き通した。

このような大量殺戮は、史上、類を見ないだろう・・・。それが、同一人物による仕業だと、人々が気付いたならば、であるが、

ドラゴンによる大量殺戮は史上にも名高い。

それを上回る今回の殺戮は・・・歴史に残される事はなかった・・・
各地で起きた同時死の謎を、今しばらくは、誰も、畏れを抱いて研究しなかったためである。

逃げ場もない、確実な死を賜る、およそ理由もない暴力。

お気に召さない、それだけで死を賜るなど・・・ここが、そんな世界である事実は伏せられた。

このような脅威を、認めたくはない・・・。

アサシンの唱えた理屈はまことに正しかった。

この世は弱肉強食、強い者の理屈に従うのだ、と。

そして、もっとも強き者・・・「神」の理屈が、ごり押しで通ったのだ。

今、目の前に居るこの神が、この世の支配神であるのか、そんな事はどうでも良かった。

その正体も、死にゆく老将には関係がない事に思われた。

涙で霞む視界の中に、必死にその姿を焼き付けていたただけだ。

シンクロした意識の中に、今、世界で起きている事象がすべて流れてくる。

一瞬の閃光を放ち、次々に消える命の火。恐ろしいスピードで、アサシンが減る。

世界中から。

絶対的な存在感、圧倒的な力、それらが人間社会を嘲い、薙ぎ倒していく・・・。

自身が「法」である、と・・・逆らう事すら許されない。

畏敬の目で、ザルデインは王を仰ぎ見ている。

救世主の姿を。

例え、それが絶望に値する恐怖であろうが・・・。

この国は、救われたのだから。

「・・・王よ・・・、あなたが何者かは・・・知らぬが・・・、

「……感謝、す……る……」
両の目を微かに開いて、微笑を浮かべ、老将は静かに息を引き取った。

王の瞳は穏やかだ。

心地良い波動に身を委ね、一時、柔らかな森林の日差しを受けて、立っている。

目の前の死……。そして、大量殺戮にも、なんら心動かされることはない。

耳障りな雑音が消えた世界の奏でる音楽に、聞き入っているかのようにな……。うに……。

優しく、穏やかな、世界の音に耳を澄ませている。

いずれすぐ、かの雑音を響かせる者達は、どこからか沸いて来るに違いない事も承知で。

それも、些細なことではない。

成熟せぬ世界は、すぐに元の姿に戻る。それを承知で、耳障りを一瞬だけ、消した。

この存在からすれば、ただの気紛れに過ぎない。

雑音が、ひどく気に障っただけの事だ。

アサシンは死後に悔いているだろうか、……。上には上が居る、その理屈を忘れ果てていた自身を呪うしかないだろうか。ルール以前の問題で死なねばならぬ、などと……。思いもしなかっただろう事は確かだ。

巨大な力が幾つも存在し、当たり前前に事象に関わる世界であるから……。・「魔力」という禁呪のために、その影響は計り知れない。

およそ、不可能な事態などありませず、このような非道すら、存在し得た。

これが、魔力の介するこの世界の实体だ。

「神」が実存する世界の、真の姿。

多くの神が存在する……。およそ、天地創造の原初の神から魔神ま

で・・・すべてが、世界に関わっているなら、この世界は脅威に覆われているのだ。

弱者でしかない人間の都合に合わせて作られているわけもない。

王の身体を借りた古代の神は、やがて、その器から抜け出した。

王の身も、二つの死骸同様に、地に倒れ伏す。

聖剣は神々しい輝きを纏い、王の手に。

黒の宝珠を抱いて、ようやく剣は完成された。・・・『神降ろしの剣』 - グラン。

第四話

ラルフ王を発見したのは、塔への援軍として差し向けられた一軍の先鋒だった。

傍に倒れる老将と、アサシンとおぼしき男とは、すでに事切れていた。

王に外傷はなく、目覚めた時にも意識ははっきりと、目に見えておかしな部分などはない。

王は御無事、という報に、全軍が胸を撫で下ろした。

「陛下、護衛の兵は・・・？」

弟君、セフ様も向かわれたはず・・・、合流なされなかったのですか？」

簡単なながらも王を横たえるための陣が設営されており、その水口の中でカラルが問う。

王は、なぜ自分がここに居るのかわからない。

辺りを見回し、ホ口の入り口から見える木々に、戸惑いの視線を向けていた。

「・・・ここは・・・？」

「塔へ向かう途上の、森で御座います。」

今、塔へは先鋒軍の一部を差し向けております、・・・なにより、御無事で良かった・・・。」

自身が横たわる寝台の傍に、帆布に包まれた大きな荷物を見る。

王の視線に、カラルが声を落として答えた。

「・・・ザルデイン公の亡き骸です、アサシンとまみえ、相討ちで果てられたものかと・・・。」

帆布には至る所、血がにじみ、この老将が壮絶な死闘を演じたのだろぅ事が覗える。

「・・・そうか・・・。」

自身の疑っていた者が、また一人、悲壮な形でその疑惑を覆してみ

せた……。

王は目を伏せ、しばしの黙祷の後に、傍に控える将軍に指示を出す。「丁寧に弔ってやるがよい、……命を賭けて、この国に忠誠を示した勇士として。」

「は、」
それから程なく、差し向けていた兵の中から斥候が戻る。敵は全滅、重症を負う皇子及び負傷の兵士を保護、すでに塔を降り、合流のためはこちらへ向かっている、という報告が成された。

改めて、王は次々と指示を出す。

王城への全軍帰還と、一部医療部隊の塔への急行、さらに国内外での被害状況の調査。

そして、隣接国家への対応を、すでに考えに纏めていた……。
数々の謎は、謎のまま、歴史の闇に葬られる。

王妃を売ったのは、真実、誰であったのか……皇子を襲った怪物の正体、女アサシンの本当の目的が何であったか……また、皇子を逃がしたという黒幕の名すら、明かされる事無く、事件は終わりを告げた……。

セフがまみえたあのアサシン……ガルバ公を殺害した犯人も、今はもう、不明のまま。

一瞬にして、この世のほとんど全てのアサシンが、死をもって口を閉ざした今では……もう、それが誰であったかも解かり得ない。事件に遭遇した関係者の多くは、実際には、何も事件の真相に触れ得ない。

遠く、時を隔てた後の歴史家だけが、ああでもない、こうでもない、と、御託を並べるだけだ。

王城へ戻り、ついにアルザス王は弟との対面を果たし得た。

「……セフ……、久しいな……5年ぶりか……。」
「……ええ。」

複雑な胸中と経緯のため、どこかぎこちない挨拶だけを交わす。

「ひどい怪我を負っている、ゆつくりと休むがよい・・・、」
気遣うはずの言葉が、場に沈黙を呼び込んで、さらに居辛くさせる。
「・・・では、な。」

王は、何か言おうかと迷い、結局は何も言わずに部屋を出る。
やはり何を言えればいいのかも解からず、兄弟はそのまま別れてしま
った・・・。

一人、王城の自室で休むセフ。

5年ぶりに、自身の使っていた寝台に横たわって考えていた。
これでいいのだと思っっている、何も、話すことはない、と。

募る思いというものもなく、なぜ戻ったのかも自身で解からなく
らいだから。

置き去りにしてきた幾つかの心残りは解決出来た。

それだけで、良しとしよう、と。

5年前、ここで暮らしていた時のままで、この部屋は残されていた。
それだけで、満足だと思った・・・。

居るべき場所はここではない、それは充分に解かっっていて、それで
も、ここに居場所が残されている・・・それだけで、いいと思った。
人々が手の平を返したように自身を迎え入れてくれた時に、なぜだ
か、泣きたくなった。

だから・・・もう、いい。

心残りの一つは亡き王妃の魂とともに、今は王城の地に眠る。

誰に知られることもなく、けれど、今は母の腕に抱かれているだろ
う。

この、王城の下に。

自身の名を欲しがった、あの憐れな子供を思い、フィルは祈りを捧
げる。

それは誰に聞かれても、答えることの出来ない罪と秘密として、胸
の中へ仕舞う。

フィルは自身の剣を胸の前へ掲げ、目を閉じた。

騎士の儀礼、この闘いの中で失なわれた命への祈り。

向こうで、アシュが呼んでいる。

アルザス国王より正式に令状を受け、培養魔族のこの少年は近いうち旅に出る。

遠く、フィルリアへの使者として。

アルザスから、かの国へ、使節団が送られる事に決まったのには、セフの尽力も大きい。

魔法には遅れているこの国が、もっとも早くに訪れるべき場所である、と、各地を巡ってきた皇子は断言した。魔法大国フィルリア・

・その名は、すでにこの国にも知られている。

5年のうちに、大した進歩だと、皇子は手放しで喜んだ。

魔力を無視して独自の道を行こうとしたアルザスも、この5年で、その愚を悟ったようだ、と。

傍らで仲間の声を聞き、フィルは複雑な心境を持って余っていた。

魔力を無視し、そして滅びた母国を想った。

「フィル！・・・あ、えと・・・今、時間はいい？」

どうもアシュは遠慮が深くていけない、と、フィルは苦笑を浮かべる。

「別に構わないよ、僕は暇を持て余してるくらいだから。」

そう、療養中のセフや、物珍しさで人気のルシーダ、後宮の王妃たちに追い回されているナッツと違い、フィルは至って呑気に一日を過ごしている。

武人の鏡のような青年であるから、女には近寄り難い兵舎にばかり居座っていて、自身の価値を知らないままだった。フィルも皇子の身分でありながら、王城よりは兵舎の方が落ち着くのだ。

アシュはまた、首を捻る。

・・・そうかなあ・・・、フィルも、人気が高いと聞いていたけど・・・。

「で、僕に何か用かい？」

話を振られて、アシュは思考を切り換えて、この話題はそれきりに

なった。

フィルが自身の人気を知る機会は、もう少し先伸ばしだ。

「明日、使節団の出発と共に、僕もここを出る事になったんだ。・・・少し不安で、少し嬉しい・・・。けど・・・、すごく、寂しいんだ・・・。」

みんなとはこれでお別れなんだって思うと・・・、」
不安定な心情を持って余しているのだろう、アシュは聞いてくれる誰かを求めて来たのだと、フィルは理解し、彼の頭髪をくしゃくしゃと掻き回した。

そうして、笑い飛ばす。いつも、仲間たちがそうするように。

「何を言ってるんだ、アシュ。」

僕はお別れだなんて、一度も思ったことはない。

・・・生きて、また会おう。アシュ。」

世界は広いが、魔力によって狭められている。

だから、いつでも懐かしい顔とは巡り会えるんだ、と。

生きている限り、いつでも、それは叶えられるささやかな望みだ、と。

仲間たちはいつでも笑い飛ばす。

だから・・・。

フィルも、同じようにアシュに教えた。

「元気で。アシュ。」

・・・幸運を！」

生きている限り、幸運である限り、願いは叶えられるから。

フィルリアへの使節は、その後、盛大な見送りのパレードと共に、王城を抜け、城下を通り、そして港で船に乗り込み、出立した。ちぎれんばかりに手を振って、アシュは旅立っていった・・・。

最終話

それから……。

ザルデイン公の国葬の後、喪に服す期間が明けて、すぐ。

5年ぶりに戻った皇子を迎えて、盛大な祝典が行われる運びとなった。

亡国の危機は過ぎ去り、英霊として、この国を守り散った老将を称える意味合いも含んで、近隣国家からの使者が多く迎えられる。

結局、チーム内でも負傷したのはセフ一人、という結末だ。

フィルは翌日には全回復し、むしろ元気過ぎるほどで暇を持て余しているくらいで。

朝から練兵所へ赴き、一般兵にまじって剣を振るっていた。

セフも、混血の脅威的な回復力をもってすれば、数日のうちには回復するだろうと見られている。

ただ……。

「セフ様には御機嫌麗しゅう……、わたくし、エミリア・フロウ・ベアレントと申します。」

豪華に着飾った美しい娘が、品の良い仕草で挨拶をしてよこす。

セフは寝台から身を起こし、半ばうんざりと、略式の挨拶を返した。なんとと言っても、これで7人目である。そろそろ、表面で取り繕うのも限界に近い。

すでに夜も更け、部屋の外に立っていたはずの番兵も、気を利かせてか、姿がないのだ。

セフにもこの国の思惑は手に取るように理解出来る。

さっさと結婚でもさせて、逃げられないようにしようというのだらう。

この国は親切の押し売りのような国であるから。

まったくもって、この国の女は積極的である事を、この国出身の男はよく知っている。

どうせ、王族の連なりの誰それが、自身の娘を急かして送り込んだのだ、と・・・セフは溜息を零した。なにせセフには腹違いの兄弟がそれこそ把握しきれないほどに存在し、さらにその枝葉ときたら3ケタは下らないほどだ。

ほとんどは庶民と変わりない暮らしであるから、こんな時には逆転を狙う。

第二王位継承権、というセフの肩書きはしばらく消えそうにないからだ。

昼間は近隣諸侯の姫君が、夜には自身の血に連なる王族の誰かが・・・代わる代わるに、この歳若い皇子を誘惑に訪れた。

「気分が優れないので、申し訳ないが・・・」

「まあ、それは大変・・・！ ささ、わたくしに構わず、横におなりくださいまし。」

「い、いや・・・」

今度の娘はちと手強い。さも具合が悪い、というポーズを取って追い返そうとした皇子が、逆に寝床へ押し倒されるといふ失態を冒した。

アルザスは一夫多妻だから、優良株の男には自然と年頃の娘が群がってくる。そして、王とは違い、ハーレムを作る事は許されないから、上限は決められている・・・6人だ。

しかし、人気の高い男なら、6人の粹などあつという間に埋まってしまう。

しかもこの相手は、魔族にも引けを取らぬ強い戦士で、いずれは王の右腕となるだろうと噂されるくらいの実力者だ。自然、娘達も力の入りようが違った。

はつきりと、既成事実を狙って、良家の子女が迫ってくるのだった。アルザスの男は通常、夜具をつけず、裸で眠る。旅のうちにそういう習性のごときは改めたはずが、気を許しすぎたか、ここ数日は悪癖が現われていた。

しまった、と思う間に、娘の柔らかな唇がセフの腹を這う。

慌ててセフは娘の首筋目がけて手刀を振るった。
ぴし、

「う・・・！」

仕方なく、セフは娘に当て身を食わせ、そろり、と隣に横たえる。

「衛兵！　すぐに来い、きちんと役目を果たせ！」

いい加減、頭に來たセフの怒鳴り声が、また夜の闇に響いた。

翌日、式典は滞りなく終了し、そのまま夜会へと雪崩れ込む。

「ほへ・・・！」

こうして見ると、やっぱり皇子サマなんだね。」

招かれて迎賓館に來たルシーダが、傍のナッツに耳打ちする。

ナッツも目を丸くして、盗み見ていた。

初めて目にする正装の仲間、普段のならず者に近い風貌を隠し、
気取った顔で立っていた。

アルザスの第二皇子・・・、旅の間には盗賊の首領にしか見えない
男、セフ。

近隣の姫君には惜しめない笑顔を振り撒き、王族の名に恥じぬ振舞
いで会場内を泳ぎ渡っている姿は、なんだか見知らぬ他人のようで、
声を掛けることが憚られる。

戸惑いを隠せない二人に、やはり式典用に正装をしたフィルが近付
いた。

「どうしたんだ？　二人共・・・なんだか、らしくないなあ。」
さすがは王族、堂々とした騎士姿のフィルに、ナッツは恨めしげな
視線を投げる。借り物とはとても思えないほど、見事に騎士の正装
を着こなしている。

「フィルも、なんだかフィルじゃないし・・・。」

卑屈な声でナッツが呟けば、フィルは意味が解からず首を傾げる。

ナッツはまだいいが、ルシーダなど、ドレスが似合わず、ついには
いつもの軽装で出席した。

会場内で浮き上がり、本人は平然としているが、ある種、注目の的

だった。

「・・・そうだ。二人共、荷物を纏めておいてくれ。今夜中に、ここを抜け出す事に決まったから。」

小声でフィルは二人に耳打ちし、少し離れた場所に居るセフをちらりと覗き見た。

「・・・どうやら、セフの提案であるらしい。」

「なある・・・」

ルシーダもナッツも、それで合点がいった。

あのセフが、ここまで猫被りしているのもおかしい、と思っていたのだ。

事件は片付いた。

とうの昔に、必要だった薬草も手に入っている。

「・・・あとは、どうやって脱出するか、という段階。」

残念ながら、あそこで優雅にダンスなど踊っている、アルザスの第二皇子には、この国で優雅に余生を送る気持ちなど、これっぽっちもないのだと、仲間たちは知らされた。

おかしくて堪らないルシーダが、また、いつぞやの時のように、笑いを噛み殺していた。

巨大な猫を頭上に載せて、皇子様は次なるお相手の腕を取る。

ふと気付いた。

「・・・いつぞやは、助けて頂き、ありがとうございました・・・」

「

はにかんだ笑顔を向ける姫君には見覚えがある。魔物の森に敢然と挑んだ勇敢な姫君だ。

勇敢な上に慎ましやかな姫君は、なお控え目な口調で続ける。

「名乗る間もないままで・・・御無礼をお許し頂けますか・・・？」

「いや、・・・こちらこそ。」

恋の熱に潤んだ姫君の瞳が、少しばかりの罪悪感を呼び起こす。

明日には居なくなる男に熱を上げているこの姫君に、なんと答える

べきなのか。

「わたくしの名を、お聞き届けくださいます・・・？」

「・・・・・・・・ええ、」

少しばかり、引き攣った笑みを浮かべてしまい、内心の汗を拭う。

華麗な衣装に身を包み、それぞれの思惑の中、夜会は華やかに幕を閉じた。

そして、計画通りにその夜更け。

一行はアルザスの国境を密かに越えて、姿を消した・・・。

皇子の寝所には、当て身を食わされたどこかの子女が置き去りだ。

アルザスはまた暫く騒ぎになった。それから数ヶ月。

風の便りにアルザス王が新しい妃を迎えた事を、弟の皇子は遠い異国で聞き及ぶ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293u/>

LEGEND アルザス編

2011年6月25日11時25分発行